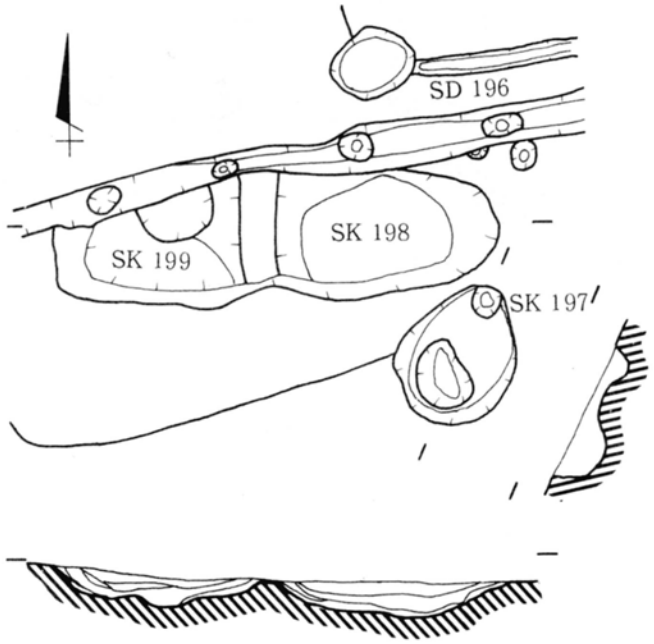
一連の土壙と考えられ、中央部で分かれる。SK 198 土壙は深さ約30cmを計り、鍋底状を呈する。SK199 土壙は深さ約15cmを計り、鍋底状に落ち込むが、中央部がピット状に落ち込む。

SK 200 土 壙（第 165 図）

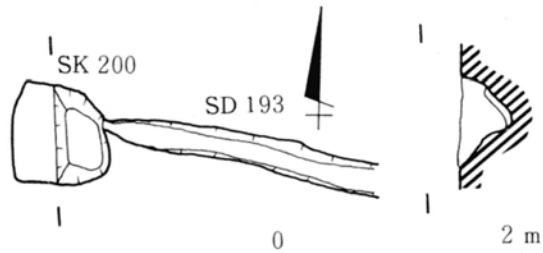
SD 193 溝状遺構と接続すると考えられる。不整方形を呈し、深さ約40cmを計る。

SK 201 土 壙（第 166 図）

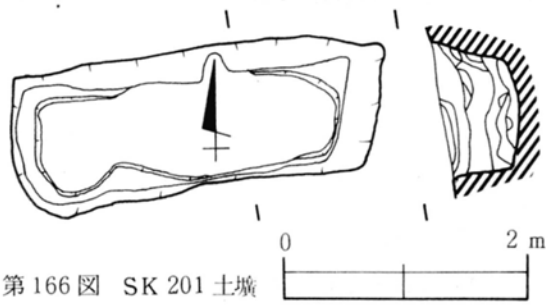
不整長方形を呈し、深さ約65cmを計る。埋土は砂層であるが、南壁及び北壁の一部には粘土を塗り付けたような状態で、底面にもみられる。又、水分が少々残っており、木屑、籾殻等が検出した。



第 164 図　SK 197・198・199 土壙



第 165 図　SK 200 土壙



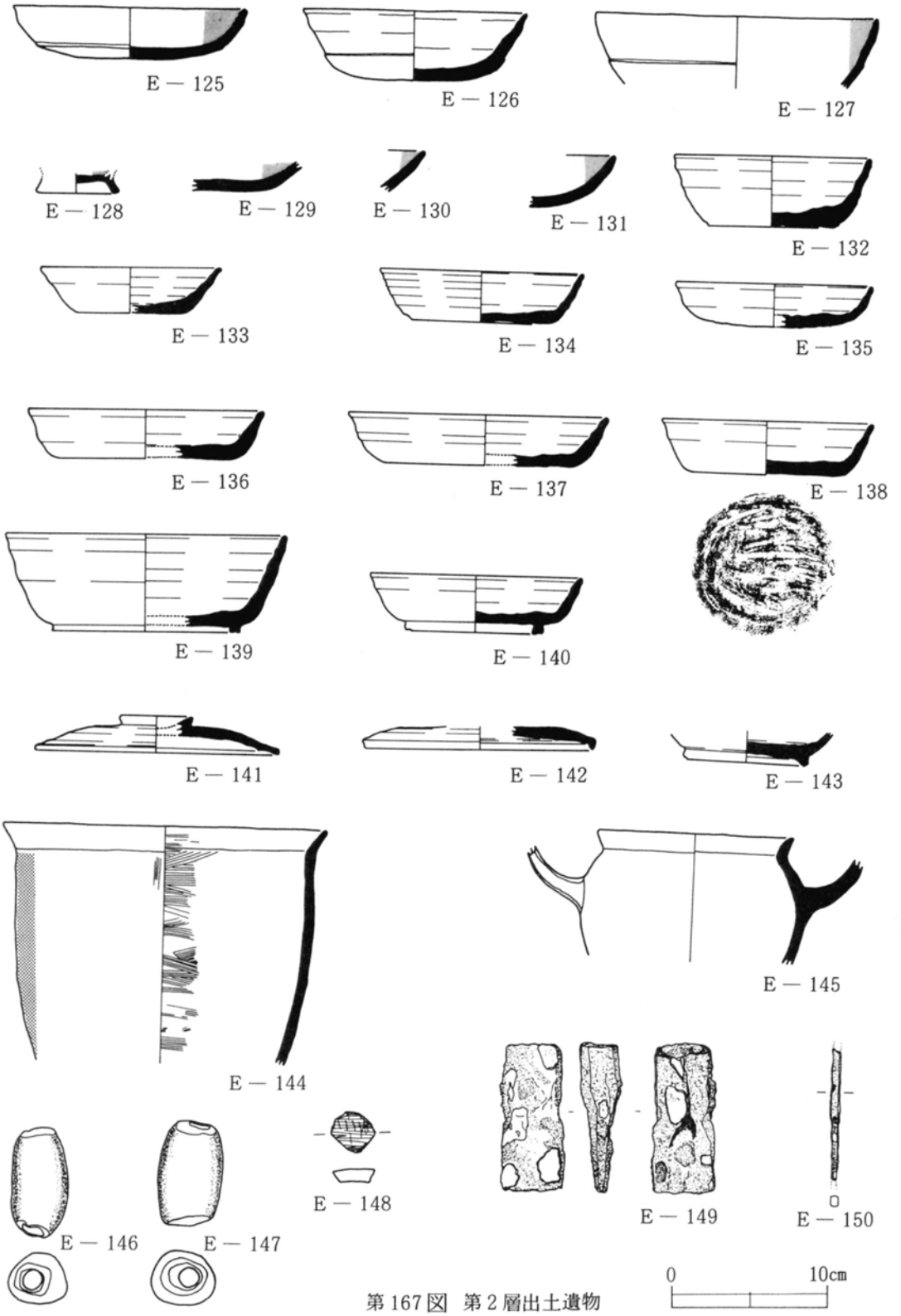
第 166 図　SK 201 土壙

各層出土遺物

基本的には、第 1 層耕作土、第 2 層褐色砂質土、第 3 層暗褐色砂質土に分かれるが、調査区南側は層位分類が困難であり茶褐色砂質土とし、調査区北東部の一部に赤褐色砂質土がみられるが、これは第 2 層と同層である。

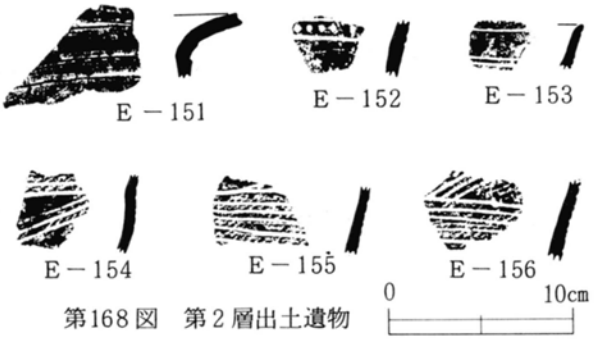
(第 2 層出土遺物)(第167、168図、図版95、96)

E－125、 E－127、 E－131 は内黒土師器坏である。E－125、E－127は体部中央部よりやや下方に段をもち、ヘラミガキを行い、E－125は丸底気味で手持ちヘラケズリを行う。E－128 は高台で、台部内外面にヘラミガキが施され、光沢がみられる。E－129は体部外面がヘラミガキされ、底部は不定方向にカキ目を施す。E－131は丸底を呈し、ヘラミガキが施されている。E－126は黒色処理を施さない土師器坏である。体部外面中央部よりやや下方に段をもち、段を境にして上方は横ナデを行う。手持ちヘラケズリを行い、丸底を呈する。色調は赤橙色を呈し、胎土、焼成共に良好である。E－144は土師器甕



第167図　第2層出土遺物

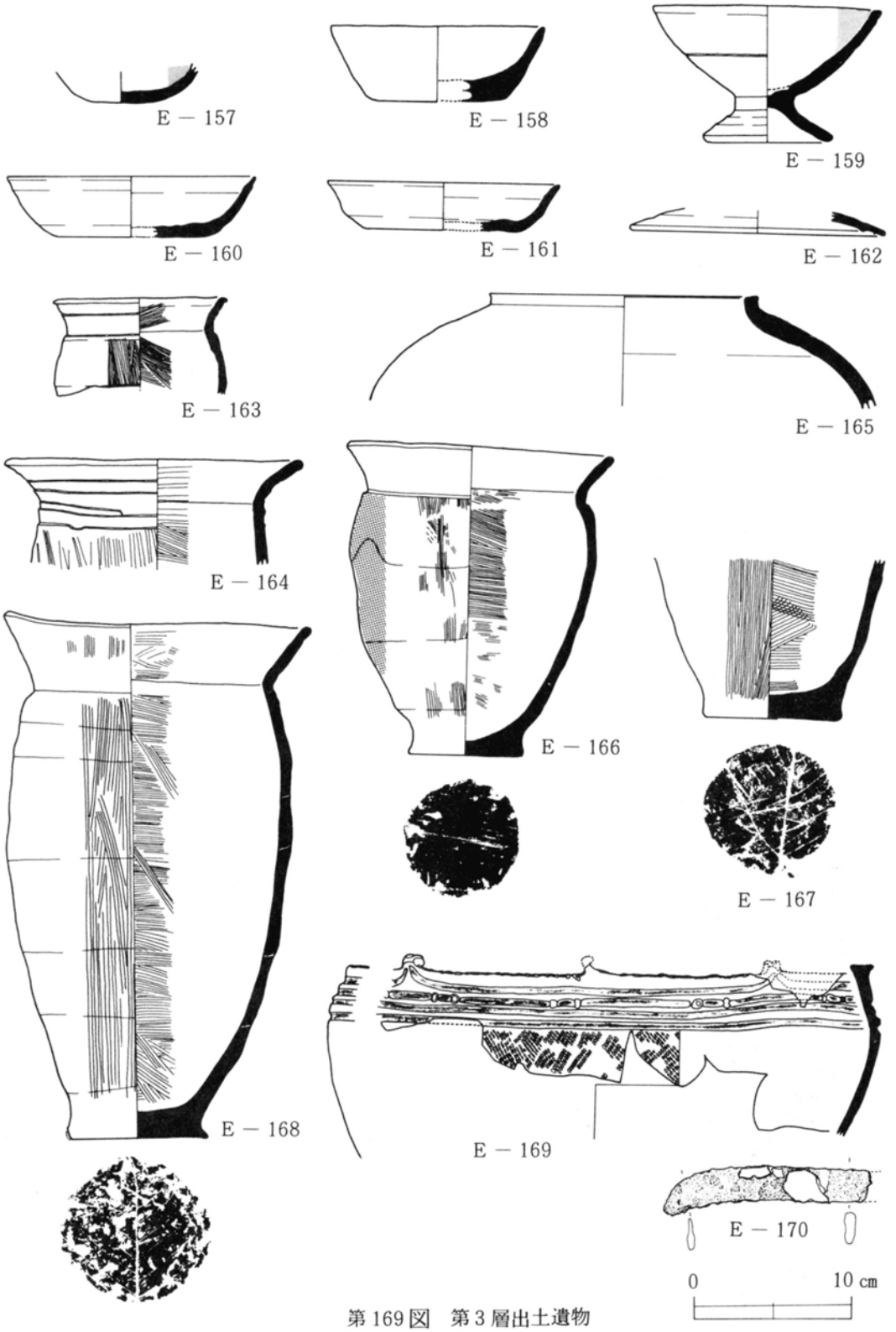
頸部が「く」の字状を呈し、外面は縦位方向のカキ目を施した後にヘラミガキを行い、内面は横位方向にカキ目を施し、口縁内外面は横ナデを行う。胎土に砂粒を含み、焼成はやや弱く、煤状炭化物の付着がみられる。E－145は小型の土師器甕に把手の付いたものである。体部はやや球形を呈し、頸部は「く」の字状を呈する。口縁部内外面に横ナデを行う。赤橙色を呈し、焼成良好で、外面に煤状炭化物の付着がみられる。E－132～E－138は須恵器坏。E－139、E－140、E－143は須恵器台付坏である。E－132、E－133、E－136、E－137は底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整。E－132は内外面に火ダスキがみられる。E－133は焼成がやや弱く、他は良好である。E－134の底部切り離しは回転ヘラ切り、軽くナデを行う。外面に火ダスキ及び重ね焼痕がみられる。E－135は底部切り離しは回転ヘラ切り、ヘラ状の工具によるナデを行う。胎土に砂粒及び小石粒が含まれ、焼成は良好である。E－138も底部切り離しは回転ヘラ切り、ヘラ状の工具によるナデを行う。胎土、焼成共に良好である。E－139、E－140、E－143は底部切り離しが回転ヘラ切り、高台を貼り付けた後周縁部にナデを行う。E－139は灰褐色を呈し、胎土、焼成共に良好。E－140は外面に自然釉がかかる。青灰色を呈し、胎土に小石粒を含み、焼成良好である。E－143は灰白色を呈し、焼成はやや弱い。E－141、E－142は須恵器蓋。E－141は偏平なツマミを有し、天井部外面には回転ヘラケズリを行い、切り離しは不明である。内面には「かえり」がつく。青灰色を呈し、焼成良好である。E－142は天井部外面にヘラケズリを行い、切り離しは不明。外面に自然釉がかかる。青灰色を呈し、焼成良好である。E－146、E－147は土錘。E－148は須恵器甕の破片を利用した円盤状土製品。E－149は鉄斧で、銎部と刃部からなる。銎部は袋状を呈し、両端が密着する。断面は隅丸の長方形をなし、銹化が著しい。E－150は鉄鏃で、先端部が欠損、茎部の断面は四角形を呈する。銹化が著しい。E－151は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕。E－152は沈線間に連続刺突文を施す。E－153は平行沈線を巡す。E－154、E－156は弥生式土器で同一個体の破片であり、E－155、E－156は接合する。



第168図　第2層出土遺物

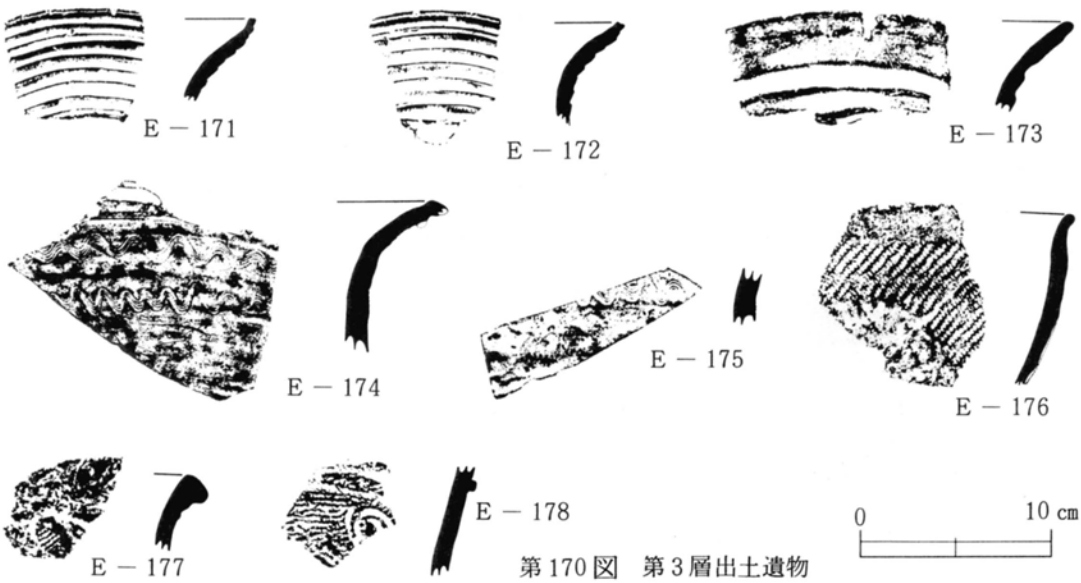
（第3層出土遺物）（第169、170図、図版96、97）

E－157は内黒土師器坏である。内外面にヘラミガキを施し、丸底を呈する。底部内外面の器壁が剝落し、特に外面が著しい。E－158は手捏ね土師器坏で、やや椀状を呈する。胎土に小石粒を含み、焼成が弱く、雑な作りである。E－159は内黒土師器高坏。坏部外面中央部に軽い段を形成し、段を境にして上方が横位方向のヘラミガキを施し、下方及び坏部と脚部の接合部周辺は斜位方向へヘラミガキを行う。坏部と脚部の接合箇所は割れ口により観察される。色調は暗褐色で黒色部

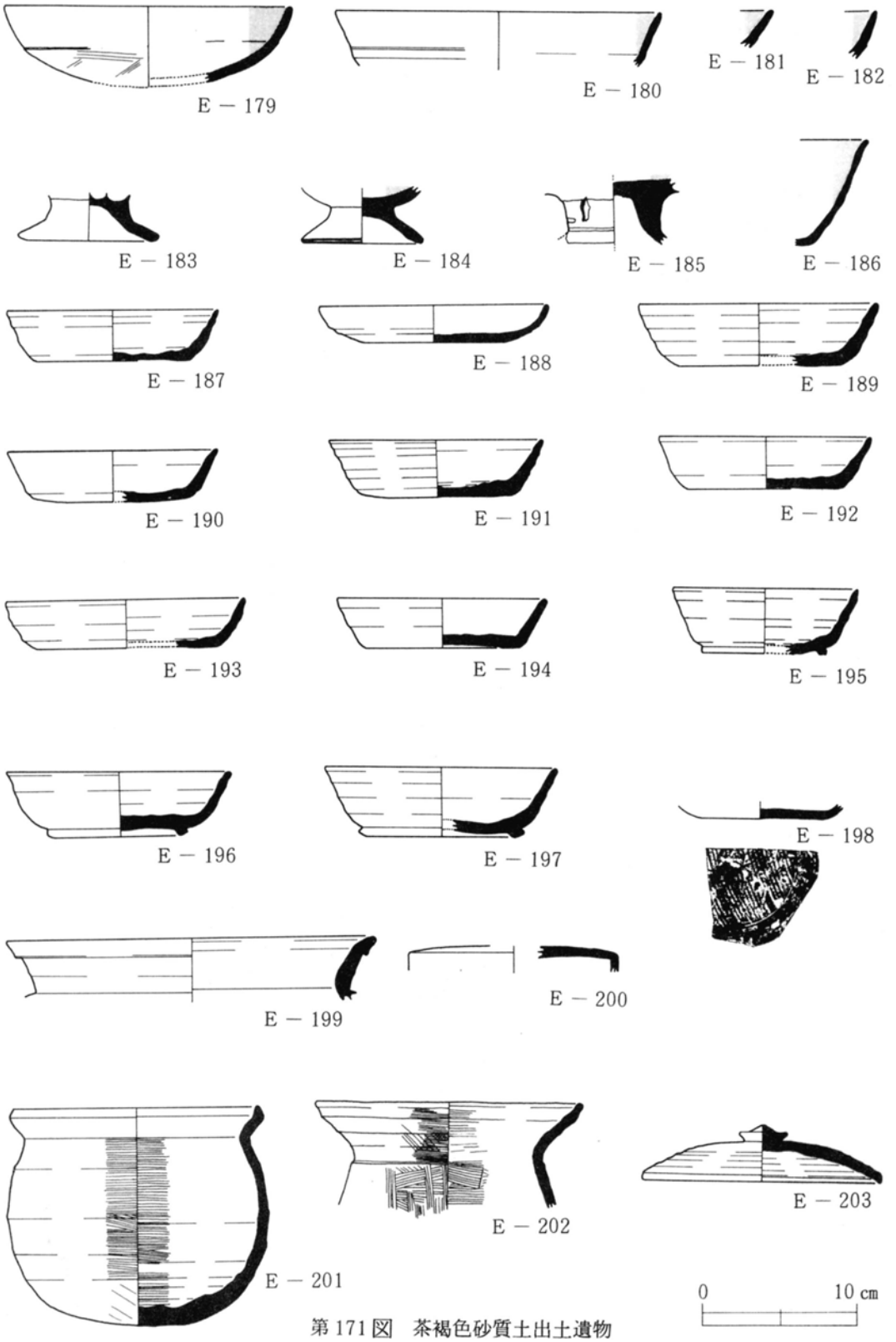


第169図　第3層出土遺物

分がみられ、胎土、焼成共に良好である。E－163、E－164、E－166、E－168は土師器甕。E－163は比較的小形で、頸部が「く」の字状を呈し、口唇部が外側につまみ出されており、口縁部と頸部に段を有する。外面が縦位方向のカキ目、内面は工具を強く押し付けてカキ目を施す。色調は赤褐色をなし、胎土、焼成共に良好である。E－164は頸部が「く」の字状を呈し、口縁部から頸部にかけて段を有する。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。胎土に小石粒を含み、焼成は良好である。E－166は頸部が「く」の字状を呈し、段をもつ。外面は縦位方向にカキ目を施した後に、荒いヘラミガキを行い、内面は横位方向及び斜位方向にカキ目を施す。口縁部内外面は横ナデを行う。胎土に砂粒、小石粒を多量に含み、焼成は良好である。外面の一部及び内面全体に煤状炭化物の付着がみられ、底部に笹葉痕をもつ。E－167は作りの良い土器で、底部に木葉痕をもち、数枚重ねて敷いてある。E－168は頸部が「く」の字状を呈し、外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向及び斜位方向のカキ目を施す。胎土に小石粒が多く混入し、焼成は良好である。底部に木葉痕をもつ。E－160、E－161は底部切り離しが回転ヘラ切り、無調整の須恵器坏で、E－160は青灰色を呈し、内面に自然釉がかかり、E－161は灰色を呈し、共に焼成良好である。E－162は須恵器蓋の破片である。外面中央部は回転ヘラケズリがみられ、内面にかえりがつく。青灰色を呈し、焼成良好である。E－165は須恵器短頸壺。口縁部は短く垂直に立ち、口唇部が外側に少々つまみ出されている。外面に自然釉がかかり、青灰色を呈し、焼成良好である。E－169は鉢型の器形をなすと考えられる縄文式土器である。口唇上に4個の大突起と中間にそれぞれ小突起が付され、突起間には連続刺突文を施す。口縁部には4条の沈線が巡るが、上から1条目の沈線は大突起と大突起を連絡するような沈線で大突起の方へ向って切れる。上から2条目の沈線は2個1対の小瘤状の突起で区切られている。体部はL{R/R}単節斜縄文を施文し、煤状炭化物の付着がみられる。E－170は鉄鎌で、刃部は内反りする。銹化が著しい。E－171、E－173は口



第170図　第3層出土遺物

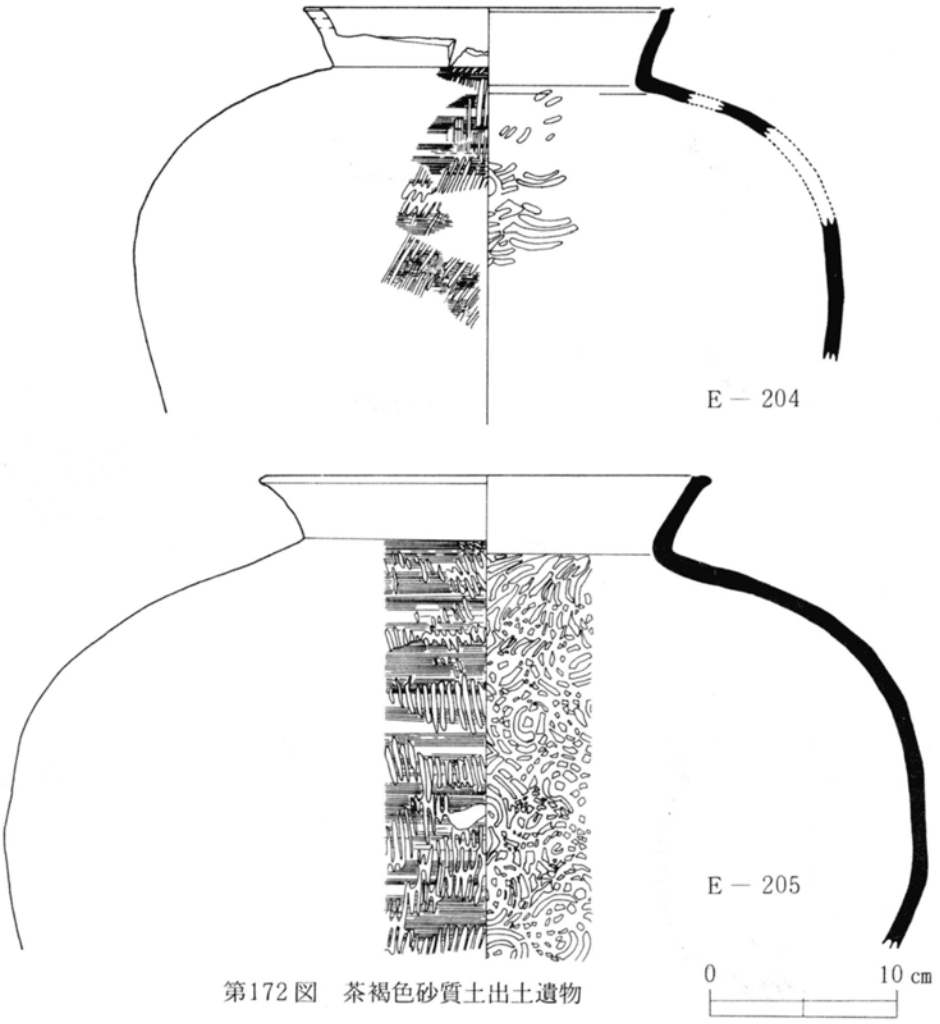


第171図　茶褐色砂質土出土遺物

縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕で、E－171、E－172は同一個体で接合する。E－174 E－175は須恵器大甕の口縁部で、大きく外反し、クシ目による波状文が施されている。同一個体で接合する。E－176、E－178は縄文式土器の破片である。

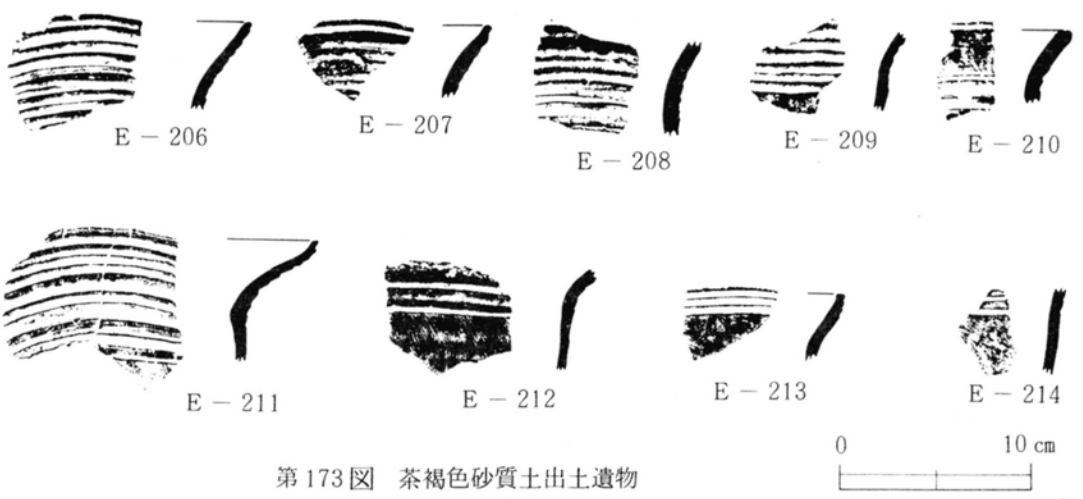
（茶褐色砂質土出土遺物）（第171、172、173、174図、図版97、98、99）

E－179～E－182、E－186は内黒土師器坏である。E－179は体部外面中央部に軽い段をもち、段を境に上方がヘラミガキ、下方及び底部は不定方向にカキ目を施した後に、ヘラミガキを行う。内面はヘラミガキを行う。E－180、E－182は小破片であるが、体部外面中央部に段をもち、対応する内面にもくびれを有する。ヘラミガキが施される。E－186は平底で内湾気味に立ち上り、口縁部がやや外反する。外面はカキ目を施した後にヘラミガキを行い、内面はヘラミガキを行うが、ヘラミガキは雑なものである。E－183、E－185は土師器高坏の脚部。E－184、E－185は黒色処理を施し、E－183は坏部が欠損しているために不明である。E－185は脚部内面に記号かと



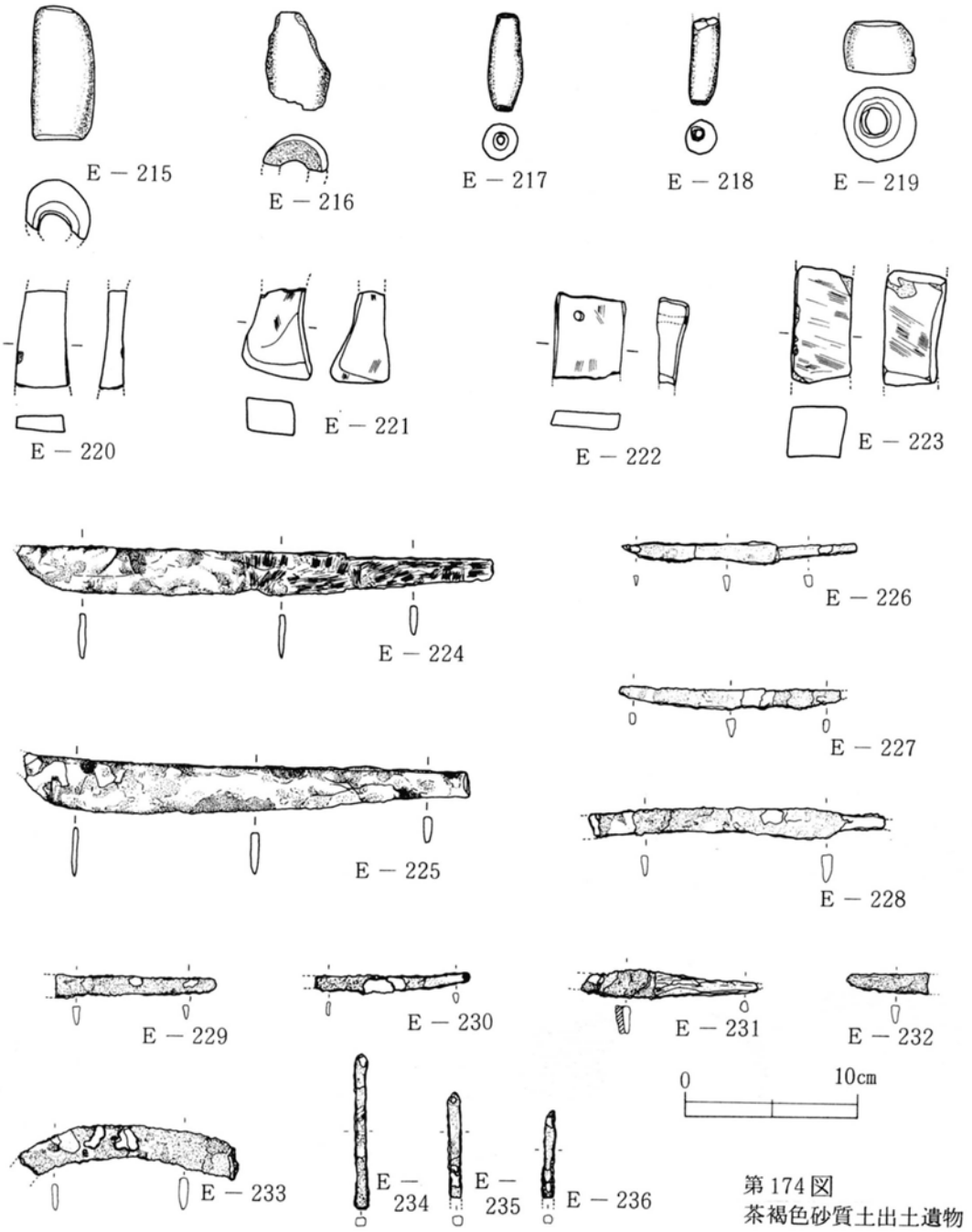
第172図　茶褐色砂質土出土遺物

考えられる刻線が認められ、窓がみられる。E－201は小型の土師器甕。体部は丸味をもち、頸部が「く」の字状に外反して立ち上り内湾する。ロクロ整形され、外面は横位方向及び斜位方向にカキ目を施し、底部は粗雑にヘラケズリを行い丸底を呈し、内面は横位方向にカキ目を施す。胎土に小石粒が多量に混入し、焼成は良好である。E－202は土師器甕。頸部が「く」の字状に外反し、段をもつ。E－187、E－194は須恵器坏。E－187、E－189、E－193は底部切り離しが回転ヘラ切り、無調整。E－189は灰白色を呈し、胎土に砂粒、小石粒を多量に含み、焼成は弱い。E－193は重ね焼痕が認められる。E－188は底部切り離しが回転糸切りと考えられ、底部及び体下部に回転ヘラケズリ調整を施す。外面口縁部及び内面には自然釉がかかる。E－195、E－197は須恵器台付坏で、底部切り離しは回転ヘラ切り、高台を貼り付けた後に周縁部にナデを行う。E－197は内面に漆の付着が認められる。E－198は須恵器坏の底部で、棒状又はヘラ状工具によりナデ調整、外周は回転ヘラケズリを施し、切り離し不明。E－199は須恵器甕の口縁部。E－200、E－203は須恵器蓋。E－200は切り離し不明で、天井部から肩部にかけてゆるやかに傾斜し、肩部よりほぼ直角に折れ曲り口縁部に至る。E－203は偏平なツマミをもち、中心部はわずかに擬宝珠状を呈する。回転ヘラケズリ調整を施し、切り離し不明。E－204、E－205は須恵器大甕。共に丸底を呈すと考えられ、外面は平行タタキ板痕、内面は同心円状のアテ板痕が認められ、外面には擦痕が巡る。E－204の内面はナデを行う。E－206、E－213は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕。E－214は2条の平行沈線が巡り、カキ目がみられる土師器甕。E－215～E－219は土錘。E－220～E－223は砥石で、いずれも4面を使用し、E－222は孔を穿ったもので、E－223は3面に刻線状の使用痕が著しい。石質は、E－220が凝灰岩、E－221～E－223が緑色凝灰岩である。E－224、E－225は直刀。E－224は切先を一部欠損。直角に切り込んだ両区で、刀身は切先にむかうに従って幅広となり、平棟で、鋒は「ふくらつく」である。茎部及び刀身の一部には木質が銹着する。E－225も切先が欠損。区は斜めに浅い刃区で、刀身は切先にむかうに従って



第173図　茶褐色砂質土出土遺物

幅広となり、平棟で、鋒は「ふくらつく」である。E－226、E－232は刀子。E－226は両区で、刀身部はわずかに外反りする。E－228は刃区。E－229は茎部で、刀区。E－230は茎部で、区は不明。E－231は木質が銹着し、区は不明。E－232は刀身の破片。すべて平棟で、E－226、E－227、E－232の鋒は「ふくらつく」である。E－233は鉄鎌で、刃部は内反りし、木柄着装部の折り返しは刃部に対し直角である。E－234～E－236は鉄鏃で、茎部断面は四角形を呈し、



第174図
茶褐色砂質土出土遺物

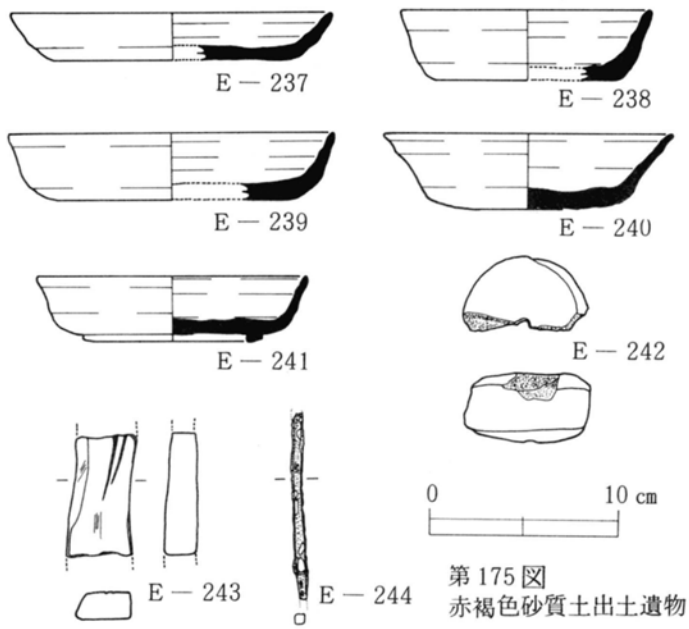
E－234、E－235の先端部は偏平である。鉄製品はいずれも銹化が著しい。

（赤褐色砂質土出土遺物）（第175、176図、図版100）

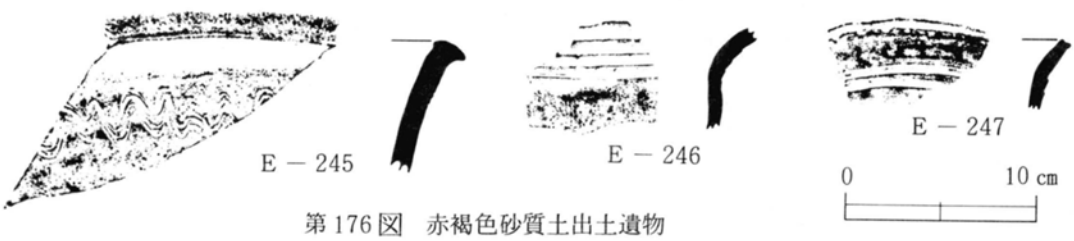
E－237、E－240の底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整の須恵器坏である。E－237、E－239は一部に自然釉がかかり、E－238は胎土に小石粒を多量に含む。E－240は底部がやや丸底風を呈する。E－241は須恵器台付坏。底部切り離しは回転ヘラ切り、高台を貼り付けた後に周縁部にナデを行う。青灰色を呈し、焼成良好。E－242は紡錘車。E－243は砥石で、4面を使用しており、かなり磨滅し、1面にキズ状のものがみられる。石質は緑色凝灰岩である。E－244は鉄鏃で、先端部が欠損し、断面が四角形を呈する。銹化が著しい。E－246、E－247は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。E－245は須恵器大甕の口縁部で、クシ目による波状文がみられる。

（出土地点不明遺物）（第177図、図版100）

E－248～E－250は土師器甕である。E－248は体部下半及び底部が欠損。頸部が「く」の字状を呈し、段をもつ。外面は縦位方向にカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキを行う。内面は横位方向及び斜位方向にカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキをまばらに行う。口縁部内外面は横ナデを行う。内外面全体に煤状炭化物の付着がみられ、器肉が薄く、もろい。E－249は頸部が「く」の字状に大きく外反する。外面は縦位方向にカキ目を施しているが、かなり磨滅し、特に上半が著しい。内面は横位方向にカキ目を施す。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや弱い。輪積み痕が明瞭に観



第175図
赤褐色砂質土出土遺物

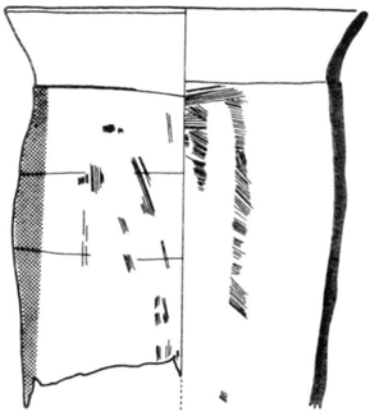


第176図　赤褐色砂質土出土遺物

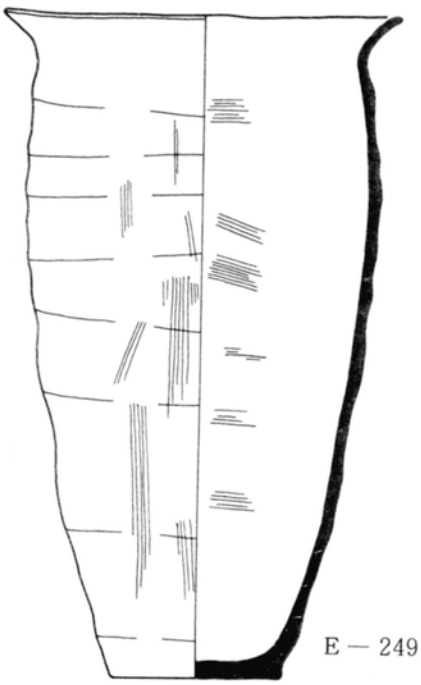
察される。E－250は口縁部及び体部が約½程欠損する。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向にカキ目を施す。淡黄色を呈し、胎土、焼成共に良好である。輪積み痕が明瞭に観察でき、底部に笹葉痕をもつ。

（E地区出土瓦）（第178、179図）

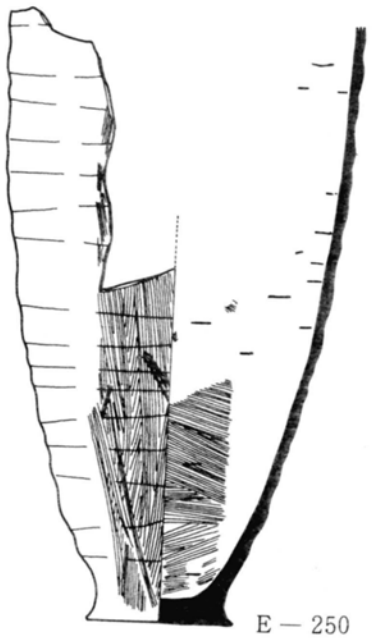
E地区からは住居跡のカマド、埋土、それに包含層等から平・丸瓦片が出土している。出土瓦は凸面が縄目叩き痕、凹面は布目痕跡を有するもので、これまで秋田城跡外郭築地遺構等から出土した瓦と同種のものである。しかしE地区で検出された遺構は住居跡と一棟の掘立柱建物跡のみで、



E－248



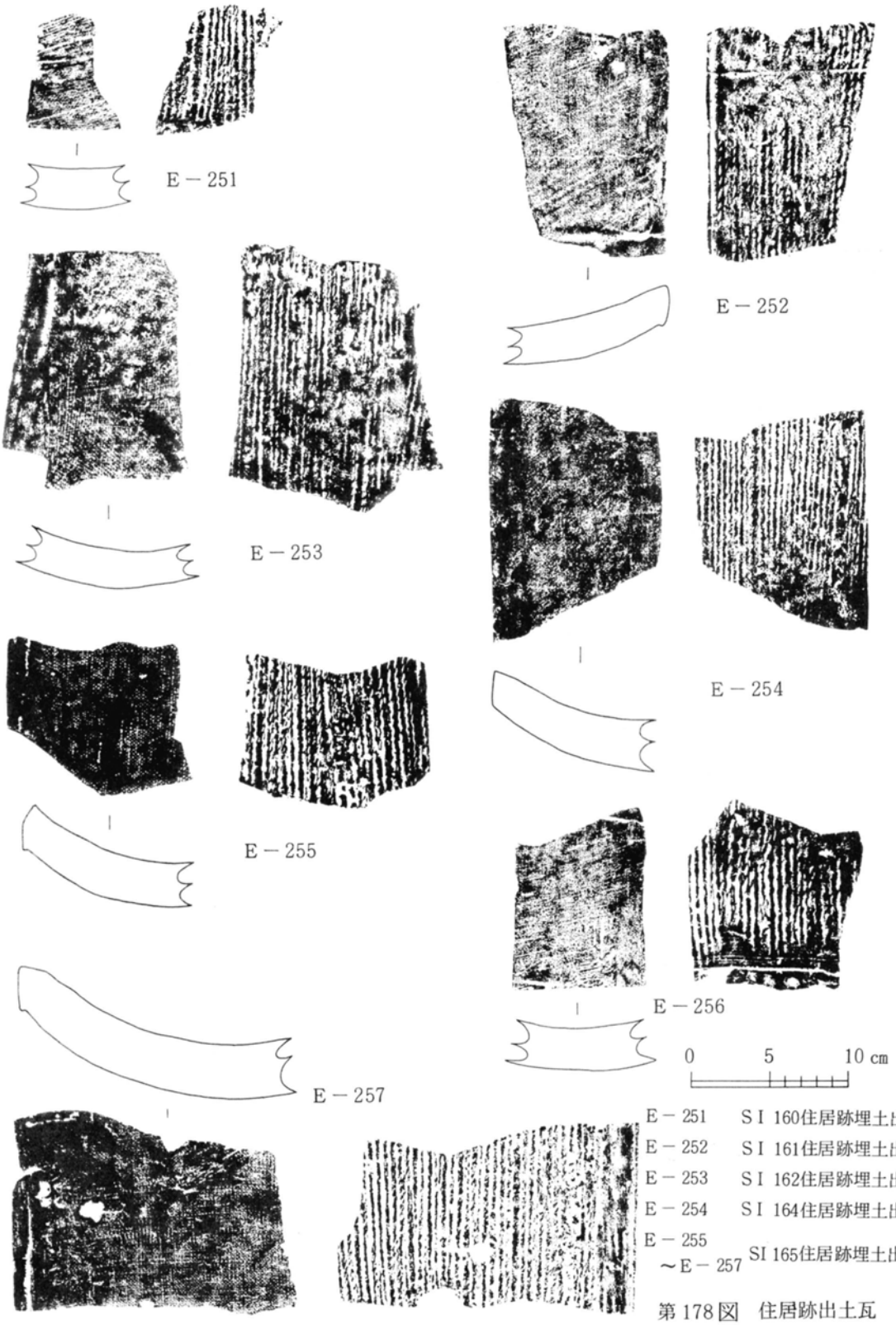
E－249



E－250

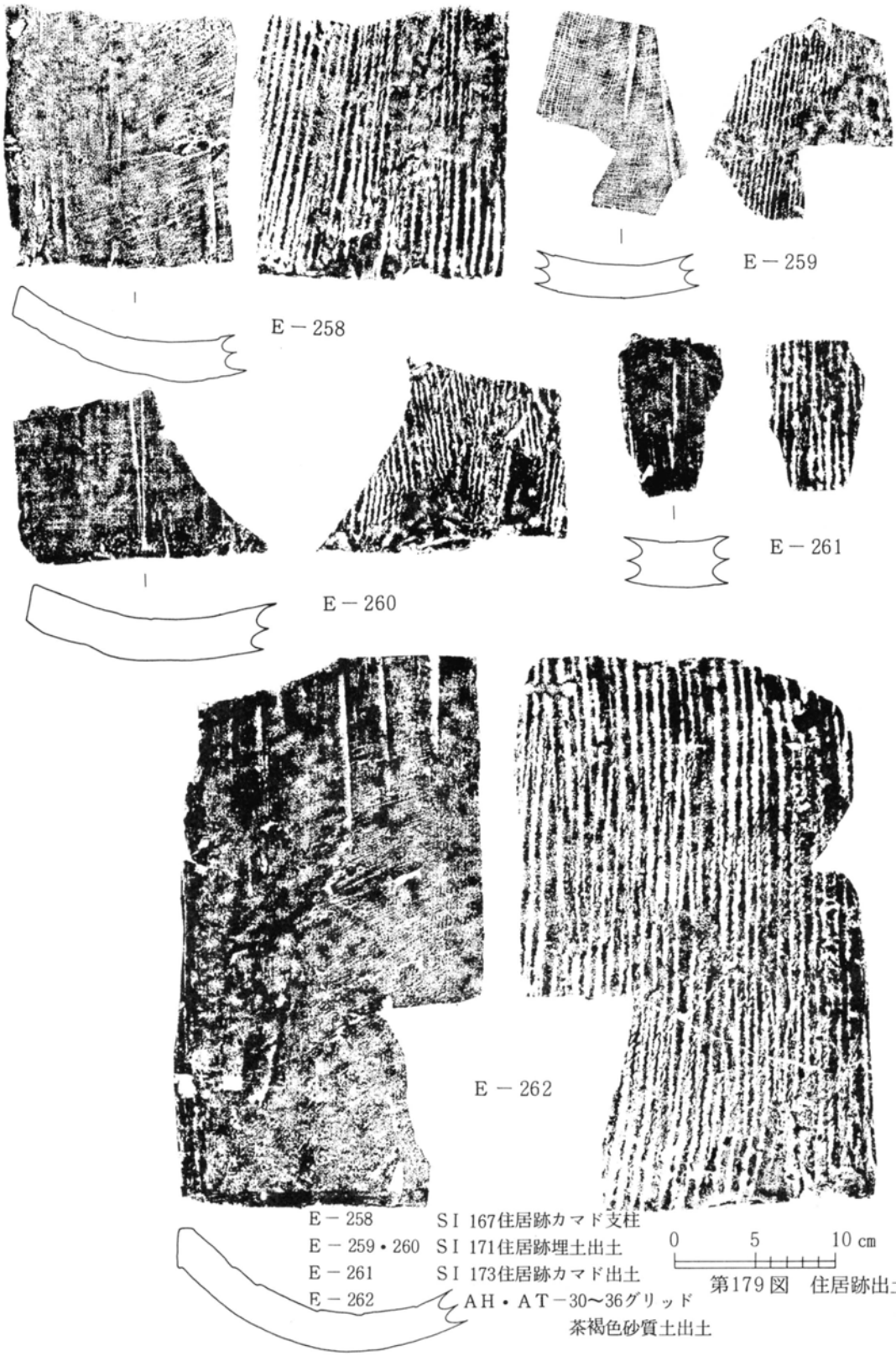
0　10cm

第177図　出土地点不明遺物



E－251　SI 160住居跡埋土出土
E－252　SI 161住居跡埋土出土
E－253　SI 162住居跡埋土出土
E－254　SI 164住居跡埋土出土
E－255～E－257　SI 165住居跡埋土出土

第178図　住居跡出土瓦



E－258　SI 167住居跡カマド支柱
E－259・260　SI 171住居跡埋土出土
E－261　SI 173住居跡カマド出土
E－262　AH・AT－30～36グリッド
茶褐色砂質土出土

0　5　10 cm

第179図　住居跡出土瓦

瓦を使用したと考えられる建物跡は検出されていない。なお鐙瓦、格子目瓦は出土していない。

＜平瓦＞

平瓦は布目、桶板痕跡等から一枚造りと桶巻造りの技法が認められる。

凸面の縄目叩きは、大部分が長軸方向に直線的に施されているが、E－258、E－260のように斜方向の場合も認められる。また叩き板は縄目痕跡から推察して数種類の工具を用いていると考えられる。

凹面の布目は比較的細かく、織目もあまり乱れていない。布端が凹面の側縁内側に認められるものはE－255、また側縁にまで布目が及ぶものにはE－260がある。上記以外の瓦はE－252、E－254、E－257、E－262のようにナデやケズリ等の二次整形が施されている。特にE－254の凹面側縁は、ていねいなケズリが施されている。側面の面取りはE－255が二面、その他はすべて一面取りである。面取りの角度は凹面を上にした場合、側面がほぼ垂直な状態を示す。またE－258 E－260～E－262凹面には、桶巻造り痕跡と考えられる巾1㎝～3.5㎝程の板状の凹みが認められる。

＜丸瓦＞

丸瓦は平瓦に比較し量的にかなり少ない。また有段丸瓦は数点のみ出土している。成形は円筒に粘土を巻きつけ、乾燥後二等分する技法を用いる。したがって側面には分割面と分割した際の非整形面が認められる。この場合の分割線はあらかじめ円筒状模骨に取りつけられている棒状の凸材によるものである。凸面は、縄目の叩き板で叩き締めた後、縄目をスリ消しているが、スリ消しが不十分で縄目の残存するものもある。

丸・平瓦凹面に共通する糸切り痕は、少片のため、糸の入る位置や方向については明確ではない。

第Ⅳ章　総　　括

第1節　A地区の調査について

A地区の飛砂層面からは、土壙墓、土壙、溝状遺構が検出されているが、ここでは主に土壙墓について考えてみたい。

土壙墓がつくられた位置をみてみると、北西部、中央部に小群としてのまとまりがあるように思われるが、南東部をのぞきほぼ全域につくられており、ブロック単位の群としては捉えきれないようである。形態は、方形、不整形を呈するST 001、010を除いて、径約60㎝～1.2 mの範囲に入る円形、楕円形を呈するものが大部分であり、深さは、約20㎝程度が最も多く、深いものでも約30㎝位である。ほとんどの土壙墓には、焼土、木炭が含まれ、ST 006、009にはこれらの他にこぶし大の礫が多数入れられており、焼けて黒くなっているものも多くみられる。出土遺物は、火葬人骨の細片が多く、副葬品として「六文銭」が納められているものもある。ST 018、1基は土葬人骨一体が埋葬されている。

次に埋葬形態について考えてみたい。上記のように土壙墓内には、焼土、木炭、焼けた礫などが入っていることなどから土壙墓内で火葬したとも考えられる（註１）。しかし、焼土、木炭の量が少なく、焼け面もみられないこと、また土壙墓周辺に焼土、木炭なども散乱していないこと、さらに出土する人骨もきわめて細片であることなどの状況からみて、60cm～ 1.2 mほどの土壙墓内で火葬にすることは若干無理があるように思われる。むしろ他の場所で火葬にふし、主な遺骨は蔵骨器等に納め、細片は焼土、木炭などと一緒に土壙墓内に埋葬したと考えた方が妥当のように思われる。

次に、これら土壙墓群と遺跡内で検出した他遺構との関連を考えてみたい。遺跡一帯は、佐竹氏が秋田に移封される以前には「前城町」、「後城町」の町並があったことが知られており（註２）、これを裏づけるようにＣ地区からは建物跡、井戸跡が検出された。また、遺跡の東方約 150 m～ 200 mの焼山西麓付近には、妙覚寺、大悲寺跡があったことが知られている。土壙墓を検出したＡ地区は、一段高い地区であり、土壙墓以外に土壙、溝状遺構が検出されただけである。以上のことから推定すると、これら土壙墓群は、集落に付随する墓地跡と考えられる。また付近に寺院が存在していたことを考慮すると、寺院の墓域として考えることもできる。墓地跡に関連する遺物としては、Ｂ地区ＳＸ 043 から塔婆板、Ｃ地区から宝篋印塔が出土している。

最後に、土壙墓が営まれていた時期についてみると、６基の土壙墓から副葬品として「六文銭」が出土しているが、これらの古銭は年代にもかなり開きがあり、時期を決定する決め手とは必ずしもならない性格のものであるが、最も新しい「洪武通宝」にその手掛りを求めるならば14世紀頃が考えられるし、また土壙墓埋土内出土の遺物をみると、小片であるが ST 008 から、珠洲陶編年によると第４期、14世紀後半に位置ずけられる、珠洲系陶器鉢の口縁部が出土し、ST 009 、020 からは古瀬戸・美濃の破片が出土していることから考えてもほぼ14世紀～15世紀を中心とした時期と考えてよいように思われる。さらに、このＡ地区土壙墓群はＢ、Ｃ地区と関連する遺構であることを考慮すると、存続期間は遺物からみると大きく13世紀から16世紀中葉の時期が考えられるが、文献によれば慶長、元和の頃まで町並が存在していたことが記されている（註３）。

註１　池崎譲二、中世の博多　―　祇園町遺跡の調査　―　『月刑文化財９』Ｓ54．９
　　この中で円形土壙墓内で火葬し、そのまま埋葬した例が記載されている。

註２　内田武志『菅江真澄随筆集』「水の面影」平凡社東洋文庫Ｓ．44

註３　同　　上

第２節　Ｂ地区の調査について

Ｂ地区からは、 SX 043 円形竪穴状遺構１基が検出されただけで、他の遺構は認められなかった。以下 SX 043 円形竪穴状遺構を概観し、機能ならびに年代について考えてみたい。 SX 043 円形竪穴状遺構は、地山砂層を掘り込んでつくられた長径約15ｍ、短径約12.5ｍ、深さ約 5.5 mでほぼ円形を呈し、底部が擂鉢状をなす大規模なものである。底部は短期間のうちに土砂が埋ったと考えら

れ、約 1.5 m上位の面が本遺構の機能を果していたと思われる。このことは、砂が部分的に酸化し、非常に固い面を形成していること。さらに、こぶし大の河原石が敷つめられた状態や、崩落した形で多数認められることから判別できる。

埋土中からは、多量の陶磁器、木製品や、犬・馬骨などが投棄された状態で出土し、また上部から崩落した礫も多数混入している。以上のことを含めて本遺構の性格を考える上での特徴をあげると、第1に、多数検出されている礫は本来この周辺には認められないものであり、さらに人為的に敷きつめた痕跡も認められる。第2に、酸化して固くなった面、さらにそれを突き破ると湧水があること、また埋土が泥炭であり、木製品の遺存状態から考えると常に水が溜っていたと考えられること。第3に、本遺構以外に周辺に遺構が認められず、集落は若干北に離れて存在することなどがあげられる。

周辺一帯は、中世～近世初期に集落が存在していたことが文献上からも明らかであり（註1）、後城遺跡から中世～近世初期の遺構として、A地区から土壙墓群、C地区からは建物跡、井戸跡が検出されている。これらのことを考え合せると本遺構は集落の共同貯水施設としての機能を果していたものと考えられる。存続期間については、C地区出土遺物からみて13世紀～16世紀中葉の時期が考えられるが、SX 043 から出土する遺物は主に15世紀～16世紀末葉を中心とする時期が考えられている。これは、集落最盛時には貯水施設として機能し、荒廃してきた時期すなわち16世紀中葉以降には不用物の投棄場になったことをあらわしていると思われる。

註1　内田武志『菅面真澄随筆集』「水の江影」 平凡社東洋文庫、S44

第3節　A、B、C地区出土の陶磁器について

出土した陶磁器は輸入陶磁である青磁、白磁、染付、国内産の古瀬戸・美濃、珠洲系陶器、越前、唐津、更に小片であるが須恵器、土師器、赤褐色土器がある。このように古代から中世、近世初頭に位置づけられる遺物の出土があるが、量的には青磁、古瀬戸・美濃、珠洲系陶器に、まとまった資料を得ることができた。

ここではB、C地区の出土陶磁器を中心にその様相について概観し、年代についてふれてみたい。

青磁としては全国で普遍的に出土している蓮弁文碗、稜花皿がある。蓮弁文碗は巾広の浮彫によるもので、鎬の明瞭なものから、不鮮明なもの、更に鎬のないものまであり、釉色も澄んだ青色、緑色を帯びたもの、褐色のものなど種々認められる。これら浮彫による巾広の蓮弁文碗の年代については13世紀～14世紀（宋・元）のものと考えられている。又、蓮弁の便化した14～15世紀に位置するものなどがある（註1）。 B地区で多く出土したこまかい蓮弁、いわゆる蓮弁鎬文の碗は前述の巾広の浮彫による蓮弁文碗より後出で15～16世紀、或いは明中期15世紀末から16世紀末と考えられる（註2）。 この類でB地区出土の中に見込みに「顧氏……」の刻印の認められるものがある。

類品は県内でも秋田市八田山の沢長者屋敷、横手市金沢町金沢柵跡などから出土しており、比較的内陸部までその分布をみることができる。口縁がやや不規則で内面に荒い劃花文が施されている稜花皿はこのこまかい蓮弁鎬文の碗と伴出することが知られ、やはり15世紀末から16世紀末、明中期に位置づけられている（註３）。

白磁はいわゆる口禿の碗が１点あり、これは13世紀から14世紀にかけて華南で量産されたものといわれ、器形的には福岡市今津古墓出土のものに類品をみることができる（註４）。 白磁の皿類では比較的厚手のつくりで釉は黄味を帯び、やわらかい感じのもので、高台に浅い削り込みのある例が認められる。又薄手のつくりであるがやはり釉は乳白色の小盃、更にやや青味をおびた透明性の釉のかかった皿、小盃などがある。いずれも明中期15世紀末から16世紀末と考えられ、類品は石川県小松市波佐谷左城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、広島県草戸千軒町遺跡などにみることができる。

染付はＢ地区出土の渦巻状の唐草文を外面全体に配し、見込みに草花文を描いた皿、又Ｃ地区出土の便化された玉取獅子文、腰部に光芒状のバショウ文を放射状にあらわした皿などがあり、類品は福井県一乗谷朝倉氏遺跡などにみられ16世紀と考えられている（註５）。

以上輸入陶磁類は13世紀～16世紀末までの年代で、宋、元から明中期までの製品と考えられるものがある。

次に国内産の陶磁類についてみてみる。古瀬戸・美濃といわれる灰釉、鉄釉の施釉陶器の出土がある。ここでは古瀬戸・美濃の厳密な識別ができなかったが、形態、技法などについては楢崎彰一氏の古瀬戸の編年と対比した（註６）。器種としては香炉、梅瓶、四足盤、四耳壺、平埦、天目茶埦、小皿、卸し皿、小仏花瓶などがある。香炉は袴腰で口径が器高より大きい偏平なもので低い獣足がつく15世紀中頃（古瀬戸第４段階）、梅瓶は蕨手と花文を組み合わせた丸彫り劃画文様が施され、14世紀代（古瀬戸第３段階）、四足盤は折縁で底部からの立上りがやや外に開くもので14世紀代（古瀬戸第３段階）の製品と考えられる。卸し皿はいずれも口縁部が開き気味で、口縁端部が折り返されるものがあり卸し皿としては後出のものと考えられ、14世紀（古瀬戸第３段階）から15世紀（同第４段階）、平埦は削り出しによる高台で体部が直線的に開き、口縁直下で内屈する器形で釉調もいわゆる黄瀬戸といわれる黄味を帯びたものと、輪高台で丸味を帯びた体部で釉調が緑色のものがあり、前者は、15世紀末から16世紀中葉（第５段階）、後者はこれより前出の形態と考えられ、14世紀前半（第３段階）、天目茶埦は削り出しによる内反りの高台で、口縁直下がわずかに内屈し段を形づくるもの、口縁を内屈させ丸くおさめているものがあり、前者は15世紀末から16世紀中葉（第５段階）後者はこれより前出で15世紀代（第４段階）の年代が考えられる。小皿は削り出しによる低い台の付くものとロクロから切り離しのままのものがある。施釉が口縁のみのいわゆる縁釉皿が多いが、全体に施釉し見込みに印花文のあるものがあり、底部は染付小皿を模倣したと思われる碁筒底となっている。いずれも15世紀末から16世紀中葉（第５段階）と考えられる。以上のように古瀬戸・美濃の製品については14世紀（第３段階）から16世紀中葉（第５段階）、南北朝期後半

から室町期後半までと考えられる製品が認められる。

国内産の陶器としては他に珠洲系陶器、越前がある。越前は個体数も少なく明確でないが14世紀後半に位置づけられる口縁部破片の出土があった（註７）。

珠洲系陶器は従来まで珠洲陶そのものであるか、地元産のものか問題となっていたが、最近、県内にも中世陶器の窯跡があることが確認され、製品が珠洲陶の技法、形態に類似するものであることが判明した（註８）。又、珠洲陶の研究を重ねてこられた吉岡康暢氏の御教示によると、本遺跡出土のものは胎土、甕の口縁の調整などに珠洲陶とは異なる点があるとのことで、ここでは珠洲系陶器の名称を用いた。ただ、編年については、吉岡氏の珠洲陶の編年に従った（註９）。

珠洲系陶器の器種は珠洲系同様、甕、壺、片口鉢の基本３器種で、壺にも珠洲陶でいうＡ種と、Ｂ種の技法が認められる。 全体形の明確な出土遺物を珠洲陶の編年に対比してみると、片口鉢では珠洲第Ⅳ期（14世紀後半）に位置づけられ、底部静止糸切りで口縁部は肥肉につくり出され、端部が水平、或いはわずかに内傾し、卸し目は８～10本を１単位とする太い条線で、単位間はやや間隔をもつものである。又、内傾する口縁形態で口縁部に波状の櫛歯文のあるものも多く認められる。これらを従来、吉岡氏はⅤ期（15世紀）としていたが、更に口縁形態などから細分し、Ⅴ期（15世紀後半）、Ⅵ期（15世紀後半）、Ⅶ期（16世紀前半）を設定している（註10）。この分類の詳細については明確でないが、口縁形態を観察する限りにおいてはⅤ～Ⅶに対比されるものが認められ、特にＢ地区からの出土が多い。他に第Ⅱ、第Ⅲ期にみられる繊細な卸し目で底部回転糸切りものが出土している。甕は口縁に最大径をもち、頸部が明瞭にくびれ、端部に短かい角縁を取りつけた口縁で第Ⅳ期に対比される。又、同様に短かい角縁、玉縁を取りつけたものもあり第Ⅳ期以降と考えられる。他に第Ⅱ期（13世紀中葉）に対比される長い口縁形態で先端を外屈させわずかに引きだしたものが１点出土している。

珠洲系陶器には以上のように第Ⅱ期あるいは第Ⅲ期（13世紀中葉から14世紀前半）に比定されるものがＣ地区から数点出土しているが、大部分が第Ⅳ期あるいは第Ⅴ期以降で、Ｂ地区からは特に第Ⅴ期以降（15世紀前半以降から16世紀中葉）の製品が多く出土した。

出土陶磁器を概観すると以上のように、輸入陶磁は宋、元から明中期、13世紀から16世紀、国産陶器もほぼ同じ、13世紀中葉から16世紀中葉に位置づけられる珠洲系陶器、14世紀から16世紀中葉に位置づけられる古瀬戸・美濃の出土があり、遺跡の存続期間が長期に渡っていたことがうかがえる。更に、厳密な出土量の対比は無いが、珠洲系陶器は第Ⅳ期（14世紀後半）、第Ⅴ期（15世紀前半）以降、古瀬戸・美濃では第４・５段階（15世紀から16世紀中葉）、青磁、白磁、染付は15世紀から16世紀の明中期の製品が最も多く認められ、15世紀代から16世紀中葉に後城遺跡の最盛期を求めることができよう。

註１　矢部良明「日本出土の唐宋時代の陶磁」『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館編　1978

註2　長谷部楽爾「日本出土の元・明の陶磁」『日本出土の中国陶磁』1978

註3　同　上

註4　同　上

註5　同　上

福井県教育委員会朝倉氏遺跡調査研究所『一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ・Ⅺ』1976・1979

註6　楢崎彰一「瀬戸」『世界陶磁全集3　日本中世』小学館　1977

註7　東北・北陸中世陶器検討会（於　鶴岡　1980）にて、福井県陶芸館　田中照久氏よりご教示いただいた。

註8　県内に於いて、二ツ井町茂谷沢と南外村大畑にて窯跡を確認、大畑窯跡は1980年8月に発掘調査を行っており報告書作成中である。

註9　吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集3　日本中世』小学館　1977

註10　吉岡康暢「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」東北・北陸中世陶器検討会資料　1980

第4節　E地区の調査について

E地区では奈良時代から平安時代の集落が検出されたが、ここではその住居跡の変遷と出土遺物等について若干の考察を述べてみたい。

住居跡

竪穴住居跡はE、F地区合わせて33軒検出された。このうちF地区検出の住居跡は、昭和52年12月の試掘調査時に確認されたもので、グリッド調査を原則としたため住居跡の規模等についての詳細は不明である。

さてE地区で検出された32軒の住居跡は、すべて飛砂層上に構築され、さらにその上部は1m～5mの飛砂が覆っていることは先に述べた。また当地区においては、住居跡の変遷を考察する前に特筆しなければならない遺構がある。それは住居跡群を方形に取り囲む溝状遺構である。本遺構は一見溝状を呈するが、調査の結果底面にいくつかのピットが検出されるところから柵列（あるいは垣）、塀の柱を埋設するための布掘地業と考えられる。

この柵列遺構はある時期の住居跡と重複関係にあることが判明しており、当地区住居跡の変遷を知る上で重要な遺構となり得るであろう。

当地区検出の住居跡変遷には次の数項目が重要な基準材料と考えられる。一、住居跡相互の重複二、カマド付設方向、位置、三、柵列遺構と住居跡の重複、そして最後に各住居跡出土土器の比較検討である。

なお住居跡にはSI記号を付してあるが、本節においては単に番号のみとする。

まず重複している住居跡ブロックでの新旧については、新しい方から165→170→176→177号、187→191→190号、160→167→168号、161→174号、162→171号、169→172号、164→181→172号の前後関係が成り立つ。

カマドは付設方向によって二大別できる。すなわち東壁と南壁に付設する場合である。東壁付設のカマドは、主軸の異なる182号と東壁南寄りの163号を除けばすべて北寄りに位置する。一方南壁付設のカマドは、壁の西か東側に位置する。この場合は165、170、176号と168、167号の重複関係に認められる如く新しくなるにつれて東側に移築する傾向が認められる。しかしカマド個々の相違については大きな変化は認められない。このように見てくると遺構の切り合い等によってカマドが検出されなかった住居跡についてもある程度の推測が可能となってくる。すなわち、177号は東壁北寄りに、184号は東壁に付設されていることが考えられる。次に方形に回る柵列遺構との関係はどうであろうか。重複関係にあるのは182、185、186、189号であるが、いずれも柵列遺構が住居跡に先行していることが確認されている。さらに最も遺存状況の良好な182号と比較するならば南に接する181号もカマド位置、主軸等から推測して同時期とすることが可能であろう。柵列遺構と住居跡については、その方位を異にする181、182号が柵列遺構よりも古く、その他の住居跡については主軸がほぼ同方位を示すことから柵列遺構と同期か新しいものと考えられる。

以上のように住居跡の重複、カマド、主軸等遺構面を中心に考えてくると次の如くⅣ期に分類することができよう。

第Ⅰ期は柵列遺構より古い住居跡、182、185、186、189号であろう。

第Ⅱ期は東壁北寄りにカマドを付設し、比較的小形の住居跡、162、174、175、177、183、187号である。

第Ⅲ期は南壁西寄りにカマドを付設する住居跡、161、164、176、168、170号である。

第Ⅳ期は南壁東寄りにカマドを付設する住居跡、165、169号である。

その他の数軒の住居跡については形態的に何期に分類できるか不明なものがある。例えば167号は、カマド位置を考えれば第Ⅳ期に分類できるが南壁がまったく同一であることから単なるカマドのみの作り替えの可能性も考えられる。また170号は、165、176号との重複が認められるが、カマド位置を考慮すれば第Ⅲ期に近い時期が考えられる。

そこで次に、もう一つの項目である出土遺物の比較検討によって時期変遷あるいは形態的に分類不可能だった数軒の住居跡についても考察を試みたい。

出土土器

出土土器は土師器、須恵器と少量の瓦片である。量的には土師器甕類が最も多く、須恵器類は比較的少い。したがって時期変遷を考察するには形態・整形で特徴ある土師器甕の比較検討が妥当と考えられる。瓦は秋田城の外郭築地線の調査で多量に出土しているが、後城遺跡出土の瓦もまったく同一のものである。少量とは言え同一の瓦が出土することは、集落自体が秋田城と密接な関係にあることを示唆している。

第Ⅰ期とした住居跡でもっとも出土量の豊富な181、182号についてみてみよう。土師器坏、高

坏は非ロクロ成形で内面は黒色処理が施されている。高坏は低い脚が付き、坏部は内外面ともヘラミガキが施されている。また内外面には段や稜は認められない。甕は薄手で長胴、胴の張りが弱いという点では他の甕類と同様であるが、個々の相異は整形段階において最も特徴が認められる。頸部は単に「く」字状に大きく外反するもの、あるいは頸部から口縁部にかけて数条の段が巡る両者があり量的には後者の形態が多い。また口唇部は平面的に整形され、さらに中央部に沈線の凹みを有するものと、わずかであるが丸味を帯びた両者が認められる。体部整形は内外面ともカキ目を施し、外面においてはカキ目後に縦方向に細かいヘラミガキを施す。上述の形態、整形技法と類似する土器は、178、180号から出土している。180号のカマドは南壁付近で検出できなかったことから東壁の可能性が考えられる。しかも第Ⅱ期とした176号に切られていることからしても第Ⅰ期に分類することが可能であろう。

第Ⅱ期に伴う土器の特徴は175、187号の甕に認められる。第Ⅰ期の特徴であった頸部に数条の段を有する甕は認められず、単に頸部に一条の稜を有し外反するのみである。また口唇部は、平面的なものから丸味を帯びたものへと移行し、単調な整形となる。体部整形は外面のヘラミガキが省略され内外面ともカキ目整形が主体となる。

須恵器坏は少量で底部切り離しは回転ヘラ切りで無調整である。

第Ⅲ期に伴う土器は、出土量が少く不明な点が多い。Ⅲ期の特徴は須恵器坏の出土率が増加することである。図化可能な土器は少いが一般的には、底径が大きく、底部からの立上がりはやや斜め方向、切り離しは回転ヘラ切り無調整である。なお164、170号のカマド内から、形態的には前者とほとんど類似するが、底部切り離しが回転糸切り無調整の須恵器坏が一点づつ出土していることは留意する必要があろう。土師器甕は形態、整形等基本的には第Ⅱ期と類似する。

第Ⅳ期は169号のカマド支脚として使用された特徴ある甕が出土している。器形は丸底の砲弾形を呈し、口縁部は頸部から「く」字状に外反し口唇部近くで短く直立する。体部の整形は中央部から下部はタタキ、上部はロクロ整形を施す。全体的に薄手で焼成は良好で硬質、色調は明橙色を呈する。この土器は160号の床面からも出土しており、カマドの位置問題は残るが、出土土器については第Ⅳ期の住居跡群に位置付けられよう。

他に第Ⅲ期に伴う甕と同様な整形を施した甕が出土しているが、頸部のクビレはそれほど顕著でなく緩い曲線を描く。

以上、住居跡分類の各期に伴う土師器甕を中心にした出土土器を比較検討した。中でも第Ⅰ・ⅡⅣ期にそれぞれ整形技法の相異があらわれていたが、ここで甕の変遷を考える意味から再度技法について要約してみよう。

口縁部周辺の整形技法は、頸部から口縁にかけて数条の段が巡り、口唇部は平面的でかつその中央部には凹みが巡る。体部整形は、内外面をカキ目で整形した後、外面のみ縦方向のヘラミガキが施される。これらの特徴は次の段階でほとんど姿を消し、頸部は単に「く」字状になり、口唇部は

丸味を帯び単調化する。また体部整形ではヘラミガキが省略され、カキ目のみとなる。そして最後の第Ⅳ期の段階でまた大きな変化があらわれる。すなわち口縁部は「く」字状に外反し、口唇部でさらに短かく直立する。また体部は外面上部がロクロ整形、下部はタタキが施され丸底となる。この土器については秋田城の昭和50年度第17次調査（註１）で竪穴住居跡から出土している。第17次調査検出の住居跡は６群に分類されたが、丸底でタタキを伴う甕が出土する時期は第３群で同住居跡からは回転ヘラ切りの須恵器坏、回転糸切りで切り離した酸化炎焼成非内黒の坏形土器、秋田城で言うところの赤褐色土器（註２）がほぼ同率で伴出する。後城遺跡においても第Ⅲ期以降、須恵器坏類が増加する現象は第17次調査の場合と類似する。

これまで各期の土器形態、整形技法等の特徴を述べたが、その変遷は直接編年差と考えられるし、同時に住居跡のⅣ期分類も新旧関係において大過ないものと考えられる。

さて、いまだ県内においては土器編年が確立されない現状にあるが、最後に各期における年代について若干考察を加えてみたい。

まず第Ⅰ期の住居跡群とその出土土器についてであるが、県内ではまとまった出土例がきわめて少い。秋田城では第14次調査の土取り穴（註３）、第19次調査（註４）の築地築成時の堆積層からそれぞれ出土している。また秋田城以外で土師器甕の頸部に段が巡る土器は岩野山古墳（註５）、沼田遺跡（註６）から出土しているが、いずれも体部のヘラミガキは認められない。上述した遺跡は、いずれも明確な年代的裏付けがなされていない。しかし秋田城出土の土器についてはいずれも築地築成時であること、すなわち出羽柵が高清水岡に遷置された天平五年（733）を大きく下がらないだろうということは言える。したがって第Ⅰ期の住居跡はやや年代巾を広くとって８世紀前期後葉から後期前葉頃と考えられる。

第Ⅳ期については、169号カマド支脚使用の甕が年代想定の好資料であろう。丸底を呈し外面がタタキとロクロ整形の施されている甕は、払田柵遺跡、昭和50年度第７次調査において土壙より「嘉祥二年」（849）銘の木簡と共伴している（註７）。また同土壙から回転糸切りで体部に回転ヘラケズリ調整を施し、酸化炎焼成の赤褐色土器が出土しており、この共伴関係は前述の秋田城第17次調査地の場合と近似する。しかし後城遺跡においては須恵器坏類の出土率がやや低いこと、赤褐色土器がほとんど認められないことから時期的には嘉祥二年の木簡よりわずかであるが遡ることが考えられる。すなわち第Ⅳ期は９世紀前期後葉頃と想定される。

第Ⅲ期については年代想定の指標とすべき好資料が見当らないが、強いてあげるならば164、170号のカマドから出土した須恵器坏を挙げることができる。形態的には回転ヘラ切りの特徴をあらわしているが、底部切り離しは回転糸切り、無調整の土器である。このような形態を有する須恵器坏は秋田市手形山２号窯跡出土（註８）の坏と酷似するものである。同窯跡は２基調査され、１号窯は９世紀前半（100年を前・中・後期の三区分とした）で廃業、それを受け継いで２号窯の生産が開始されている。これから第Ⅲ期は９世紀前期前葉、また第Ⅱ期は８世紀後期後葉頃に一応位置付

けておきたい。

註1　秋田市教育委員会『秋田城跡』秋田城跡発掘調査概報　昭和51年3月

註2　註1のP48、81

註3　秋田市教育委員会『秋田城跡』秋田城跡発掘調査概報　昭和50年3月

註4　〃　〃

〃　昭和52年3月

註5　五城目町教育委員会『岩野山』岩野山古墳群第三次発掘調査報告書　昭和50年

註6　由利郡西目町沼田出土の表採資料である。現在土器は秋田県立博物館蔵

註7　払田柵調査事務所の船木義勝氏より御教示を得た。

註8　秋田考古学協会『手形山窯跡』　昭和50年2月

表－1　A地区出土古銭

各　層　位　出　土　古　銭

遺物番号	銭貨名	初鑄年		字体	背文	出土地点	直径(㎜)
A－29	開元通宝	唐	621	隷書		AM－47、表土	24.8
A－30	〃	〃	〃	〃		AA～AC－38～42、表土	25.3
A－31	元祐通宝	北宋	1093	篆書		AJ－41、飛砂層	23.8
A－32	〃	〃	〃	〃		A－38、第2層暗褐色砂	24.6
A－33	政和通宝	〃	1111	楷書		AJ－39、第2層暗褐色砂	24.3
A－34	〃	〃	〃	〃		AJ－38、第2層暗褐色砂	24.4
A－35	〃	〃	〃	〃		AA～AC－38～42、表土	25.2
A－36	〃	〃	〃	篆書		〃	26.0
A－37	洪武通宝	明	1368	楷書		〃	24.9
A－38	永楽通宝	〃	1411	〃		〃	25.3

遺　構　内　出　土　古　銭

遺物番号	銭貨名	初鑄年		字体	背文	出土地点	直径(㎜)
A－11	元祐通宝	北宋	1093	行書		ST002	24.7
A－12	〃	〃	〃	篆書		〃	24.8
A－13	開元通宝	唐	621	隷書		ST006	22.3
A－14	皇宋通宝	北宋	1039	楷書		〃	24.7
A－15	嘉祐通宝	〃	1056	篆書		〃	24.6
A－16	祥符通宝	〃	1008	楷書		ST008	24.7
A－17	元祐通宝	〃	1093	行書		〃	24.1
A－18	皇宋通宝	〃	1039	楷書		ST009	27.2
A－19	元豊通宝	〃	1078	行書		ST013	23.7
A－20	熙寧元宝	〃	1068	楷書		ST015	24.4
A－21	元祐通宝	〃	1093	篆書		〃	25.3
A－22	元符通宝	〃	1098	〃		〃	23.9
A－23	洪武通宝	明	1368	楷書		〃	23.2
A－24	〃	〃	〃	〃		〃	21.6
A－25	紹聖元宝	北宋	1094	篆書		〃	23.7
A－26	天聖元宝	〃	1023	楷書		SX042	25.3
A－27	皇宋通宝	〃	1039	篆書		〃	25.0
A－28	元祐通宝	〃	1093	〃		〃	22.8

表－2　B地区、SX043 円形竪穴状遺構出土古銭

遺物番号	銭貨名	初鑄年		字体	背文	出土地点	直径(㎜)
B－ 91	開元通宝	唐	621	隷書		遺構内埋土	24.4
B－ 92	〃	〃	〃	〃		〃	24.2
B－ 93	咸平元宝	北宋	998	楷書		〃	24.8
B－ 94	天聖元宝	〃	1023	篆書		〃	25.0
B－ 95	皇宋通宝	〃	1039	楷書		〃	25.2
B－ 96	〃	〃	〃	〃		〃	23.5
B－ 97	〃	〃	〃	篆書		〃	24.8
B－ 98	〃	〃	〃	楷書		〃	25.0
B－ 99	至和通宝	〃	1054	篆書		〃	24.7
B－100	熙寧元宝	〃	1068	〃		〃	24.0
B－101	元豊通宝	〃	1078	行書		〃	24.5
B－102	〃	〃	〃	〃		〃	23.9
B－103	〃	〃	〃	〃		〃	24.0
B－104	元祐通宝	〃	1093	篆書		〃	24.4
B－105	紹聖元宝	〃	1094	〃		〃	24.0
B－106	〃	〃	〃	〃		〃	23.4
B－107	〃	〃	〃	行書		〃	23.5
B－108	聖宋元宝	〃	1101	〃		〃	23.6
B－109	洪武通宝	明	1368	楷書	福	〃	23.7
B－110	〃	〃	〃	〃		〃	23.8
B－111	〃	〃	〃	〃	一銭	〃	22.5
B－112	〃	〃	〃	〃		〃	22.8
B－113	永楽通宝	〃	1411	〃		〃	25.0
B－114	宣徳通宝	〃	1426～33	〃		〃	25.6
B－115	治平通宝	北宋	1064	篆書		〃	24.4

表－3　B地区SX 043円形竪穴状遺構出土

図示木製品一覧表

種類	図版番号	寸法（cm）	特徴	備考
漆皿	B－116	口径 9.4 高 2.0	・内面に赤漆、外面は黒漆が塗布されている。	文様不明
漆椀	B－117	底径 3.7 高 不明	・外面は黒漆、内面は赤漆。 ・丸みをもって立ち上がる。	上部欠損
	B－118	底径 5.7 高 不明	・内面は赤漆、外面は黒漆で赤漆で上絵をつける。 ・文様は松？。	上部、高台は欠損が著しい。
	B－119	底径 5.3 高 不明	・内面赤漆、外面黒漆に赤漆で上絵をつける。 ・文様は松？。	上部欠損
	B－120	口径 19.6 高 5.4	・黒漆に赤漆で上絵をつける。 ・丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反する。	腐蝕しておりいびつになっている。
	B－121	底径 7.5 高 不明	・内面赤漆、外面黒漆で底部外面に赤漆で上絵をつける。	上部欠損
	B－122	底径 7.4 高 不明	・内面赤漆、外面黒漆に赤漆で上絵をつける。	上部欠損 文様不明
	B－123	底径 8.4 高 不明	・内面赤漆,外面黒漆に赤漆で上絵をつける。・文様は波に千鳥か?。	上部欠損
曲物	B－124	径 30.0 高 4.1	・巾2.1cm、厚さ2mmの柾目板を使用し桜皮でとじる。底板は竹釘でとめている。8ケ所に穿孔あり。	柾目板を使用
	B－125	径 9.6 高 7.2	・右回りに板を二重に巻き桜皮でとじる。	柾目板を使用 底部中央部に穿孔あり
	B－126	径 9.0 厚 0.6	・底板だけである。	
	B－127	高 3.8 厚 0.35	・曲物の破片である。 ・あわせ目2ケ所を桜皮でとじる。	柾目板を使用
	B－128	高 5.8 厚 0.36	・曲物の破片である。あわせ目桜皮でとじる。	柾目板を使用

表－4

種類	図版番号	寸　法　（cm）	特　　徴	備　　考
曲物	B－129	高　4.0 厚　0.6	・曲物の破片である。	柾目板を使用
	B－130	高　不明 厚　0.6	・曲物の破片である。 ・非常に欠損している。	
折敷	B－131	長　32　(9寸7分) 高　2.6	・柾目板の四隅を切り落す。側板は底板の内側に入る。各一辺の二カ所を桜皮でとじている。	若干ゆがみあり
	B－132	長　20.3 (6寸1分) 厚　0.5	・隅を切り落とす。	欠損品
	B－133	長　31.2 (9寸5分) 厚　0.5	・隅を切り落とす。 ・二ケ所に桜皮でとじた穿がある。	欠損品
	B－134	長　32.2 (9寸7分) 厚　0.7	・隅を切り落とす。・斜方に切傷のような痕跡、又一部焼けこげあり。	柾目板使用 欠損品
	B－135	長　22.6 (6寸8分) 厚　0.6	・隅を切り落す ・切り傷のような痕跡あり	欠損品
	B－136	長　24.0 (7寸3分) 厚　0.5	・隅を切り落す。・桜皮でとじたと思われる穿孔は認められない。	欠損品
	B－137	長　24.4 (7寸4分) 厚　0.5	・隅を切り落とす。	柾目板使用 欠損品
	B－138	長　23.6 (7寸2分) 厚　0.6	・隅をわずかに切り落す。 ・二ケ所に穿孔あり	柾目板使用 欠損品
	B－139	長　19.1 (5寸8分) 厚　0 6	・丸みをもたせて隅を切り落す。 ・斜方向に傷あり	柾目板使用 欠損品
	B－140	長　17.3 (5寸2分) 厚　0.6	・隅を丸く切り落す。	柾目板使用 欠損品
	B－141	長　26.2 (7寸9分) 厚　0.6	・斜めに切り落している。 ・二ケ所に桜皮あり。	柾目板使用 欠損品
	B－142	長　17.0 (5寸2分) 厚　0.3	・丸く切り落している。	柾目板使用 欠損品
	B－143	長　13.2 (4寸) 厚　0.7	・隅を大きく斜めに切り落す。	柾目板使用 欠損品
	B－144	長　不明 厚　0.5	・隅を切り落す。 ・傷あり。	柾目板使用 欠損品
	B－145	長　18.0 (5寸5分) 厚　0.5	・隅を丸く切り落している。	柾目板使用 欠損品

表－5

種類	図版番号	寸　法　(cm)	特　　徴	備　　考
折敷	B－146	長　不 明 厚　0.6	・隅を切り落す。 ・とじる穿あり。	柾目板使用 欠損品
	B－147	長　不 明 厚　0.5	・とじる穿に桜皮が付着している。	柾目板使用 欠損品
	B－148	長　20　(6寸) 厚　0.5	・大きく二段に切り落している。。	柾目板使用 欠損品
	B－149	長　20.4 (6寸2分) 厚　0.5	・とじる穿に桜皮が付着している。	柾目板使用 欠損品
	B－150	長　20　(6寸) 厚　0.4	・柾目板を使用している。	欠損品
	B－151	長　21.1 (6寸4分) 厚　0.8	・中央部に切り込みあり。	柾目板使用 欠損品
	B－152	長　23　(7寸) 厚　0.4	・隅を切り落す。	柾目板使用 欠損品
	B－153	長　20　(6寸) 厚　0.5	・隅を切り落す。 ・とじる穿あり。	柾目板使用 欠損品
	B－154	長　23　(7寸) 厚　0.6	・隅を小さく切落す。 ・とじる桜皮が付着している。	柾目板使用 欠損品
	B－155	長　19.2 (5寸9分) 厚　0.6	・隅を切り落す。 ・とじる穿あり。	柾目板使用 欠損品
	B－156	長　19.4 (5寸9分) 厚　0.5	・隅を丸く切落す。	柾目板使用 欠損品
	B－157	長　25.4 (7寸7分) 厚　1.0	・隅を丸く切り落す。	柾目板使用 欠損品
	B－158	長　不 明 厚　0.8	・柾目板を使用している。	欠損品
	B－159	長　不 明 厚　0.5	・隅を小さく切り落す。 ・とじる穿あり。	柾目板使用 欠損品
	B－160	長　25.6 (7寸8分) 厚　0.4	・隅を若干切り落す。 ・とじる穿あり。	柾目板使用 欠損品
	B－161	長　16　(4寸8分) 厚　0.7	・隅を切り落す。 ・切り傷多数あり。 ・中央部に穿孔あり。	柾目板使用 欠損品
	B－162	長　27.8 (8寸4分) 厚　0.6	・切り傷多数あり。	柾目板使用 欠損品

表－6

種類	図版番号	寸法（cm）	特徴	備考
折敷	B－165	長 22.8（6寸9分） 厚 0.8	・隅を大きく丸みをもたせて切り落す。	柾目板使用 欠損品
	B－170	長 不明 厚 1.2	・隅を小さく切り落す。 ・桜皮あり。	柾目板使用 欠損品
	B－171	長 24（7寸3分） 厚 0.5	・隅を小さく切り落す。 ・とじる穿あり。	柾目板使用 欠損品
	B－172	長 25.8（7寸8分） 厚 0.4	・二ケ所を桜皮でとじる。	欠損品
箸	B－210	長 20.1 巾 0.65	・両端を尖らせている。	
	B－211	長 24.83 巾 0.84	・片端を尖らす。	菜箸か？
	B－212	長 20.48 巾 0.8	・両端を細くしている。	
	B－213	長 21.3 巾 0.75	・両端を尖らせている。	
	B－214	長 23.18 巾 0.65	・両端を細く尖らせている。	
	B－215	長 20.8 巾 0.7	・両端を細くしているが、特に片端を削って尖らせている。	
	B－216	長 20.55 巾 0.9	・両端を細くしている。	
	B－217	長 20.7 巾 0.7	・両端をわずかに細くしている。	
	B－218	長 21.1 巾 0.7	・両端を細くしている。	
	B－219	長 22.0 巾 0.65	・両端を細く尖らせている。	
	B－220	長 21.4 巾 0.8	・片端を細く尖らせている。	
	B－221	長 20.1 巾 0.6	・両端を細くしている。	
	B－222	長 23.1 巾 0.8	・両端を細くしている。	
	B－223	長 23.9 巾 0.6	・両端をわずかに細くしている。	

表－7

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
箸	B－224	長　22.8 巾　0.8	・両端が若干細い。	
	B－225	長　21.9 巾　0.8	・両端が若干細い。	
	B－226	長　23.4 巾　0.7	・両端を細くし、特に片端を尖らせている。	
	B－227	長　23.6 巾　0.8	・両端をわずかに細くしている。	
	B－228	長　22.8 巾　0.7	・両端を細くし、片端を尖らす。	
	B－229	長　24.0 巾　0.7	・片端を細くしている。	
柄杓	B－182	(漆器) 底径　6.6 高(現存部) 2.0 (柄) 長　27.2 厚　0.8	・漆器椀を利用して柄をつけている。漆器は上部を切り落している。 ・柄は漆器の底部に4本の竹釘でとめている。	
ヘラ状木製品	B－183	長　30.4 厚　0.7	・偏平な板の両端を削って柄部をつくる	柾目板使用 焼けこげている
	B－189	長　30.6 厚　0.5	・うす板の両方から切り落しハゴ板状につくる。	傷あり
	B－185	長　32.0 厚　0.58	・うすい板材の片面と切り「鉈」状につくる。	柾目板使用
	B－186	長　34.2 厚　0.8	・板材の片面を切り落し「鉈」状に作り加工を施し刃部のように作る。	傷あり 焼けこげがある
	B－187	長　24.6 厚　0.6	・片面を一方から切り落し「砲丁」のようにつくる。	傷あり
	B－188	長　不明 厚　0.7	・片面を切落して加工している。	柾目板使用
	B－169	長　22.6 厚　0.6	・片面を斜めに切り落して加工している。	
取手	B－189	長　29.8 厚　2.0	・両端の着装部はV字状に加工されはめ込むようになっている。 ・着手部分は若干丸みをもっている。	桶の取手と思われる 一部焼けている

表－8

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
底板	B－190	径　不明 厚　1.0	・円形に加工している。	柾目板使用 欠損品
	B－191	径　12.8 厚　0.6	・円形に加工し、斜に切っている。	柾目板使用
	B－192	径　15.8 厚　1.2	・円形に切落し斜に切落す。 ・中央部左側に桜皮あり。	柾目板使用
	B－193	径　不明 厚　0.9	・円形に加工。 ・下端部に桜皮あり。	柾目板使用 欠損品
	B－194	径　不明 厚　1.2	・端部は丸味をもっている。 ・中央部左側に桜皮あり。	柾目板使用 欠損品
	B－195	径　不明 厚　0.6	・桜皮あり。 ・二ケ所に小穿孔あり。	柾目板使用 欠損品
	B－196	径　不明 厚　1.1	・端部は斜に加工している。	柾目板使用 欠損品
	B－197	径　不明 厚　1.1	・円形に加工。	柾目板使用 欠損品
	B－198	径　不明 厚　0.8	・円形に加工。	欠損品
	B－199	径　26.4 厚　0.9	・円形に加工。	
	B－200	径　不明 厚　1.2	・円形に加工、端部を斜に切落す。	欠損品
	B－201	径　不明 厚　1.4	・円形に加工、端部を斜に切落す。	欠損品
	B－202	径　不明 厚　1.2	・円形に加工、端部を斜に切落す。 ・切り傷あり。	欠損品
	B－203	径　16.1 厚　0.7	・円形に加工し端部を斜に切落す。	柾目板使用
	B－204	径　16.1 厚　1.0	・円形に加工し、端部を斜に切り落す。中央左側に桜皮あり。	柾目板使用
	B－205	径　18.0 厚　1.2	・円形に加工、端部を斜に切落す。 ・中央左側に桜皮あり	柾目板使用
	B－206	径　17.4 厚　1.0	・円形に加工、端部を斜に切落す。	柾目板使用
	B－166	径　不明 厚　0.6	・端部を丸みをもって切落す。	柾目板使用

表－9

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
底板	B－167	径　22.3 厚　1.0	・端部を斜めに切落す。	柾目板使用
	B－168	径　不明 厚　0.3		
蓋	B－207	径　不明 厚　1.4	・中央左端から巾2.4cm、長さ5.4cmにわたり快りを入れている。	柾目板使用
	B－208	径　19.7 厚　1.2	・端部は丸みをもっている。中央部に柄を挿入したと思われる穿あり。上・下に釘穴が並んでいる。	柾目板使用
	B－209	径　22.4 厚　1.6	・中央に柄を挿入する穿あり、柄には切り込みを入れ、また「かえり」がついている。	柾目板使用
桶の側板	B－163	長　33.6 巾　13.4	・内反りしている。上部の右に桜皮あり、無数の傷あり。	柾目板使用
	B－164	長　27.2 巾　8.8	・内反りしている。全面に漆が塗布されている。	柾目板使用
	B－177	長　不明 巾　4.3		柾目板使用
	B－178	長　3.2 巾　5.8	・上部に何かを巻きつけた痕跡あり。	柾目板使用
クシ状木製品	B－230	長　不明 巾　1.6	・棒状にしたものである。	柾目板使用
	B－231	長　25.2 巾　1.6	・先端部を削って尖らせている。	
	B－232	長　26.4 巾　1.4	・先端部を細くしている。	
	B－233	長　28.3 巾　2.0	・偏平な板材使用、中程から細くし先端は尖っている。小穿孔あり。	
	B－234	長　32.8 巾　1.0	・両端を細くしている。	菜箸？
	B－235	長　10.9 巾　1.1	・先端部を削って尖らせている。	柾目板使用
	B－236	長　14.2 巾　0.8	・一端をわずかに細くしている。	

表－10

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
クシ状木製品	B－237	長　14.4 巾　1.0	・先端は削って尖らせている。 ・一部若干焼けている。	
	B－238	長　14.6 巾　13.0		柾目板使用
	B－239	長　13.0 巾　1.1	・先端部は片側から削って尖らす。	柾目板使用
	B－240	長　17.0 巾　1.2	・先端部を削って尖らせる。	
	B－241	長　17.2 巾　1.6	・先端部を削って尖らす。	柾目板使用
	B－242	長　18.2 巾　1.3	・先端部を細くしている。特に一端は削って尖らせている。	
	B－243	長　21.4 巾　1.3	・先端を細く尖らせている。	柾目板使用
	B－244	長　22.6 巾　1.4.	・先端部を削って尖らせている。	柾目板使用
	B－245	長　不明 巾　1.4	・先端部に傷あり。	
	B－246	長　21.8 巾　1.4	・先端部を削って細くしている。	
	B－247	長　20.4 巾　1.0	・中程から削って行き、先端部を尖らせている。	
	B－251	長　27.0 巾　1.4	・先端部を細く削り尖らせている。 ・先端は丸みをもたせている。	
	B－256	長　21.0 巾　1.2	・先端部を削って尖らせている。	
加工木製品	B－248	長　24.0 巾(基部)1.0	・桜皮を巻いた中に箸状のものが入っている。	桜皮がケースのようなものか？
	B－249	長　25.6 巾　2.0	・先端部削って尖らせる。基部は片面から削って細くしている。	
	B－250	長　26.0 巾　1.7	・両端を細くしている。全体に丸みをもつ、中央に径1cm程の穿孔あり。	柾目板使用 織機の「杼」か？
	B－278	長　31.6 巾　3.2	・両端を細く尖らす。全体に丸みをもつ。中央やや上に短径1.4cmの穿孔あり。	織機の部品の「杼」か？

表－11

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
加工木製品	B－252	長　28.8 巾　2.0	・一端を凹状に加工、もう一端はやや丸く削っている。	柄か？
	B－253	長　22.0 巾　0.8	・先端を細尖らせ、一端には穿孔がある。	編針か？
	B－254	長　21.0 巾　1.3	・先端部を細く尖らせ、一端には穿孔がある。	編針か？
	B－255	長　22.8 巾　1.2	・中央部に小さな穿孔あり。	柾目板使用
	B－257	長　19.8 巾　1.4	・一端を削って三角状にしている	柄か？
	B－258	長　39.2 巾　2.4	・若干丸みをもたせて加工、節のところはふくらんでいる。	柄か？
	B－259	長　不明 巾　2.7	・面取りしており、八角形を呈する。	柄か？
	B－260	長　22.0 巾　1.5	・楕円形に加工、一端を三角状に加工、先端を細くしている。	柾目板使用 柄か？
	B－261	長　18.4 巾　2.8	・断面を四角形に加工。 ・傷あり。	
	B－262	長　25.3 巾　1.6	・一端に段をつけ細く加工し、はめ込むことができるようにしている。	柄か？
	B－263	長　22.6 巾　1.8	・中央がふくらみ、両端は細くなる。一端には切り込みを入れている。	
	B－264	長　19.4 巾　広 4.6 狭 2.2	・片端を切り落し、四角形に加工している。	
	B－271	長　16.6 巾　4.7	・片面にゆるやかな丸みをもたせて加工している。	
	B－273	長　25.4 巾　1.1	・５ケ所に柄穴あり、木釘を打っている。先端にはさみ込むようにしている。	
	B－274	長　32.8 巾　1.6	・断面が方形を呈する棒状のものに木釘を打ち込んでいる。	
	B－275	長　24.5 巾　3.8	・両端に切り込みあり、柄状にして木釘を打っている。	柾目板使用

表－12

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
加工木製品	B－276	長　27.0 巾　3.4	・先端を斜めに切り、その側面2ケ所に切り込みを入れる。	木札か？
	B－277	長　15.6 巾　1.2	・先端を若干細く加工、両端に各一対の穿孔あり。	織機の部品か？
	B－279	長　22.1 巾　広 3.4 狭 2.2	・両端を細くし、片面に丸みをもたせている。	
	B－280	長　15.8 巾　1.6	・若干孤状を呈す。中央部には切り込みを入れ、はめ込むようになっている。	
	B－281	長　11.4 巾　0.9	・棒状のものの中央部に二条の溝を切り込んでいる。	
	B－282	長　不明 巾　1.9	・先端部に丸みをもたせ加工、 ・中央部に一条の溝を切り込む。	
	B－283	径　不明 厚　0.2	・うすく円形に加工、周縁は若干斜めになる。	柾目板使用
	B－284	長　8.6 厚　1.1	・両方から切り込みを入れ、両端を斜めにそぎ落している。	柾目板使用
	B－285	長　10 巾　5.4	・中央部に切り込みを入れ、段をつける(柄穴状になっている)。	
	B－286	長　5.8 巾　3.4	・先端部に柄をきり、基部に穿孔を施している。	
	B－287	長　8.0 巾　5.2	・一端に2本の円筒状の柄を切り込み、側面に5個の穿孔あり。	柾目板使用
	B－288	長　8.0 厚　0.8	・ほぼ方形を呈する。上部先端に小穿孔を施している。	糸巻板か？
	B－289	長　不明 巾　4.0	・偏平な板材を利用。	
	B－173	長　17.4 巾　3.2	・両端に切り込みを入れ斜に加工。 ・片側に等間隔に木釘を打っている。	柾目板使用
	B－174	長　12.6 厚　0.9	・ゆるく孤をもたせ加工。	
	B－175	長　8.8 厚　0.3	・片面の角を切り落し、面には釘状のもので傷をつけている。	

表—13

種類	図版番号	寸法（cm）	特徴	備考
加工木製品	B—176	長 10.6 厚 0.8	・両端は斜めに加工、中央部には穿孔があったようである。	
	B—181	長 14.6 厚 0.5	・片面両端に切り込みを入れる。 ・上・下面に釘状のもので刻線をつける。	
屋根材	B—179	長 23.3 厚 0.7	・片面中央と右上端に穿孔あり。	柾目板使用
	B—180	長 21.8 厚 0.5	・片面に二対の穿孔あり、また上部数ケ所に穿孔、傷あり。	
クサビ	B—265	長 24 厚 2.6	・一端に丸みをもたせて削り尖らせる。さらに下面を削っている。	
	B—266	長 22.0 厚 2.2	・下方を両面から削ってクサビにしている。	柾目板使用
	B—268	長 11.0 厚 2.6	・下方は両面から削って鋭利にしている。	
	B—269	長 不明 厚 2.4	・全体に下方に向けて両面から鋭利に削ってクサビ状にしている。	
	B—270	長 11.0 厚 2.6	・両面を削って尖らせている。	柾目板使用
栓	B—267	長 18.0 巾 2.0	・全体に円形に加工・先端部を尖らせて栓にしている。	
釘隠し	B—290	長 9.8 厚 0.7	・菱形に加工し面取りしている。 ・中央部に穿孔、×印に溝を切っている。	
	B—291	長 5.4 厚 0.7	・菱形に加工し面取りしている。中央部に穿孔し十字に溝を切っている。表・裏に彫刻を施している。	
船形木製品	B—292	長 10.8 高 1.8	・平底、船首、船艙を削り出してつくっている。船艙の深さは0.6cm程ある。	
櫛	B—293	長 8.3 厚 1.4	・歯は19本、歯間は3㎜程ある。棟には稜をつけている。	挽櫛
	B—294	長 7.0 厚 1.4	・歯は64本、歯間は約1㎜程である。棟には稜をつける。	梳櫛

表—14

種類	図版番号	寸法 (cm)	特徴	備考
塔婆板	B—295	長 46 巾 6.4 厚 0.5	・頭部は山形状を呈す。先端部は突している。表面は木目がでて凸凹がある。	柾目板使用 墨痕あるが不明
	B—296	長 45.6 巾 5.2 厚 0.8	・頭部を山形に切り込み、先端部を尖らせている。	柾目板使用 墨痕あるが不明
	B—297	長 45.6 巾 6.5 厚 0.4	・頭部は山形に切り込み、先端部を尖らせている。木目がでてざらざらしている。	柾目板使用 墨痕あるが不明
	B—298	長 45.8 巾 5.8 厚 0.5	・頭部は山形に加工、先端部を尖らせている。木目がでてざらざらしている。	柾目板使用 墨痕あるが不明
	B—299	長 不明 巾 6.2 厚 0.4	・頭部は山形に加工。	柾目板使用 欠損品 墨痕あるが不明
	B—300	長 不明 巾 4.3 厚 0.4	・頭部は山形に加工。	下方は欠損している
木札？	B—314	長 18.6 巾 1.6	・先端部に切り込みを入れている。	
	B—315	長 11.2 巾 1.0	・上端角を切り落す。先端部に向い細くしている。上部に穿孔あり。	
	B—316	長 不明 巾 2.4	・先端部は片側から削って尖らせている。	柾目板使用
	B—317	長 不明 巾 2.0	・先端部は山形に加工している。	柾目板使用
下駄	B—301	長 17.8 (5寸9分) 巾 8.4	・前方隅丸等で後方は楕円形を呈する。台前部前緒穴右側が磨滅しており左足用と思われる。	連歯 板目材使用
	B—302	長 15.2 (5寸2分) 巾 7.7	・台は小判形を呈する。前緒穴が小さい。歯は下方に向って広がる。後歯の滅りが目立つ。	連歯 柾目材使用
	B—303	長 18.2 (6寸) 巾 8.9	・小判形を呈する。横緒穴が後歯より離れている。歯は下方に向いて広がる。後歯が磨滅。	板目材使用

表－15

種類	図版番号	寸　法（cm）	特　　徴	備　　考
下駄	B－304	長　18.6（6寸1分） 巾　8.0	・細い小判形を呈する。歯は下方に向って広がっている。かなり磨滅している横緒穴は後歯より離れている。	連歯 板目材使用
	B－305	長　20　（6寸6分） 巾　9.7	・小判形を呈する。台前部左側が磨滅しており不足用と思われる。	連歯 板目材使用
	B－306	長　20.2（6寸7分） 巾　9.6	・小判形を呈する。歯は後が滅っている。	連歯 柾目材使用
	B－307	長　19.5（6寸4分） 巾　9.2	・小判形を呈する。前歯前部、台前方部は磨滅している。	連歯
	B－308	長　21.2（7寸） 巾　9.4	・小判形を呈する。台後方部は磨滅して薄くなっている。	連歯 板目材使用
	B－309	長　18.0（5寸9分） 巾　9.3	・楕円形を呈する。横緒穴の位置は斜めになっている。台前壷の前方が特に磨滅している。右足用か？	連歯 柾目材使用
	B－310	長　約19（6寸3分） 巾　9.4	・長楕円形を呈す。横緒穴は後歯に一部穿たれている。後歯は磨滅。	連歯
	B－311	長　23.0（7寸6分） 巾　9.4	・長楕円形を呈する、後歯に若干横緒穴がくい込む。	連歯 柾目材使用
	B－312	長　15.8（5寸2分） 巾　9.6	・小判形を呈する。後歯はほとんど磨滅している。横緒穴は後歯に一部くい込んで穿たれる。	連歯 柾目材使用
	B－313	長　22.8 巾　12.4	・長方形を呈する。壷は方形に穿たれる。歯は下方に向って広がっている。後歯が磨滅している。	連歯

表－16　C地区出土遺物、遺構及び層位

青　　磁		C－27	第 2 層
C－ 1	第 4 層	C－28	第 2 層
C－ 2	表　　土	C－29	第 3 層
C－ 3	表　　土	C－30	第 2 層
C－ 4	第 2 層	C－31	SE 052 井戸井側埋土
C－ 5	SE 052 井戸井側内	C－32	第 4 層、SE 057 井戸井側内
C－ 6	第 4 層	C－33	第 2 層、第 4 層
C－ 7	第 2 層	C－34	SE 052 井戸井側埋土
C－ 8	表　　土	C－35	第 4 層、SE 051 井戸埋土
C－ 9	表　　土	C－36	第 3 層、SE 051 井戸掘り方
C－10	表　　土	C－37	表　　土
C－11	第 1 遺構面ピット埋土	C－38	第 7 層
C－12	第 2 層	C－39	SE 051 井戸井側埋土
C－13	第 4 層	C－40	第 4 層、SE 057 井戸井側埋土
C－14	第 6 層	C－41	第 4 層
C－15	第 5 層	C－42	第 6 層
C－16	第 5 層	C－43	SX 083 落ち込み埋土
C－17	SX 108 埋土	C－44	〃
C－18	SE 089 井戸掘り方内	白　　磁	
C－19	SE 115 井戸井側内	C－45	第 2 層
C－20	表　　土	C－46	表　　土
C－21	表　　土	C－47	SX 083 落ち込み埋土
C－22	表　　土	C－48	第 2 層
C－23	SE 085 井戸掘り方内	C－49	SE 055 井戸埋土
C－24	第 6 層	C－50	SK 075 土壙埋土
C－25	第 1 遺構面ピット埋土	C－51	表　　土
C－26	表　　土	C－52	第 1 層

表－17

C－53	第 4 層	C－79	表　土
C－54	表　採	C－80	SE 058 井戸井側埋土
染　付		C－81	第 1 層
C－55	表　土	C－82	第 2 層
C－56	〃	C－83	第 5 層
C－57	〃	C－84	第 4 層
C－58	〃	C－85	第 5 層
C－59	〃	C－86	第 2 層
C－60	〃	C－87	SE 084 井戸掘り方
C－61	〃	C－88	ベルト内
C－62	〃	C－89	SX 083 落ち込み埋土
C－63	第 2 層	C－90	SE 055 井戸井側埋土
C－64	〃	C－91	SX 083 落ち込み埋土
C－65	〃	C－92	第 5 層
C－66	〃	C－93	第 2 層
C－67	〃	C－94	第 5 層
C－68	SK 064 土壙埋土	C－95	SE 052 井戸井側埋土 SX 083 落ち込み埋土
瀬戸・美濃		C－96	第 5 層、SX 108 落ち込み埋土
C－69	第 3 層	C－97	第 4 層
C－70	第 4 層	C－98	第 1 層
C－71	第 2 層	C－99	第 4 層
C－72	〃	C－100	第 3 層
C－73	SE 058 井戸井側埋土	C－101	SX 083 落ち込み埋土 SE 051 、056 井戸井側埋土
C－74	第 3 層		
C－75	第 4 層	その他の陶器	
C－76	〃	C－102	第 6 層、SE 085 井戸井側埋土
C－77	第 2 層	C－103	第 4 層
C－78	ベルト内	C－104	第 4 層

表－18

C－105	第6層、SE087井戸井側埋土	C－133	SE112井戸井側埋土
珠洲系陶器		C－134	表　採
C－106	SX108落ち込み埋土	C－135	ベルト内
C－107	第5層	C－136	第4層
C－108	〃	C－137	第1層
C－109	第4層	C－138	第6層、SE112井戸井側埋土
C－110	第6層	C－139	第4層
C－111	第3層	C－140	第2層
C－112	SE086井戸井側埋土	C－141	第5層
C－113	第3遺構面ピット埋土	C－142	SE085井戸井側埋土
C－114	第2層	C－143	表　土
C－115	第5層	C－144	第4層
C－116	第2層	C－145	ベルト、第4～7層
C－117	第3層	C－146	第3層
C－118	表　土	C－147	第4層
C－119	第5層	C－148	第5層
C－120	SX083落ち込み埋土	C－149	第6層
C－121	SE088井戸井側埋土	C－150	第5層
C－122	第4層	C－151	第5層
C－123	〃	C－152	第2層
C－124	第4層、SK059土壙埋土	C－153	第4～7層ベルト
C－125	第4層	C－154	第5層
C－126	〃	C－155	SX083落ち込み埋土
C－127	〃	C－156	ベルト　第4～7層
C－128	第7層	C－157	〃
C－129	ベルト内	C－158	第4層
C－130	第5、6層	C－159	第5、6層
C－131	第4層	C－160	第4層
C－132	第5層	C－161	第4～7層

表—19

C－162	第 4 層	C－190	第 6 層
C－163	SE 088 井戸井側埋土	C－191	ベルト第6層～7層
C－164	第 4 層	C－192	第 4 層
C－165	第 2 層	C－193	第 4 層
C－166	第 5 層	C－194	第 3 層
C－167	第 6 層	C－195	第 4 層
C－168	SX 083 落ち込み埋土	C－196	第 6 層
C－169	第2、第6層	C－197	地山飛砂直上
C－170	第 5 層	C－198	第 2 層
C－171	〃	越前陶等	
C－172	〃	C－199	ベルト 第4～7層
C－173	第 6 層	C－200	第 6 層
C－174	〃	C－201	SX 108 落ち込み埋土
C－175	第 3 層	C－202	第 6 層
C－176	第 6 層	C－203	第 5 層
C－177	SX 083 落ち込み埋土	C－204	表　採
C－178	表　採	C－205	第 6 層
C－179	〃	C－206	第 2 層
C－180	第 2 層	C－207	SX 083 落ち込み埋土
C－181	SX 083 落ち込み埋土	石製品	
C－182	第 2 層	C－208	第 2 層
C－183	第 3 層	C－209	第 4 層
C－184	表　採	C－210	ベルト 第1～4層
C－185	第 2 層	C－211	第 5 層
C－186	第 4 層	C－212	第 3 層
C－187	表　土	C－213	〃
C－188	第 4 層	C－214	第 4 層
C－189	第 7 層	C－215	〃
C－190	表　採	C－216	〃

表－20

C－217	第 4 層	C－244	第 4 層
C－218	ベルト 第1～4層	C－245	第 5 層
C－219	第 3 層	C－246	〃
C－220	SE 087 井戸掘り方	C－247	第 3 層
C－221	SX 083 落ち込み埋土	C－248	SE 058 井戸井側埋土
C－222	SE 052 井戸井側埋土	C－249	第 2 層
土 製 品		C－250	第 6 層
C－223	ベルト 第4～7層	C－251	〃
C－224	SX 063 焼土遺構	C－252	第 4 層
C－225	表 土	C－253	第 2 層
C－226	第 5 層	C－254	表 土
C－227	SE 054 井戸井側埋土	C－255	第 2 層
C－228	第 2 層	C－256	第 4 層
C－229	表 採	C－257	SX 083 落ち込み埋土
C－230	SK 091 土壙埋土	C－258	〃
C－231	SX 083 落ち込み埋土	C－259	SE 058 井戸井側埋土
C－232	第2遺構面ピット	C－260	SI 111 床面
C－233	第 5 層	C－261	第 4 層
C－234	SE 058 井戸井側埋土	C－262	第 2 層
C－235	第 4 層	C－263	第 5 層
C－236	第 2 層	C－264	SE 051 井戸井側埋土
C－237	第 4 層	C－265	SX 083 落ち込み埋土
C－238	SE 056 井戸井側埋土下層	C－266	〃
C－239	第 5 層	C－267	第 2 層
C－240	SX 108 落ち込み埋土	C－268	ベルト 第4～7層
C－241	第 2 層	C－269	SE 056 井戸井側埋土
鉄、銅製品		C－270	〃
C－242	SE 112 井戸井側埋土	C－271	SE 056 井戸井側埋土
C－243	第 6 層	C－272	SE 058 〃

表—21

C－273	SE 058 井戸井側埋土	C－297	第 4 層
C－274	SX 083 落ち込み埋土	C－298	〃
C－275	〃	C－299	〃
C－276	〃	C－300	〃
C－277	SK 091 土壙埋土	C－301	ベルト 第1～4層
C－278	〃	C－302	第 5 層
C－279	SX 083 落ち込み埋土	C－303	第 4 層
C－280	第 5 層	C－304	第 5 層
C－281	第 3 層	C－305	〃
C－282	第 4 層	C－306	ベルト 第1～4層
C－283	〃	C－307	第 4 層
C－284	〃	C－308	SE 052 井戸井側埋土
C－285	〃	C－309	〃
C－286	不　明	C－310	〃
C－287	SX 083 落ち込み埋土	C－311	〃
C－288	第 5 層	C－312	〃
C－289	〃	C－313	第 2 層
C－290	第 4 層	C－314	第 5 層
C－291	第 5 層	C－315	〃
C－292	第 4 層	C－316	SE 052 井戸井側埋土
C－293	ベルト 第4～7層	C－317	〃
C－294	第 4 層	C－318	SX 083 落ち込み埋土
C－295	ベルト 第4～7層	C－319	〃
C－296	第 4 層		

表—22　C地区出土古銭(1)

遺物番号	銭貨名	初鑄年		字体	背文	出土地点	直径(㎜)
C—320	開元通宝	唐	621	隷書	一	SE054井戸跡上面土壙埋土内	23.9
C—321	〃	〃	〃	〃	人	SE052井戸跡埋土内	24.4
C—322	〃	〃	〃	〃		〃	24.4
C—323	〃	〃	〃	〃		第二層	23.6
C—324	〃	〃	〃	〃		表土	24.4
C—325	〃	〃	〃	〃		表土	24.1
C—326	至道元宝	北宋	995	楷書		表土	24.9
C—327	祥符元宝	北宋	1008	楷書		表土	24.1
C—328	〃	〃	〃	〃		第二層	24.7
C—329	〃	〃	〃	〃		表土	23.9
C—330	〃	〃	〃	〃		表土	23.8
C—331	〃	〃	〃	〃		表土	24.0
C—332	祥符通宝	北宋	1008	楷書		表土	25.2
C—333	天禧通宝	北宋	1017	楷書		第五層	25.7
C—334	天聖元宝	北宋	1023	篆書		第二層	23.9
C—335	〃	〃	〃	〃		〃	25.0
C—336	〃	〃	〃	〃		〃	24.4
C—337	〃	〃	〃	〃		撹乱層	24.9
C—338	〃	〃	〃	〃		表土	23.9
C—339	皇宋通宝	北宋	1039	楷書		第三層	24.0
C—340	〃	〃	〃	〃		第四層	25.1
C—341	〃	〃	〃	〃		表土	23.9
C—342	〃	〃	〃	〃		表土	24.5
C—343	〃	〃	〃	〃		表土	24.0
C—344	〃	〃	〃	篆書		表土	24.4
C—345	〃	〃	〃	〃		表土	24.5
C—346	〃	〃	〃	〃		表土	24.2
C—347	〃	〃	〃	〃		第二層	23.0
C—348	至和元宝	北宋	1054	楷書		表土	23.8
C—349	治平元宝	北宋	1064	篆書		SE051井戸跡埋土内	24.1
C—350	治平通宝	北宋	1064	隷書		表土	25.3
C—351	熙寧元宝	北宋	1068	楷書		TO～TQ55ラインベルト内	23.7
C—352	〃	〃	〃	〃		第三層	24.4
C—353	〃	〃	〃	〃		表土	23.3

表－23　C地区出土古銭(2)

遺物番号	銭貨名	初鋳年		字体	背文	出土地点	直径(㎜)
C－354	熙寧元年	北宋	1068	楷書		表土	23.8
C－355	〃	〃	〃	〃		表土	23.9
C－356	〃	〃	〃	〃		表土	23.0
C－357	〃	〃	〃	篆書		SE054井戸跡上面土壙埋土内	24.2
C－358	〃	〃	〃	〃		表土	24.2
C－359	元豊通宝	北宋	1078	行書		第四層	25.4
C－360	〃	〃	〃	〃		表土	25.7
C－361	〃	〃	〃	〃		第三層	24.7
C－362	〃	〃	〃	〃		表土	23.1
C－363	〃	〃	〃	篆書		第五層	24.2
C－364	〃	〃	〃	〃		第三層	24.7
C－365	〃	〃	〃	〃		表土	23.8
C－366	〃	〃	〃	〃		表土	24.1
C－367	元祐通宝	北宋	1093	行書		TR～TS55ラインベルト	24.8
C－368	〃	〃	〃	〃		第二層	24.4
C－369	〃	〃	〃	〃		表土	23.8
C－370	紹聖元宝	北宋	1094	篆書		第四層	24.0
C－371	聖宋元宝	北宋	1101	行書		第四層	24.1
C－372	〃	〃	〃	篆書		表土	24.5
C－373	〃	〃	〃	〃		SK059竪穴状遺構埋土内	22.8
C－374	〃	〃	〃	〃		表土	24.2
C－375	大観通宝	北宋	1107	楷書		第二層	23.5
C－376	政和通宝	北宋	1111	篆書		第三層	24.7
C－377	淳熙元宝	南宋	1174	楷書	十五	表土	24.3
C－378	嘉定通宝	南宋	1208	楷書		第二層	24.1
C－379	至大通宝	元	1309	楷書		SK059竪穴状遺構埋土内	24.8
C－380	洪武通宝	明	1368	楷書		第三層	22.8
C－381	〃	〃	〃	〃		表土	21.4
C－382	〃	〃	〃	〃	(一銭か?)	表土	22.1
C－383	〃	〃	〃	〃		表土	23.8
C－384	〃	〃	〃	〃		表土	22.9
C－385	〃	〃	〃	〃		表土	23.3
C－386	〃	〃	〃	〃		表土	21.5
C－387	〃	〃	〃	〃	判読不能	表土	23.6

表－24　C地区出土古銭(3)

遺物番号	銭貨名	初鑄年		字体	背文	出土地点	直径(㎜)
C－388	洪武通宝	明	1368	楷書		SE055 井戸跡埋土内	23.2
C－389	永楽通宝	明	1411	楷書		SE052 井戸跡埋土内	22.8
C－390	〃	〃	〃	〃		第二層	24.8
C－391	〃	〃	〃	〃		表土	25.0
C－392	〃	〃	〃	〃		表土	24.6
C－393	〃	〃	〃	〃		表土	25.0
C－394	〃	〃	〃	〃		表土	24.6
C－395	〃	〃	〃	〃		表土	25.2
C－396	〃	〃	〃	〃		表土	24.9
C－397	朝鮮通宝	朝鮮	1423	楷書		表土	23.5
C－398	〃	〃	〃	〃		表土	23.1
C－399	寛永通宝	寛永13	1636	楷書		表土	25.0
C－400	〃	〃	〃	〃		表土	23.0

表—25　E地区住居跡一覧表

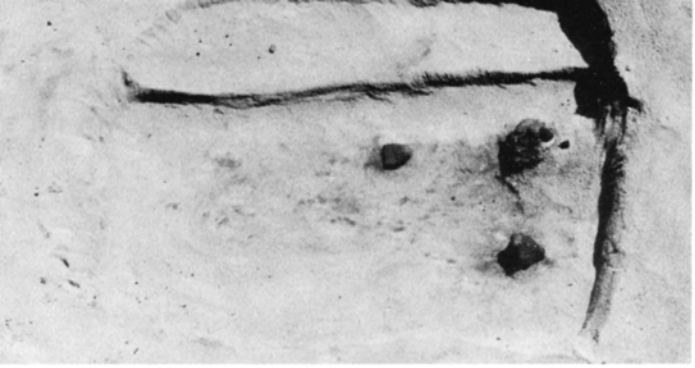
号数	形態	規模(m)		カマド		周溝	柱穴	備考
		東西	南北	位置	構造			
160	方形	5	4.22	東（中央）	粘土	有		
161	方形	4.72	4.6	南(西寄り)	粘土	有	有	
162	長方形	4.88	3.1	東(北寄り)	粘土	無		SI171と重複
163	方形	4.1	4.56	東(南寄り)	粘土	有	有	石支柱
164	方形	4.2	4.56	南(西寄り)	粘土	有	有	
165	方形	4.7	5.08	南(東寄り)	粘土	無		SI170、176と重複
166	方形	5.02		不明	粘土	無		
167	方形ヵ	5.1	5.2	南(東寄り)	粘土			SI160と重複、土師器甕支柱
168	〈カマドのみ〉							
169	方形	3.8		南(東寄り)	粘土	有		丸底土師器甕支柱
170				南(西寄り)	粘土			SI165、176と重複
171	方形	5.1	4.4	不明	粘土	有	有	SI162、172と重複
172	方形ヵ			不明				SI164、169、171、181と重複
173	〈カマドのみ〉				粘土			
174	方形	3.04	2.86	東(北寄り)	粘土	無		土師器甕支柱
175	方形	3.04	3.14	北東コーナー	粘土			SI165、170、177と重複
176	長方形	4.8	3.26	南(西寄り)	粘土	有	有	SI176と重複
177	方形	3.6	3.5	不明		無		
178	方形ヵ		5.3	不明		無		
179	不整円形	7.2	6.8	南（中央）	粘土	無		
180								
181	方形	4.64	4.4	東(北寄り)	粘土	無		SI164と重複
182	隅丸方形	4.1	4.8	東(南寄り)	粘土	無		
183	方形	3.42	3.08	東(北寄り)	粘土	有	有	
184	方形ヵ	3.52		不明				
185	隅丸方形	3.6	3.9	不明		無		
186				不明				
187	方形	3.5	3.7	東(北寄り)	粘土	無	有	
188	方形		2.47			無	有	
189	方形ヵ	4.16		不明		無		
190	〈カマドのみ〉			不明	粘土			SI191と重複
191	不整方形		4.7	不明				SI187と重複

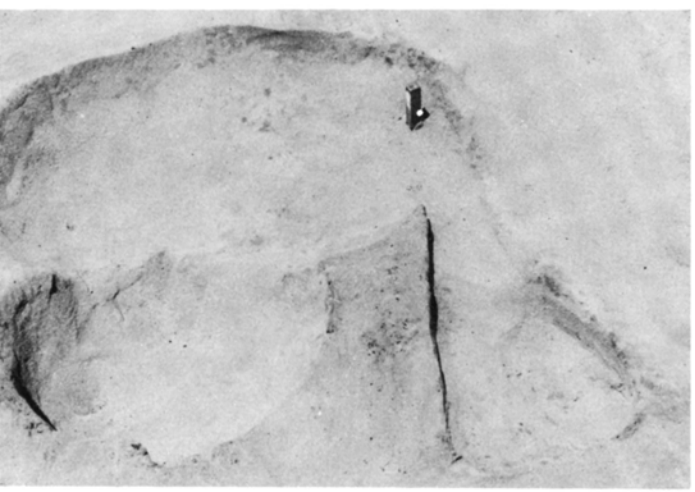
図版1　上　遺 跡 近 景（北から）

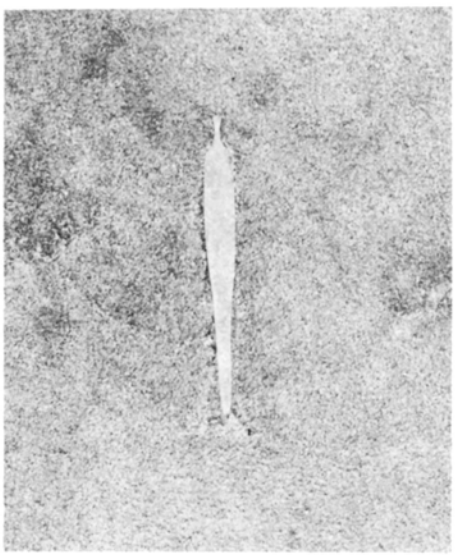
下　昭和52年度分布調査状況（北から）

図版 2　上　A地区全景（東から）　下　ST009，SD037（西から）

図版 3　上　SD040（南から）　下　SD040（南から）

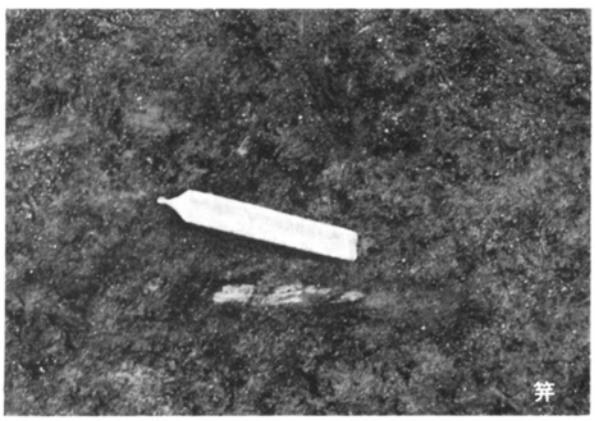


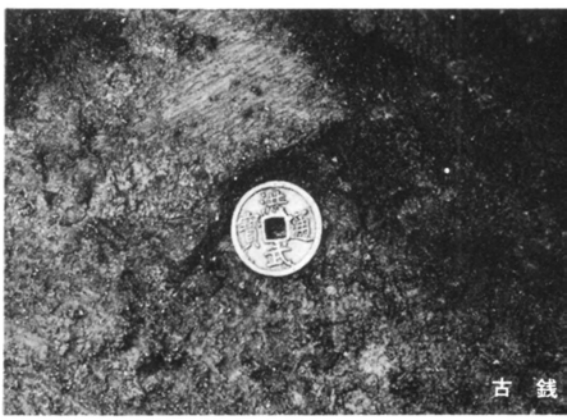




図版 4

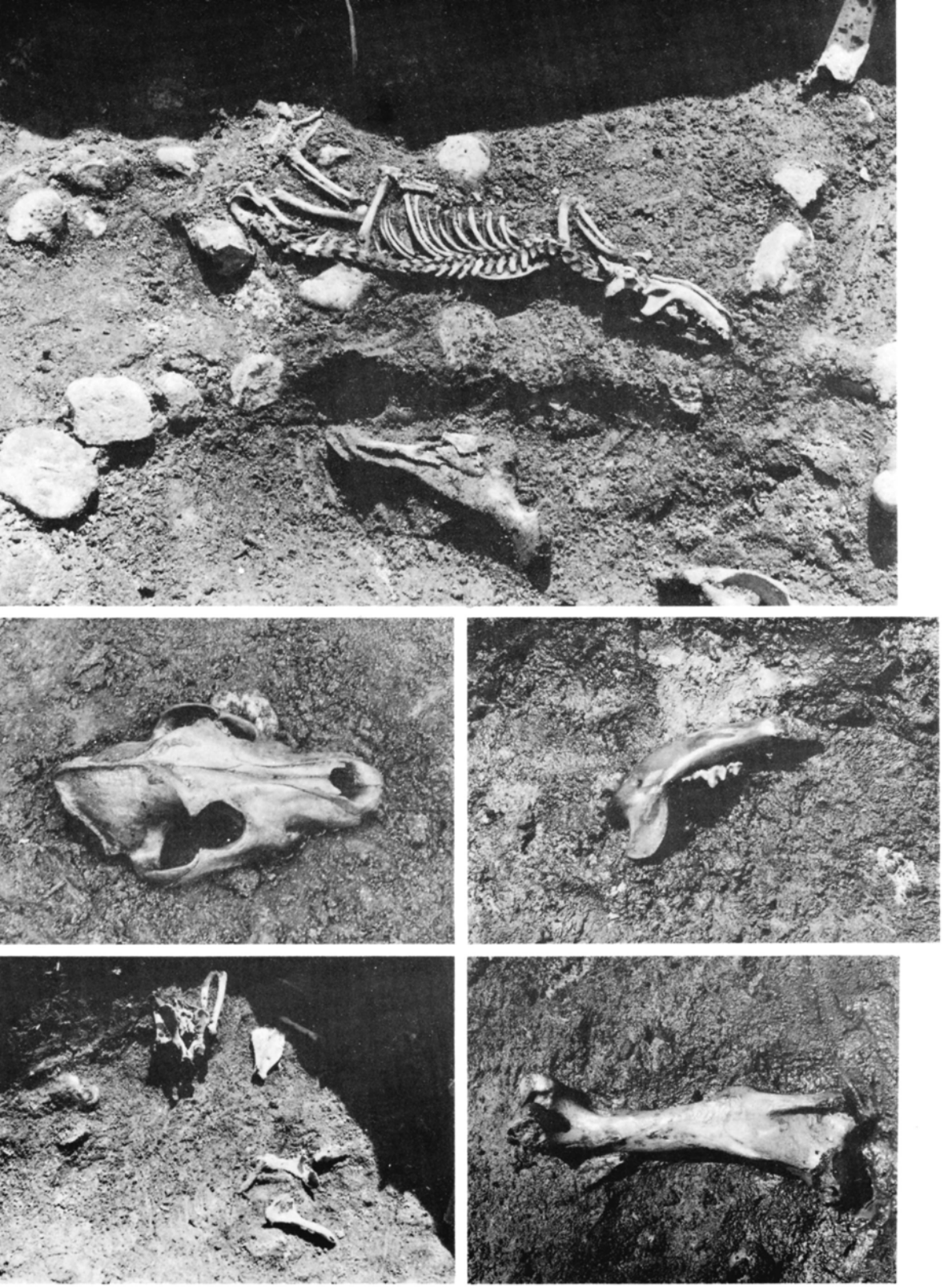
左上　ST001
中　ST006
中　ST007
下　ST014，015，016
右上　ST006 古銭出土状況
下　笄出土状況



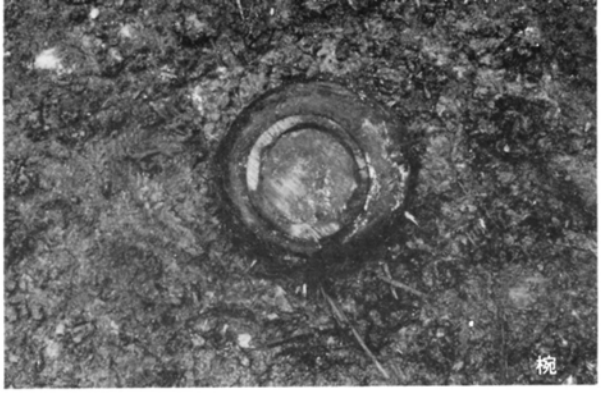


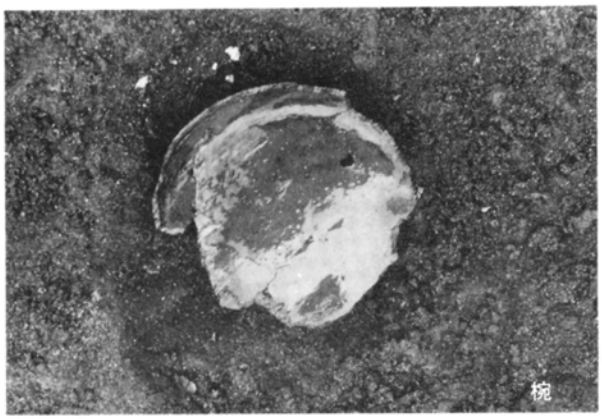
図版 5　上　B地区 SX043 全景

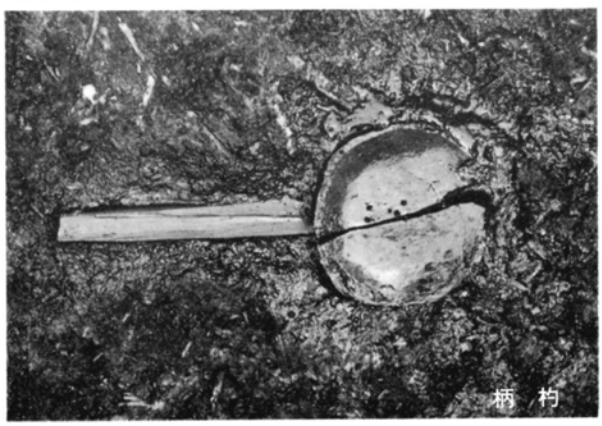
下　SX043 遺物出土状況

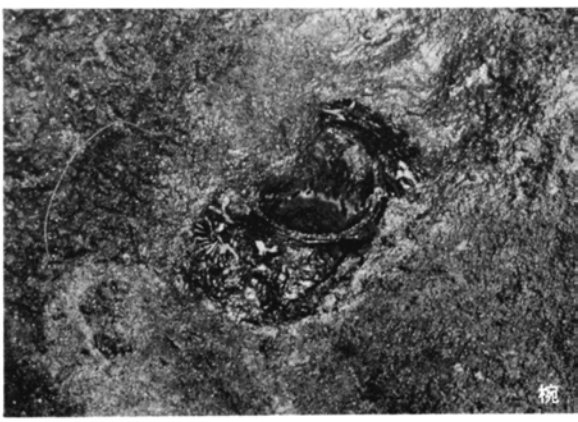


図版 6　ＳＸ043 犬骨出土状況

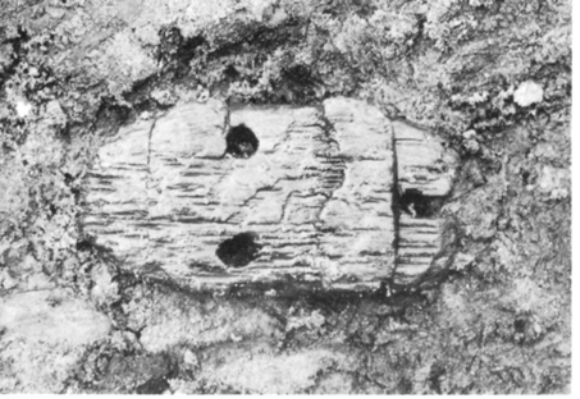


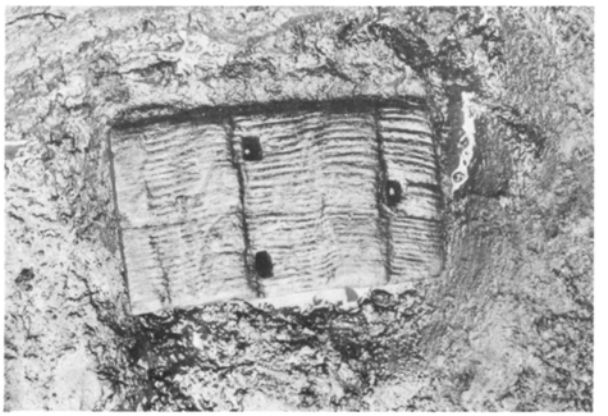
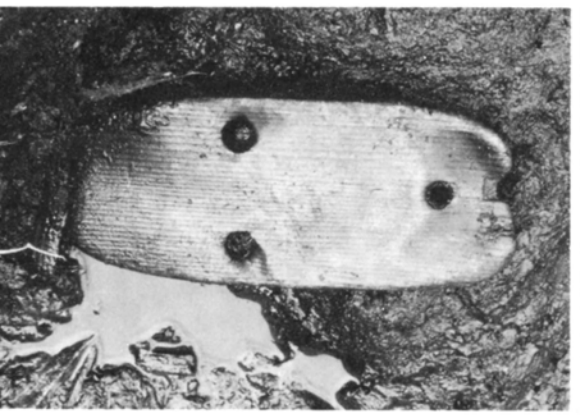
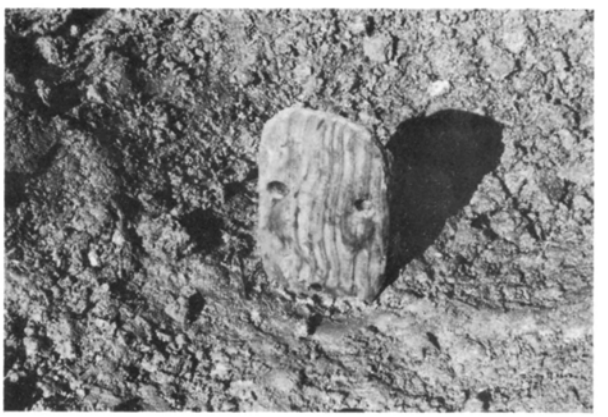






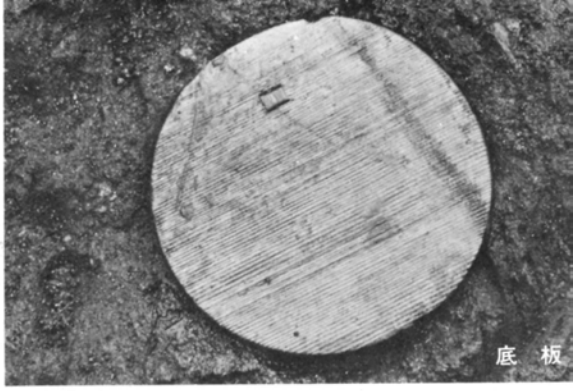
図版 7　ＳＸ043 漆器出土状況

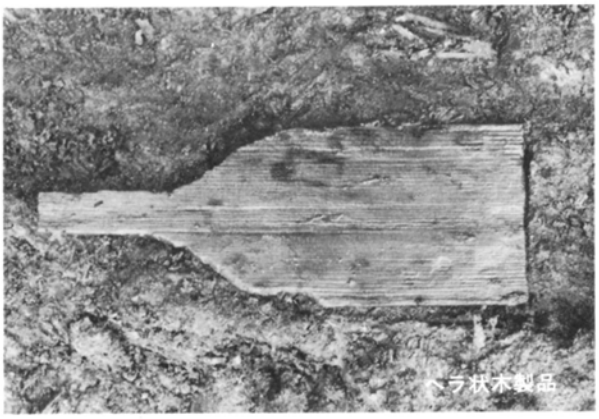


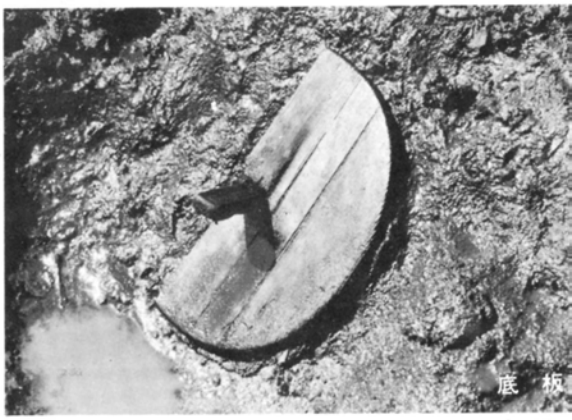




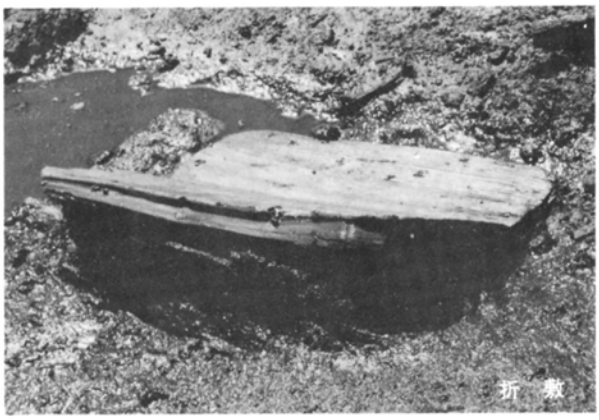
図版 8

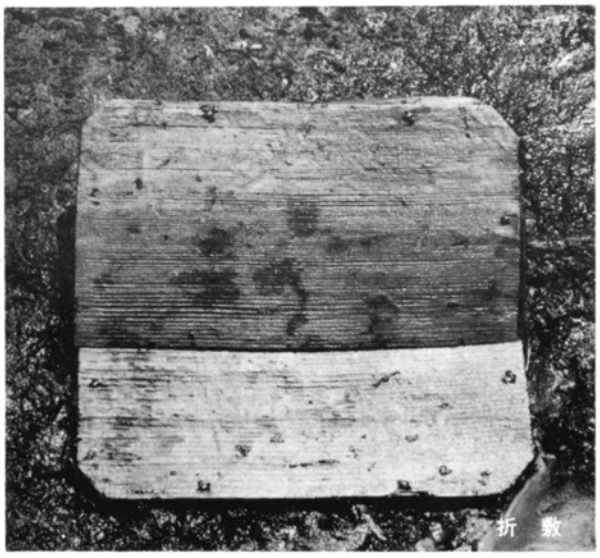
ＳＸ043 下駄出土状況









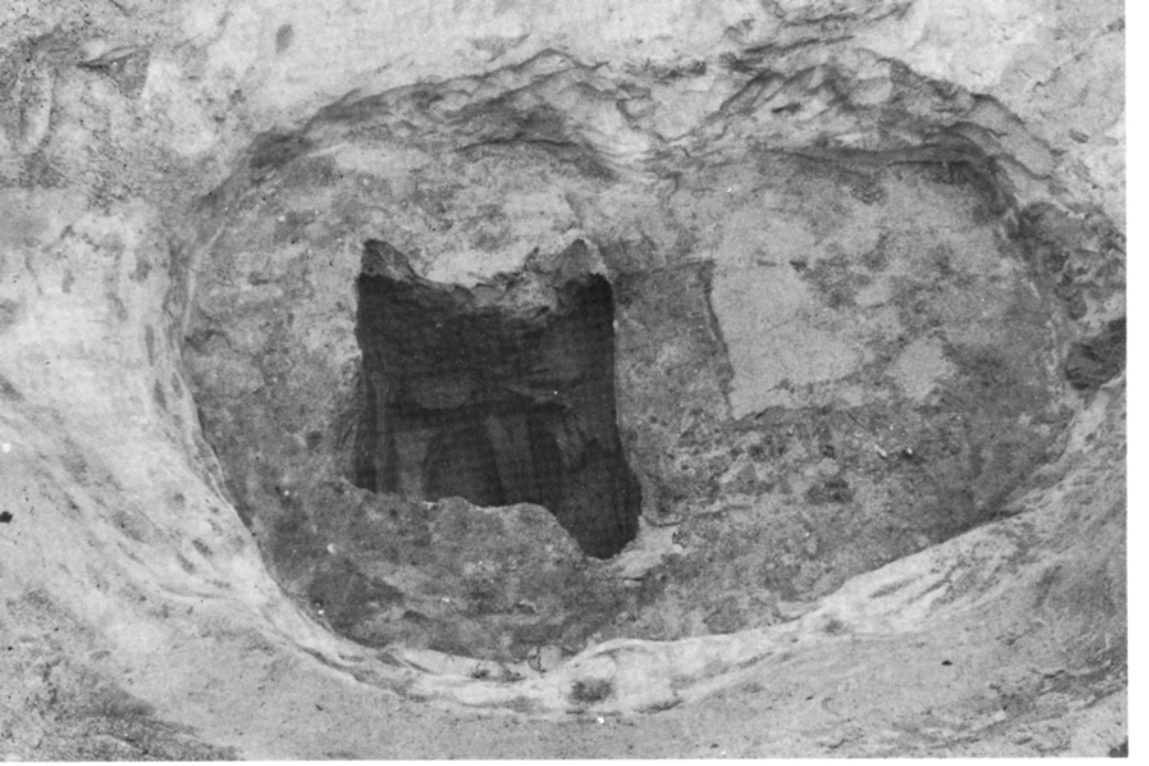


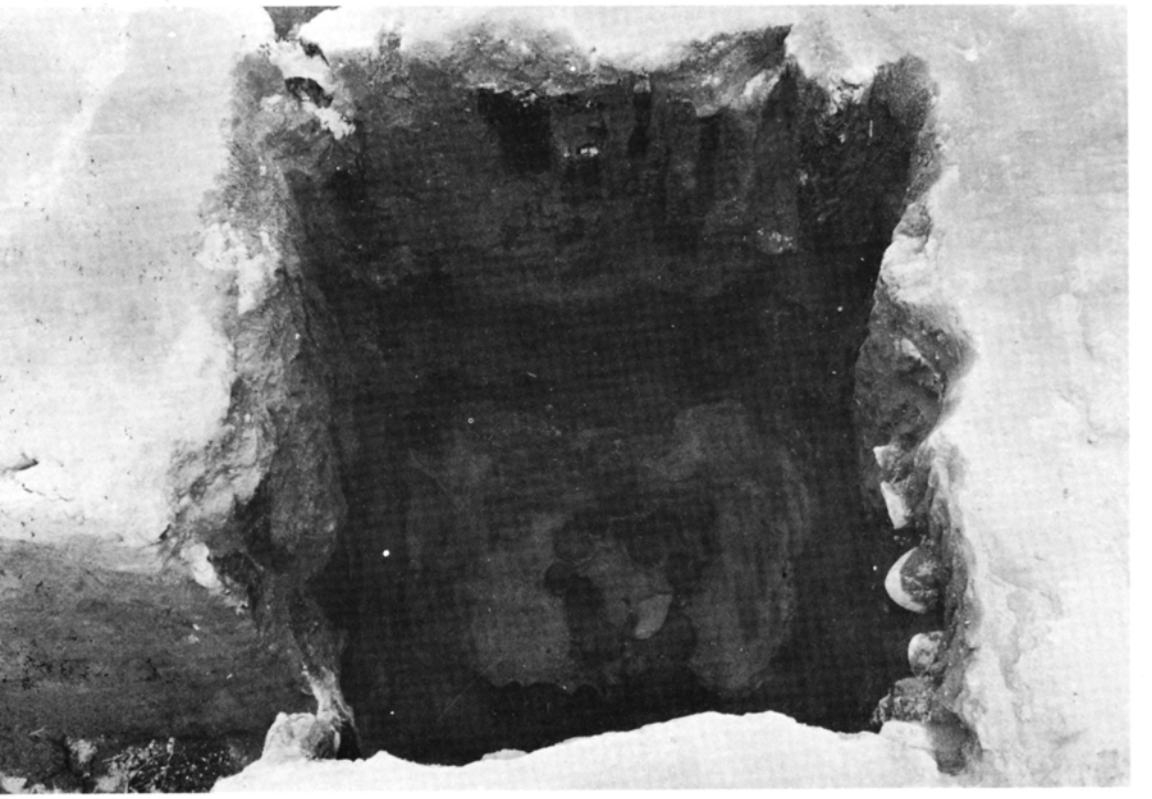
図版 9

SX043 木製品出土状況

図版10　上　第１遺構面全景（南から）　下　第２遺構面全景（南から）

図版11　上　第３遺構面全景（北から）　下　第４遺構面全景（北から）

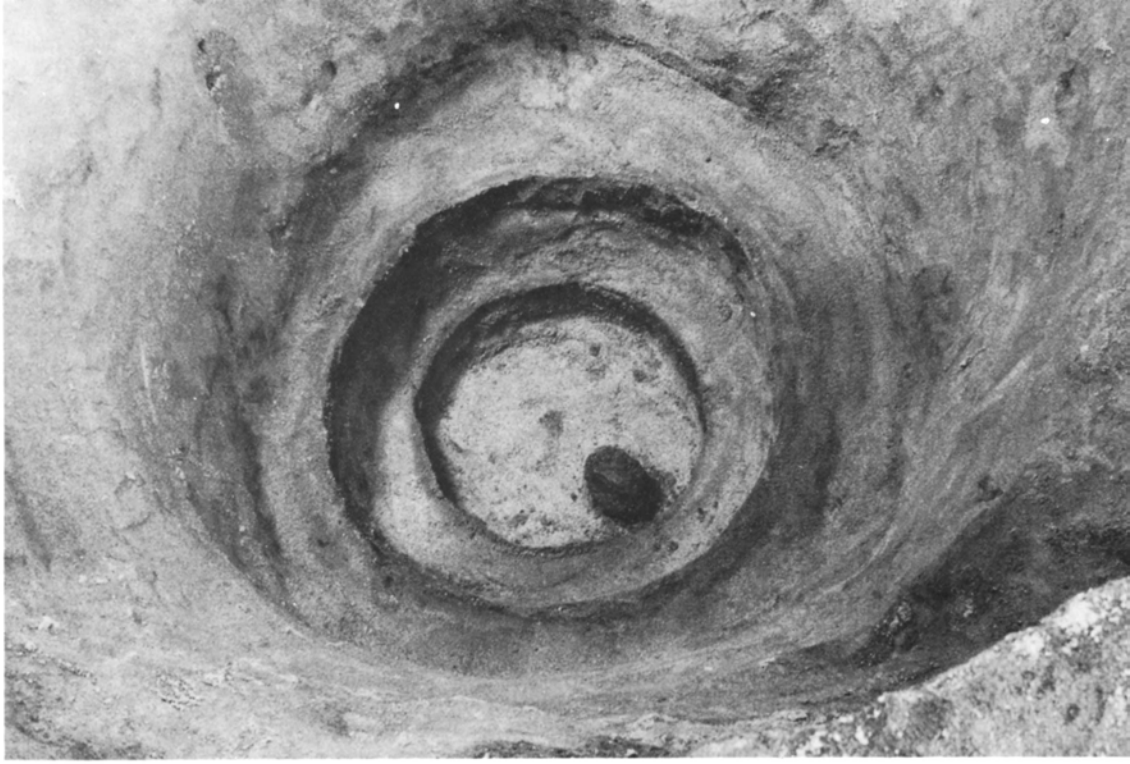




図版12　上　SE051井戸跡（北から）　下　SE052井戸跡（東から）

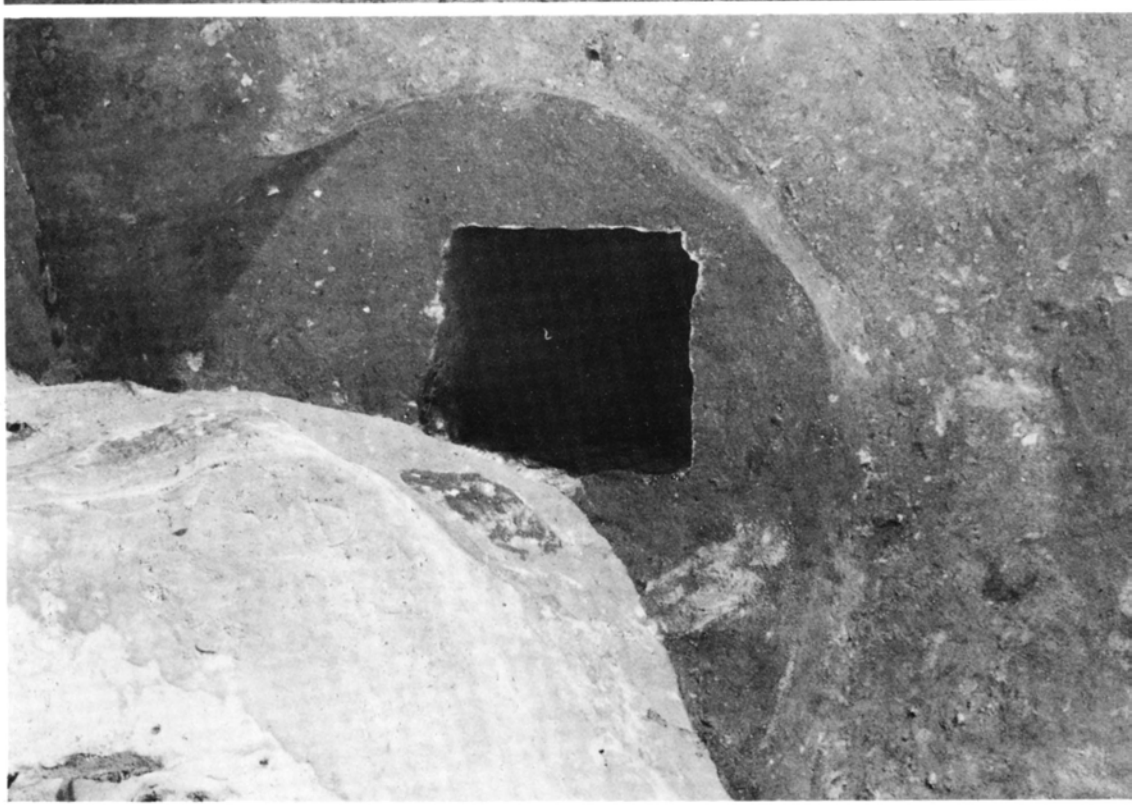
図版13　上　ＳＥ053井戸跡（東から）　下　ＳＥ051，053，054井戸跡（北から）

図版14　上　ＳＥ054井戸跡（北から）　下　ＳＥ055井戸跡（北から）

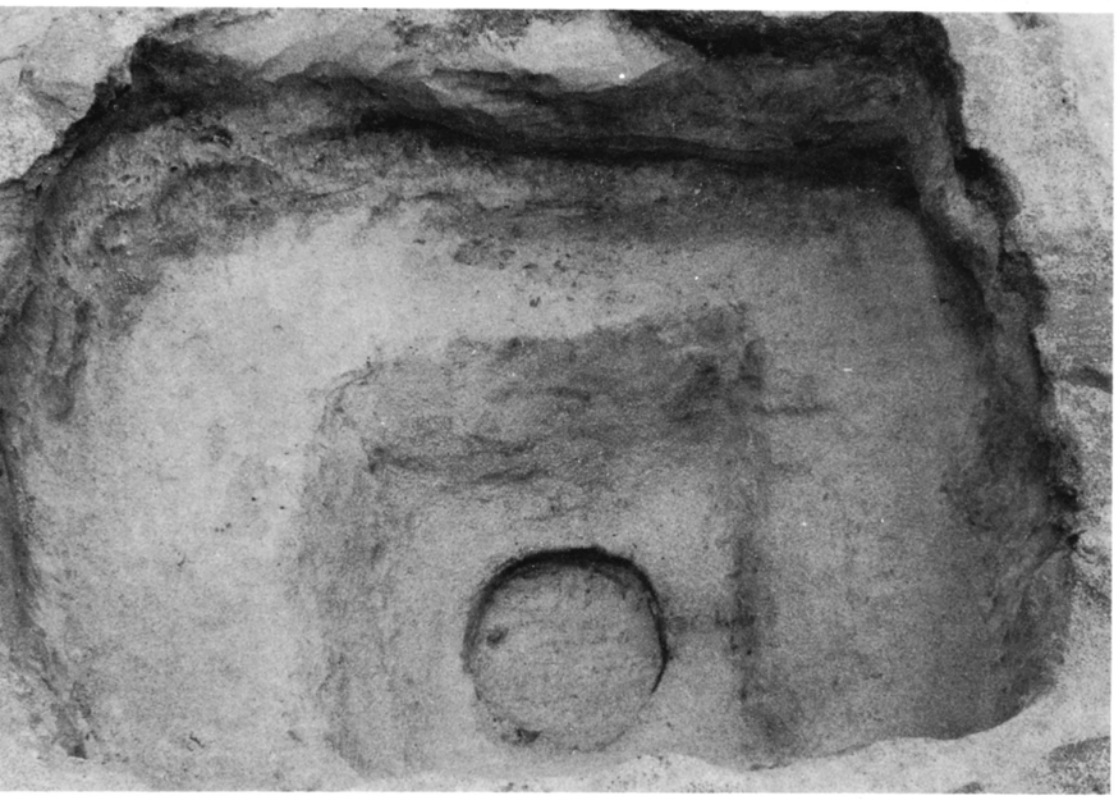


図版15　上　ＳＥ055井戸跡掘り方　下　ＳＥ056井戸跡（西から）

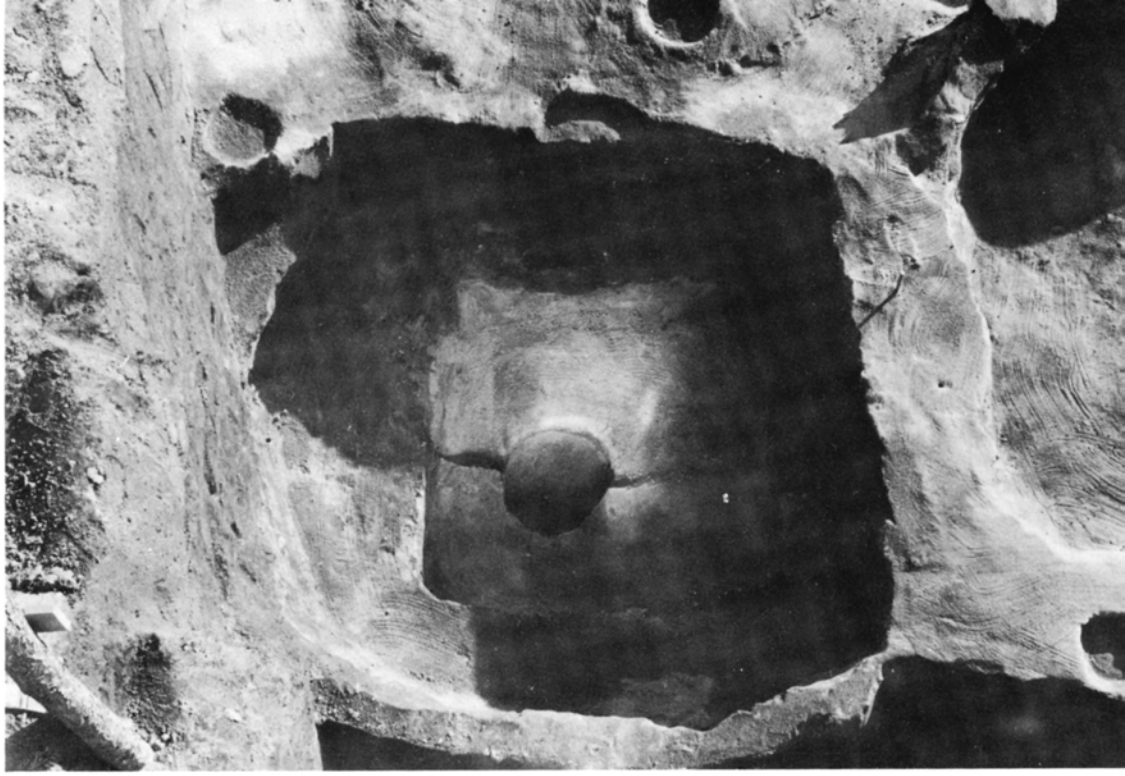
図版16　上　ＳＥ057井戸跡（東から）　下　ＳＥ058井戸跡（西から）

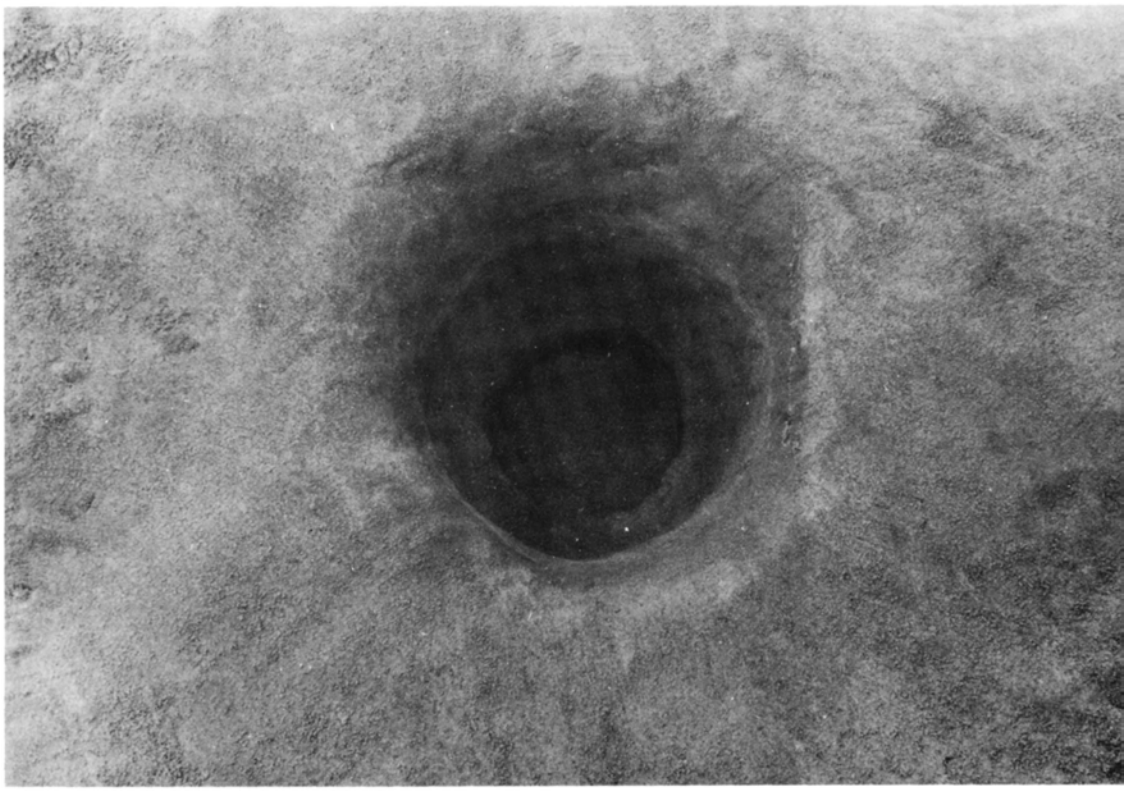


図版17　上　ＳＥ058井戸跡井筒　下　ＳＥ084井戸跡（東から）



図版18　上　ＳＥ085井戸跡（南から）　下　ＳＥ087井戸跡（南から）

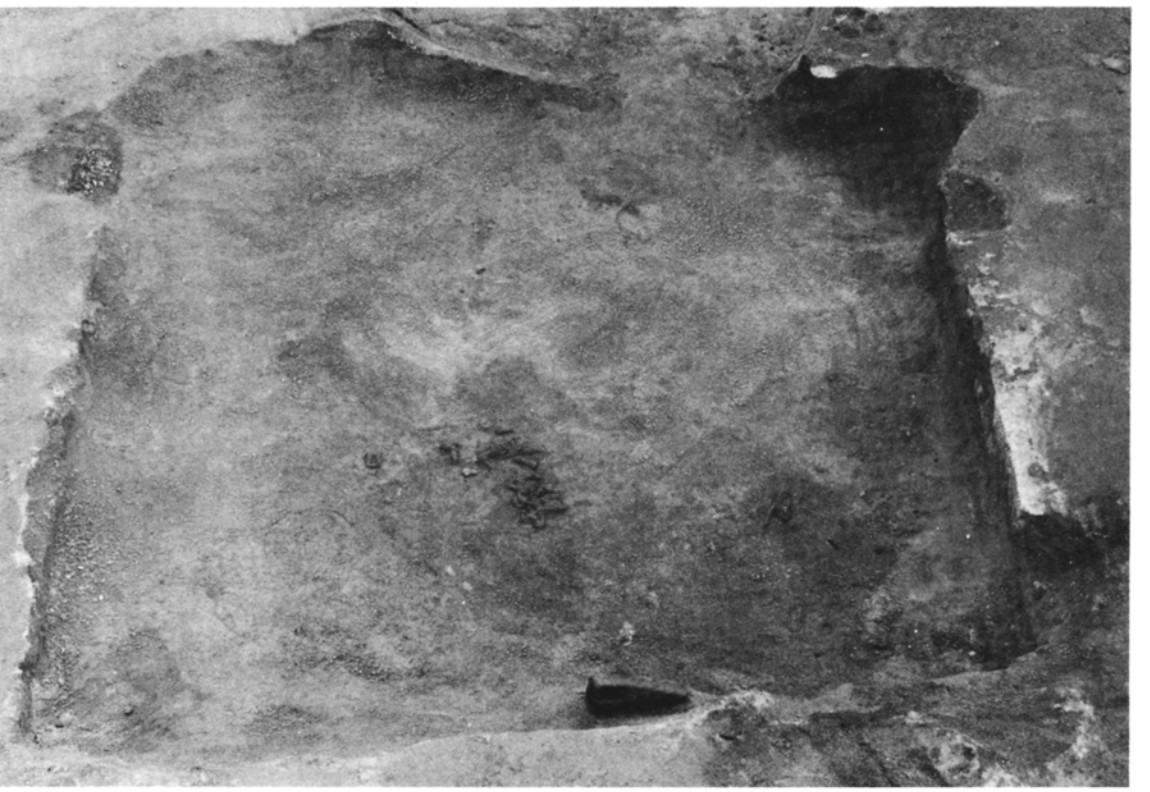




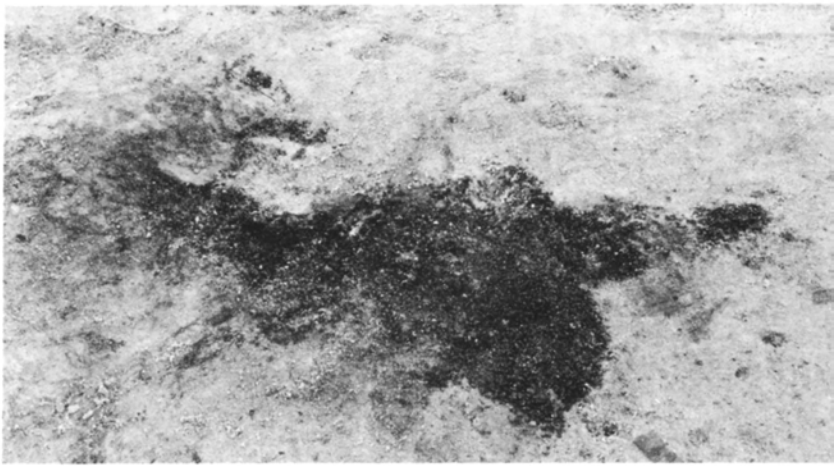
図版19　上　ＳＥ088井戸跡（北から）　下　ＳＥ089井戸跡（南から）

図版20　上　ＳＥ086井戸跡（西から）　下　ＳＥ113井戸跡（南から）

図版21　上　ＳＥ115井戸跡（南から）　下　ＳＥ116井戸跡（東から）



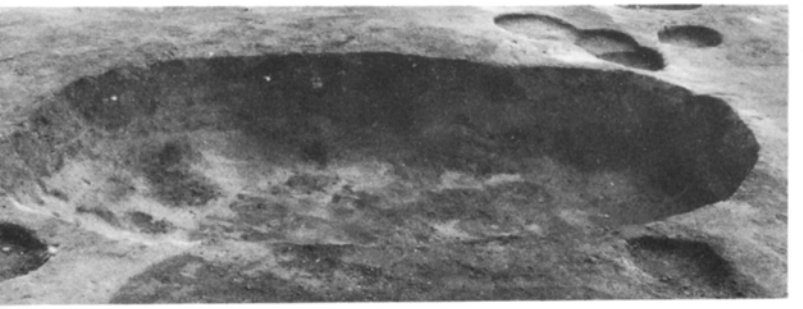
図版22　上　ＳＩ059竪穴状遺構（南から）　下　ＳＩ111竪穴状遺構（南から）

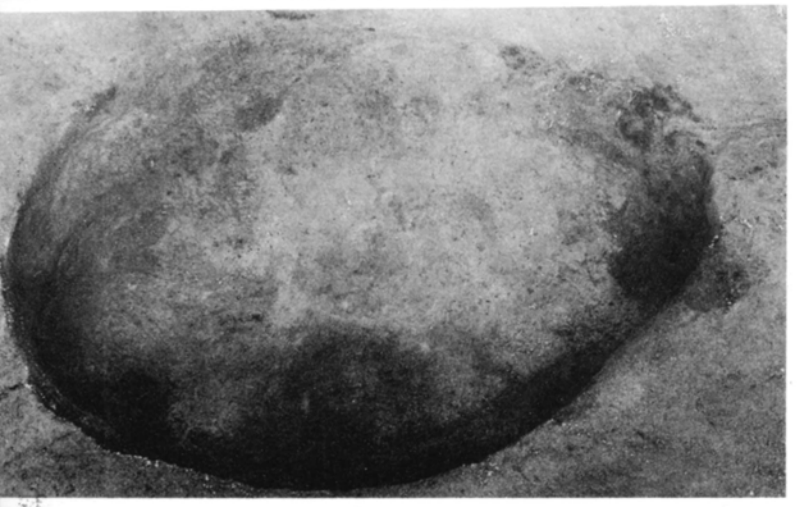


図版23　上　ＳＢ110掘立柱建物跡（東から）

中　ＳＸ108落ち込み出土炭化米

下　ＳＸ062小鍛冶遺構





図版24

左上　ＳＫ066 土坑
中　ＳＫ091 土坑
中　ＳＫ094 土坑
下　ＳＫ137 土坑
右上　ＳＸ083 落ち込み出土
珠洲系擂鉢
下　ＳＥ052 井戸跡出土
宝篋印塔塔身部

図版25　上　上層遺構全景（北から）

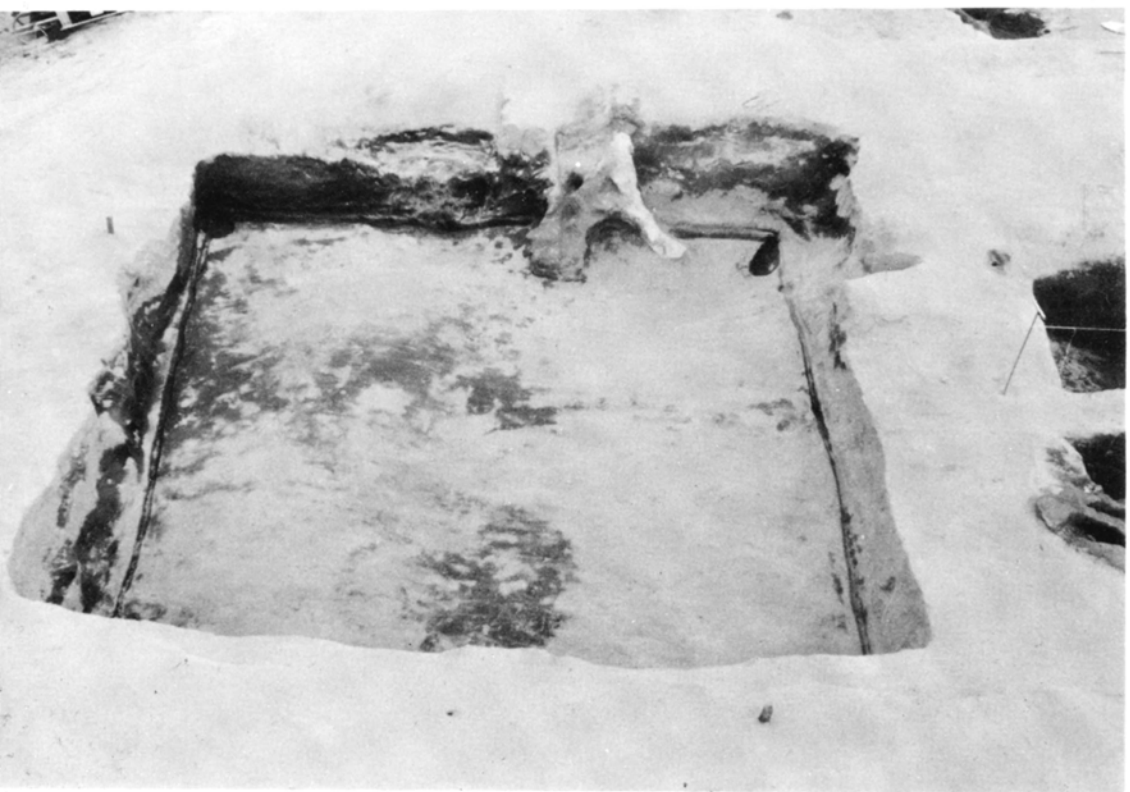
下　下層遺構全景（北から）

図版26　上　上層遺構全景南（東から）

下　下層遺構全景南（東から）

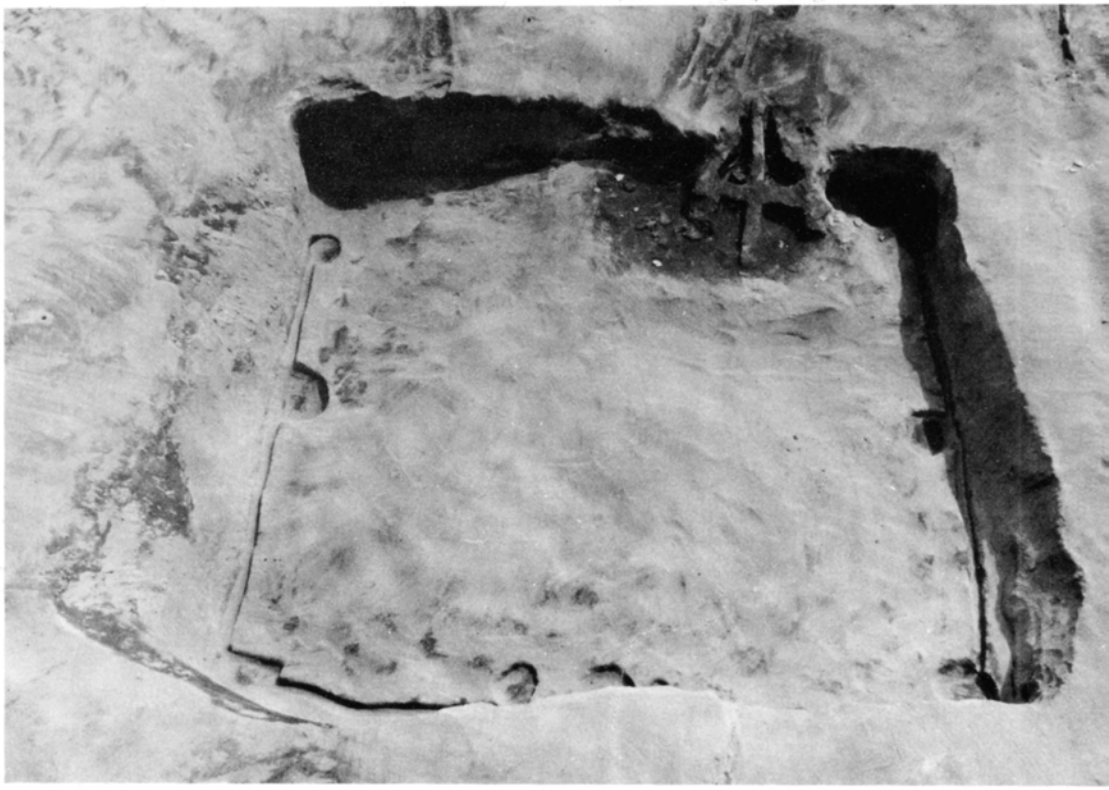
図版27　上　下層遺構全景北（東から）

下　発掘調査風景（北西から）



図版28　上　ＳＩ160，167，168住居跡（北から）

下　ＳＩ161住居跡（北から）



図版29　上　ＳＩ162，171住居跡（東から）

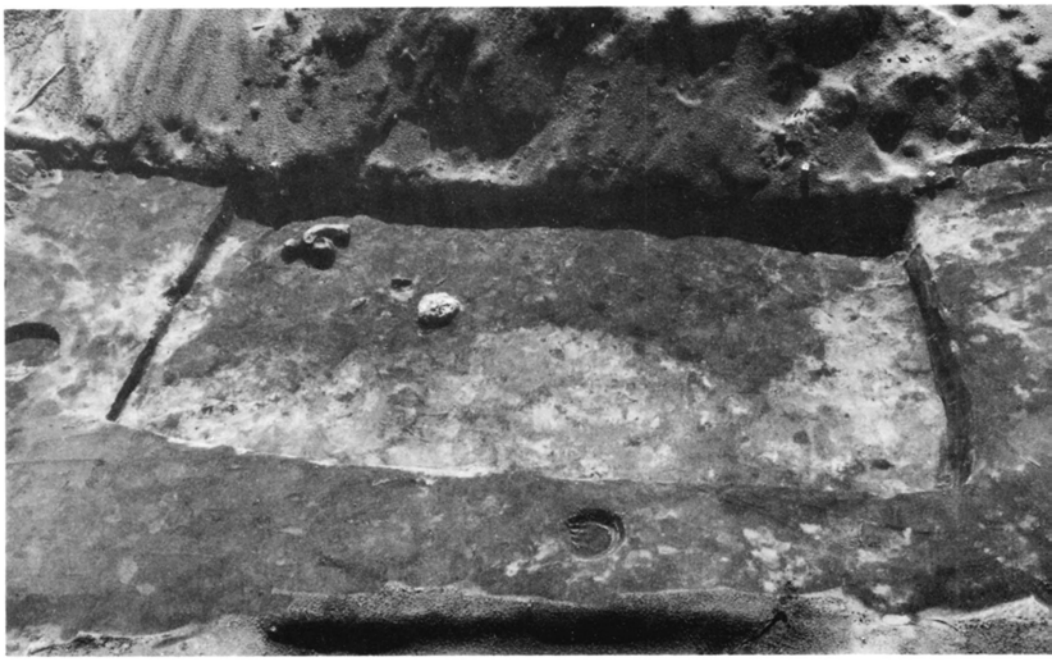
下　ＳＩ163住居跡（西から）

図版30　上　ＳＩ164住居跡（北から）

下　ＳＩ165，170住居跡（北から）

ＳＩ165，170，176，177住居跡
（北から）

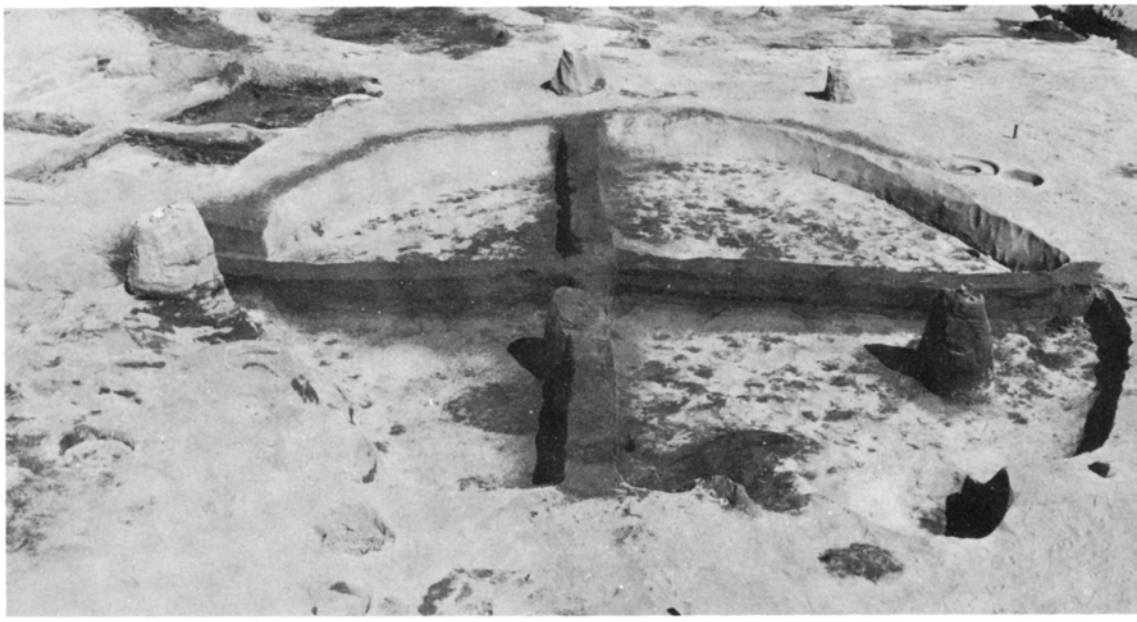
ＳＩ166住居跡（北から）

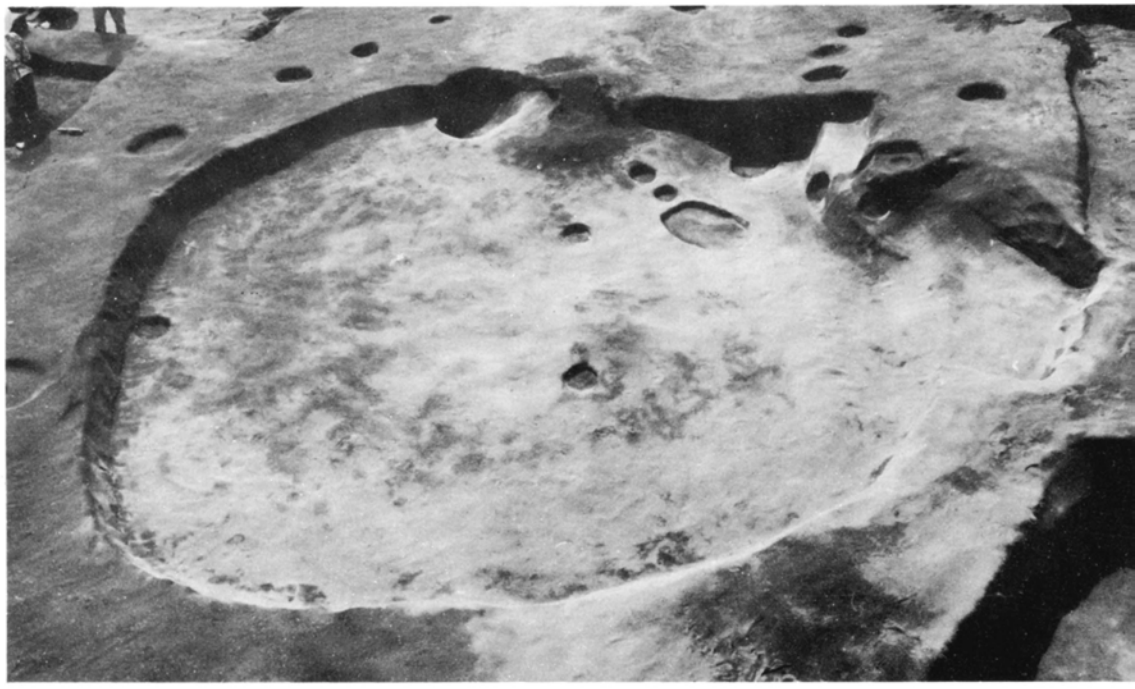


図版31

図版32　上　ＳＩ174住居跡（西から）

　　下　ＳＩ175住居跡（西から）

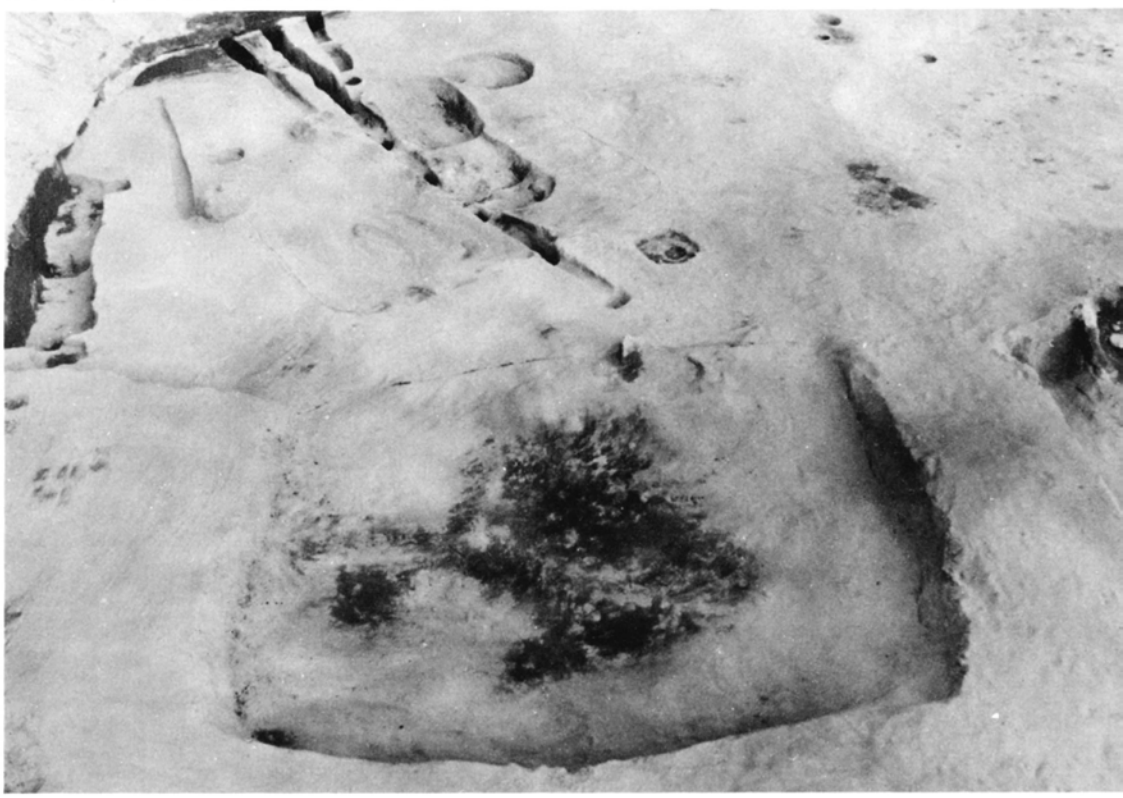




図版33　上　ＳＩ178住居跡（西から）
中　ＳＩ179住居跡（南から）
下　ＳＩ179住居跡（北から）

図版34　上　ＳＩ181住居跡（西から）

下　ＳＩ183住居跡（南から）

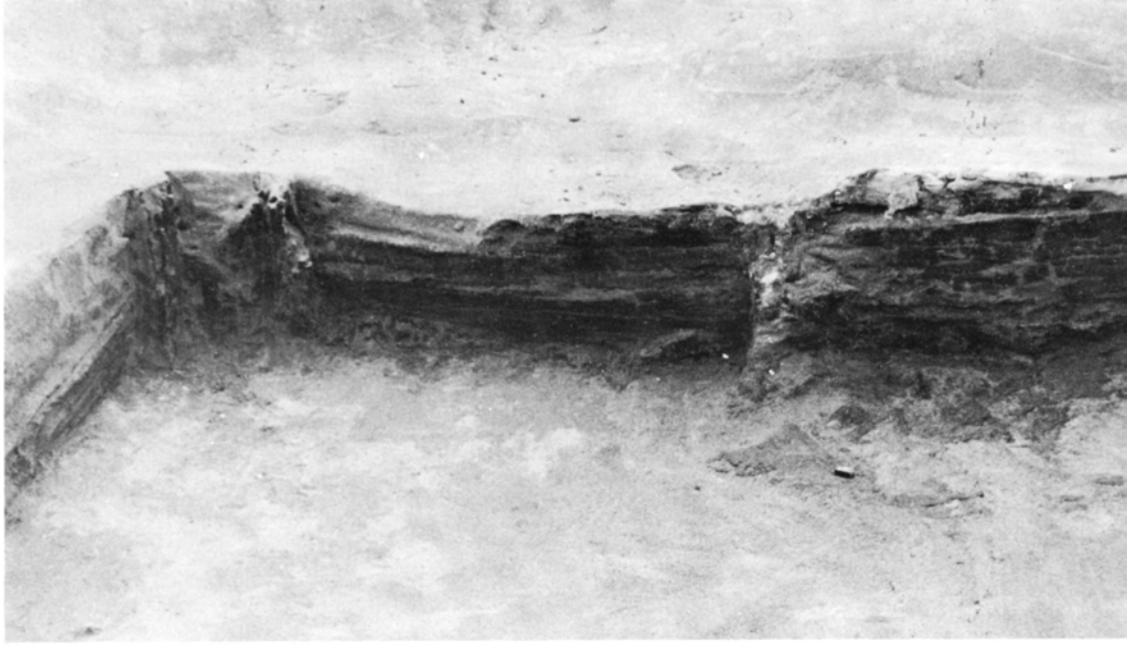


図版35　上　ＳＩ184住居跡（南から）

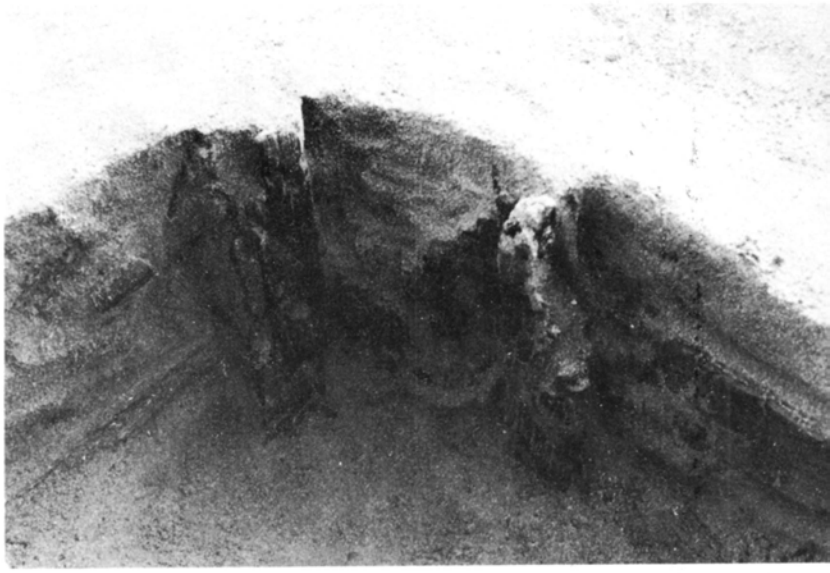
下　ＳＩ182，185住居跡（西から）

図版36　上　ＳＩ187住居跡（東から）

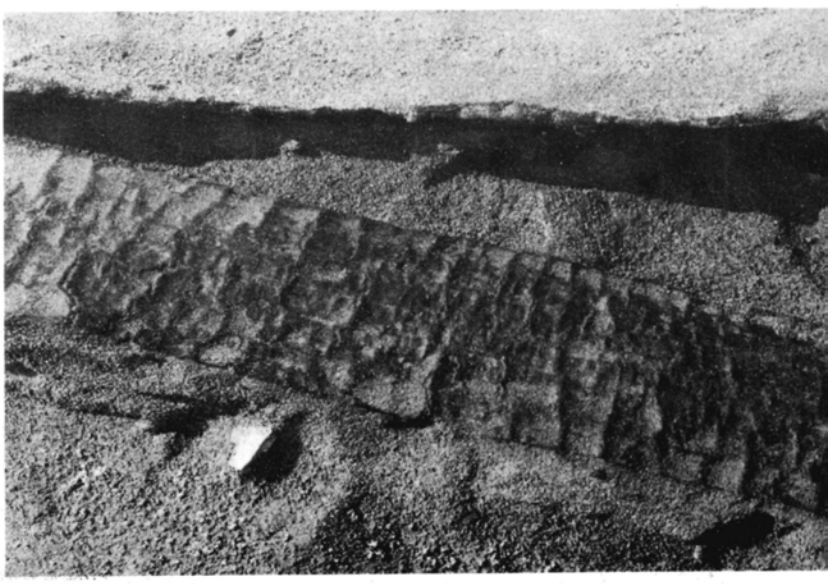
　　下　ＳＩ187住居跡（東から）



ＳＩ187住居跡
西壁炭化材



ＳＩ187住居跡
南西隅壁炭化材

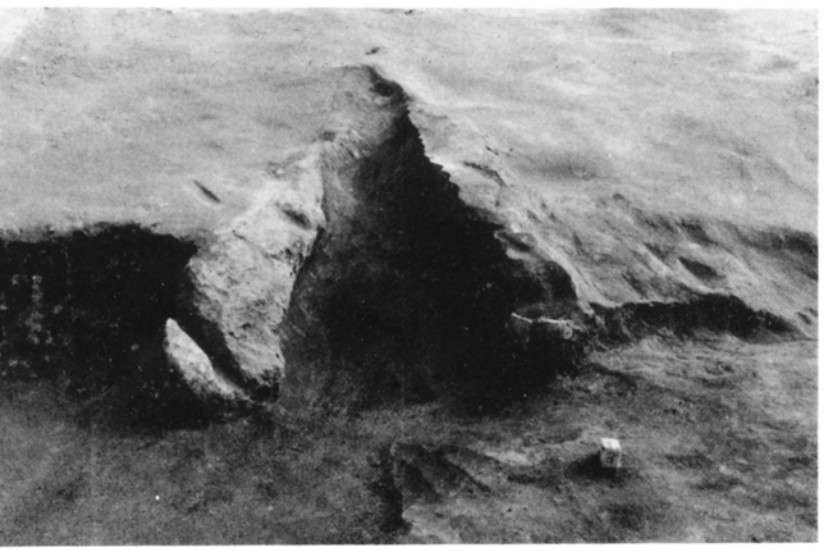


ＳＩ187住居跡
炭化材（手斧痕）

図版37

ＳＩ188住居跡
（西から）

ＳＩ162住居跡カマド
（西から）

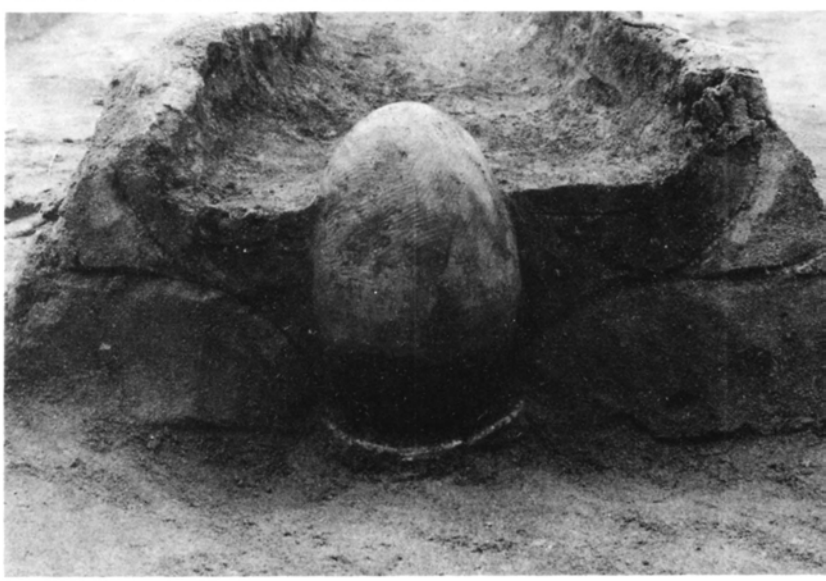


ＳＩ165住居跡カマド
（北から）

図版38

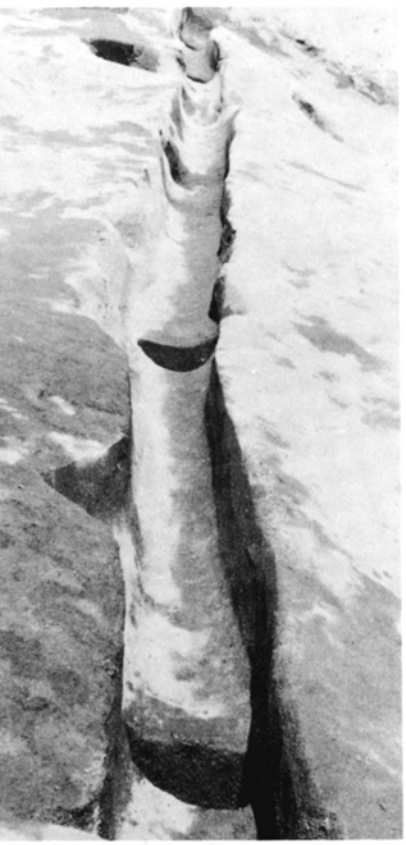
ＳＩ167住居跡カマド
（北から）

ＳＩ169住居跡カマド
（北から）



ＳＩ169住居跡カマド
（北から）

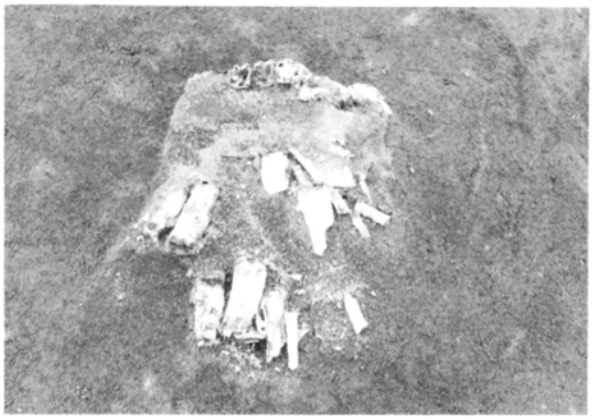
図版39



上　ＳＤ193，194 溝状遺構（西から）

下左　ＳＤ193 溝状遺構（南から）

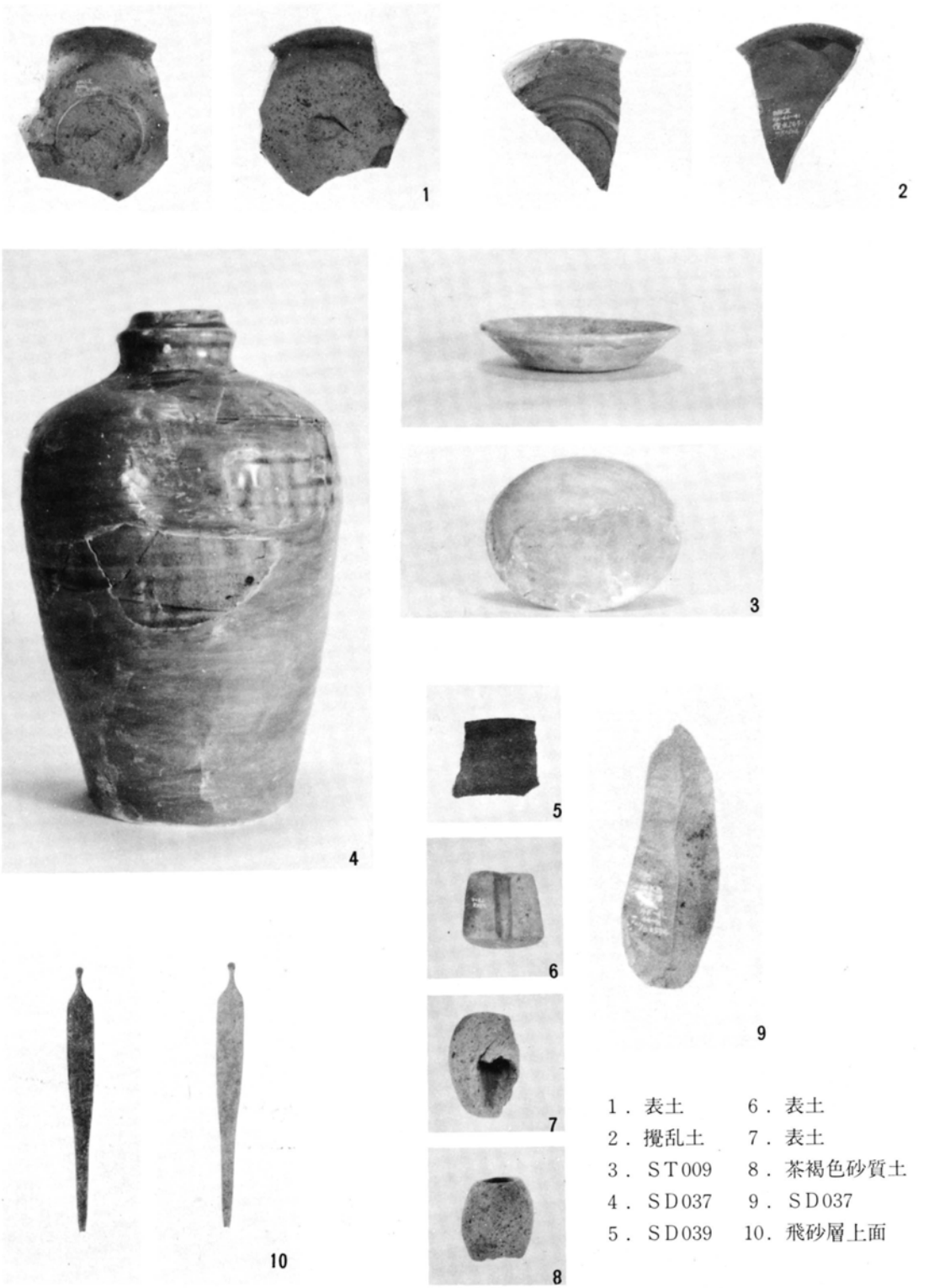
右　ＳＤ193，194 溝状遺構（西から）



図版41　上　ＳＢ192掘立柱建物跡（南から）
中　遺物出土状況
下　遺物出土状況

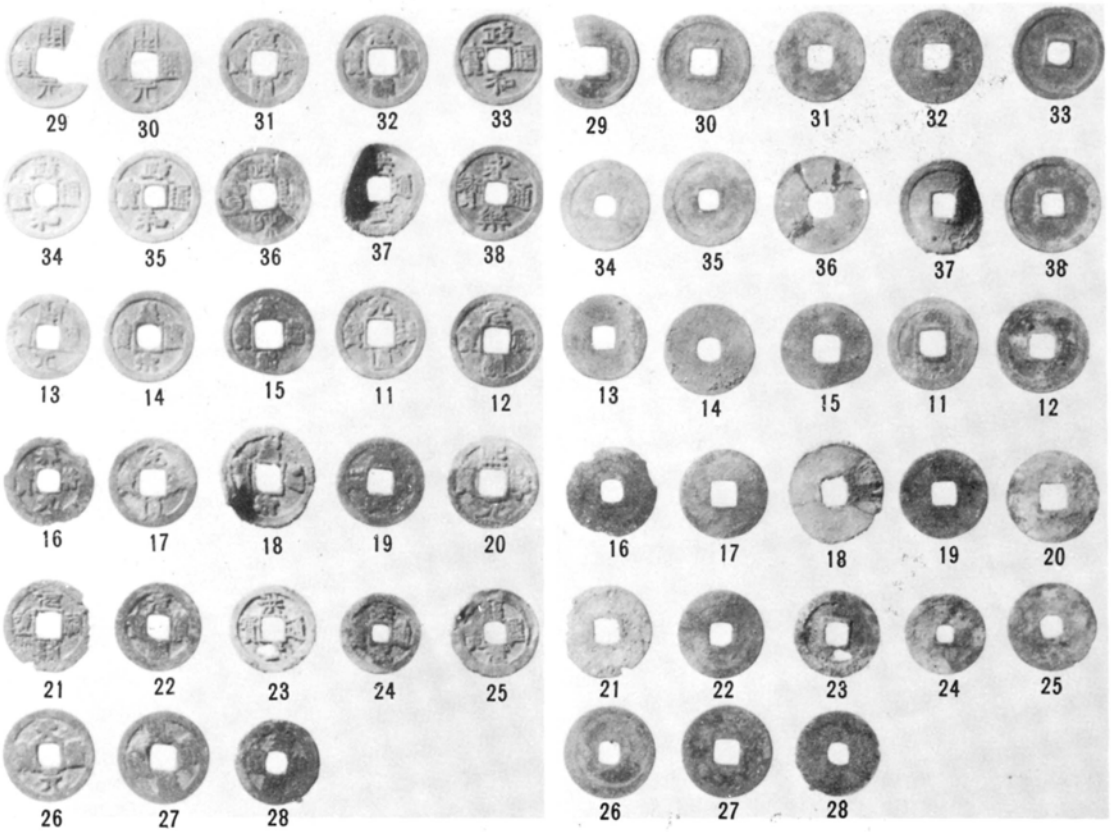
ＳＢ192掘立柱建物跡

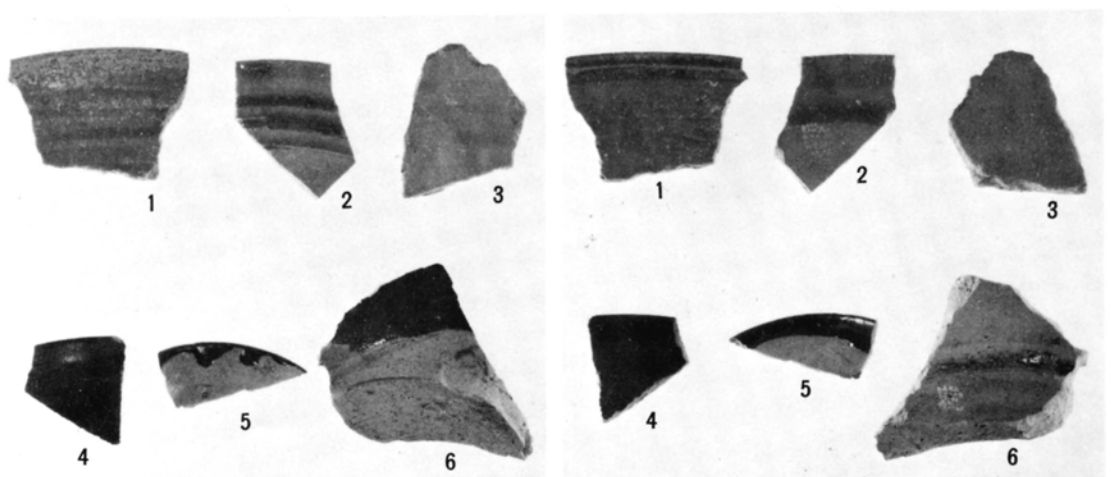
ＳＩ164住居跡(馬の骨)	ＳＩ180住居跡
ＳＩ187住居跡	ＳＩ182住居跡
ＳＩ164住居跡	ＳＩ187住居跡



1．表土　　6．表土
2．攪乱土　　7．表土
3．ＳＴ009　　8．茶褐色砂質土
4．ＳＤ037　　9．ＳＤ037
5．ＳＤ039　　10．飛砂層上面

図版42　Ａ地区出土遺物



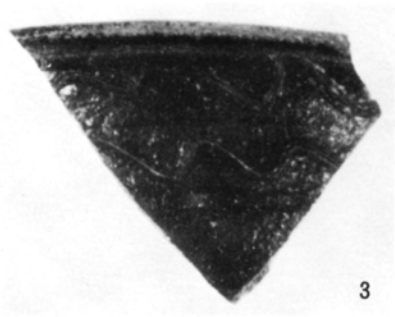


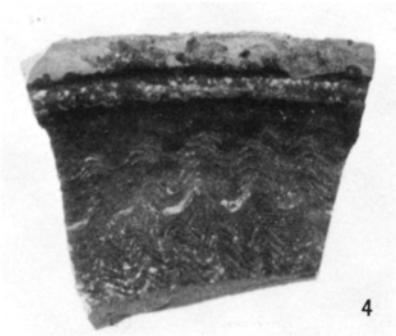
図版43

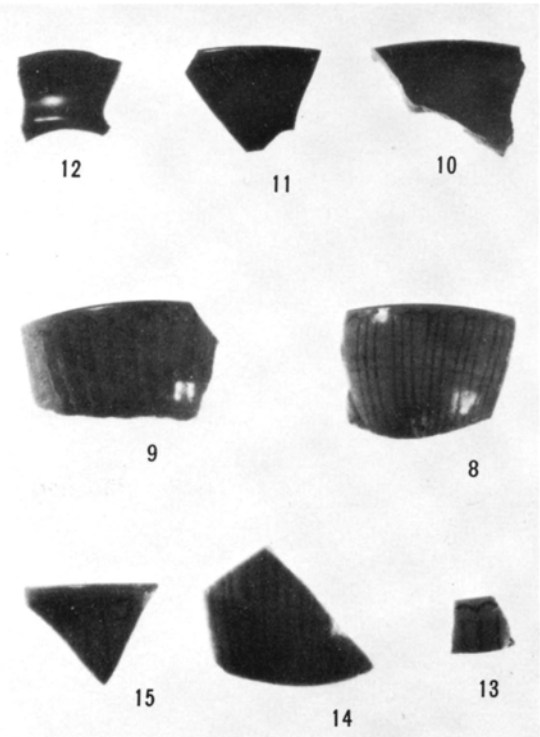
上　A地区出土古銭

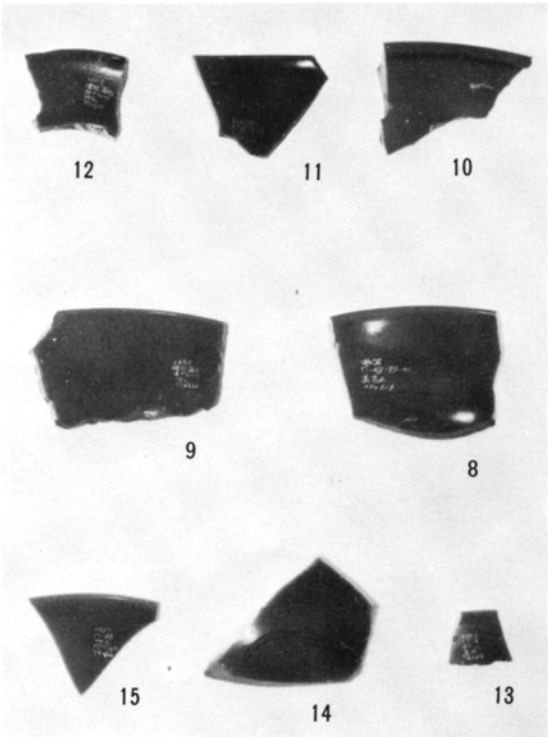
29～38	各層位出土		
11・12	ST002	13～15	ST006
16・17	ST008	18	ST009
19	ST013	20～25	ST015
26～28	SX004		

下　B地区SX043出土遺物

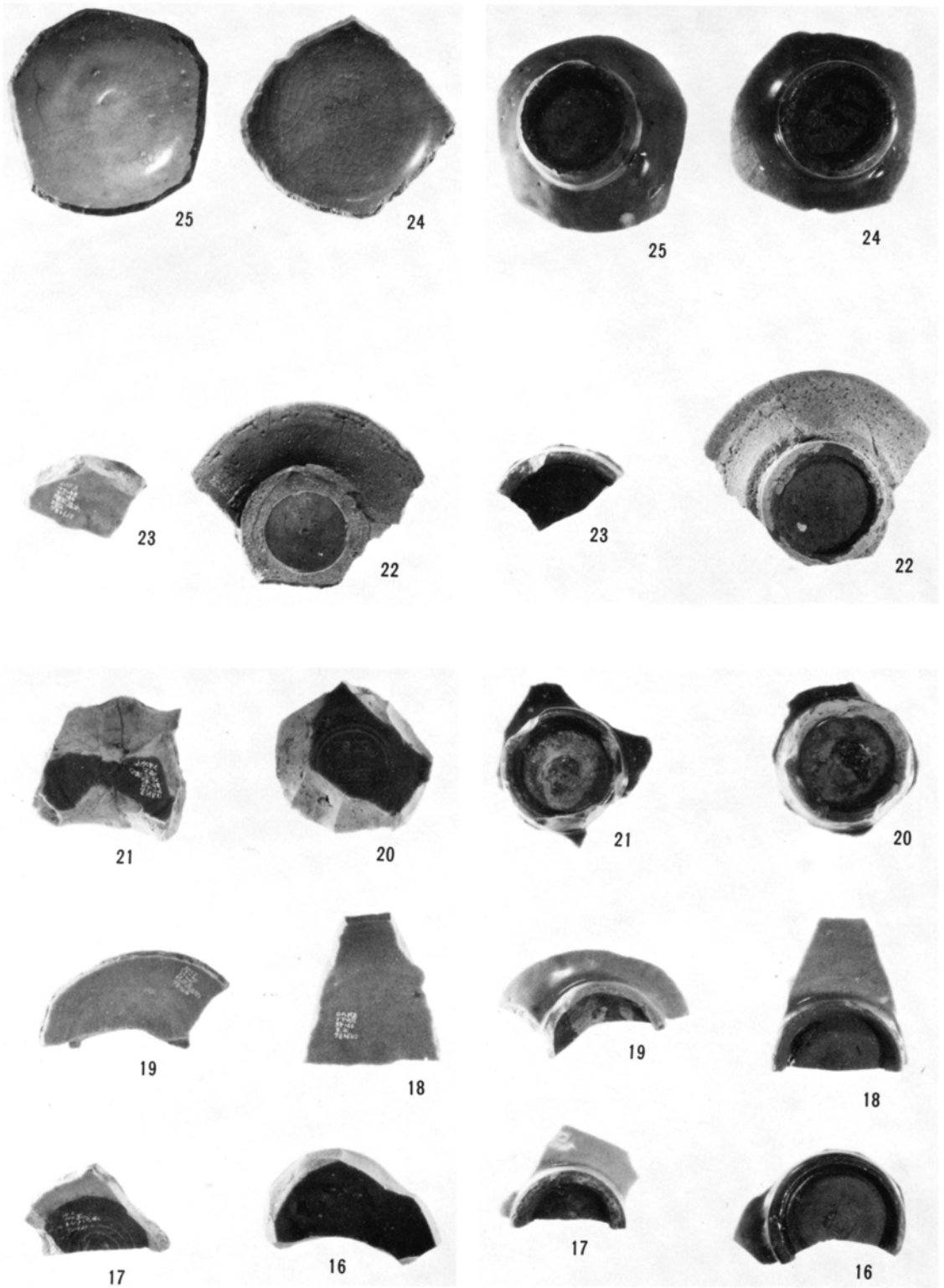




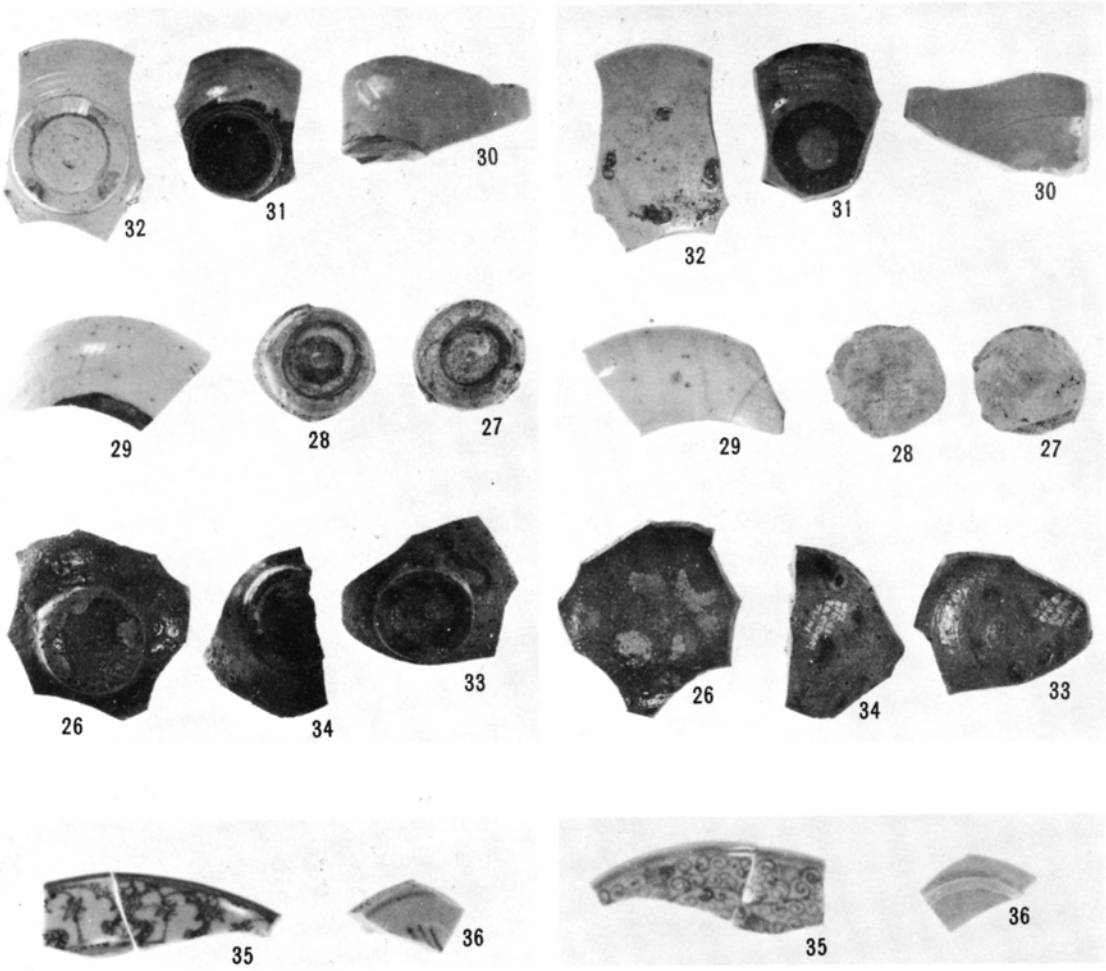




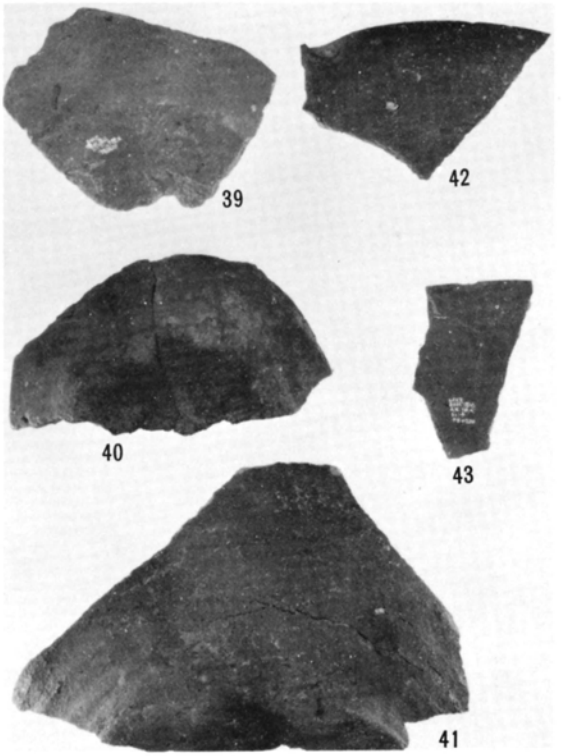
図版44　B地区SX043出土遺物

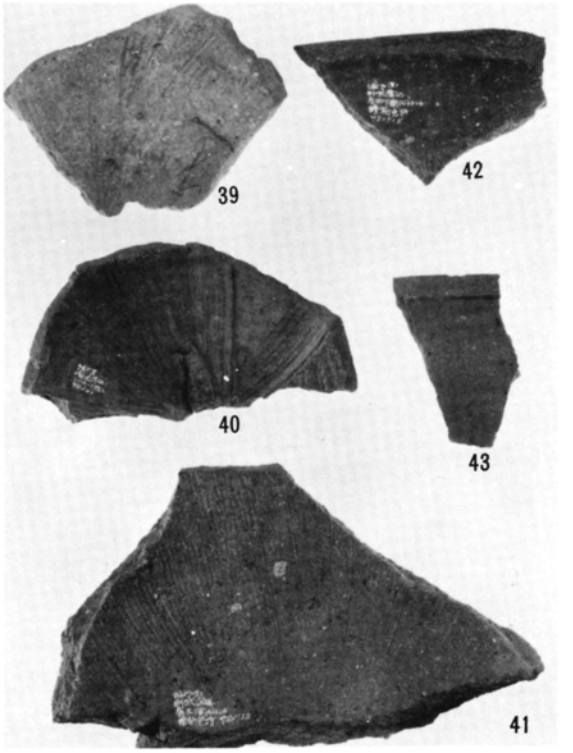


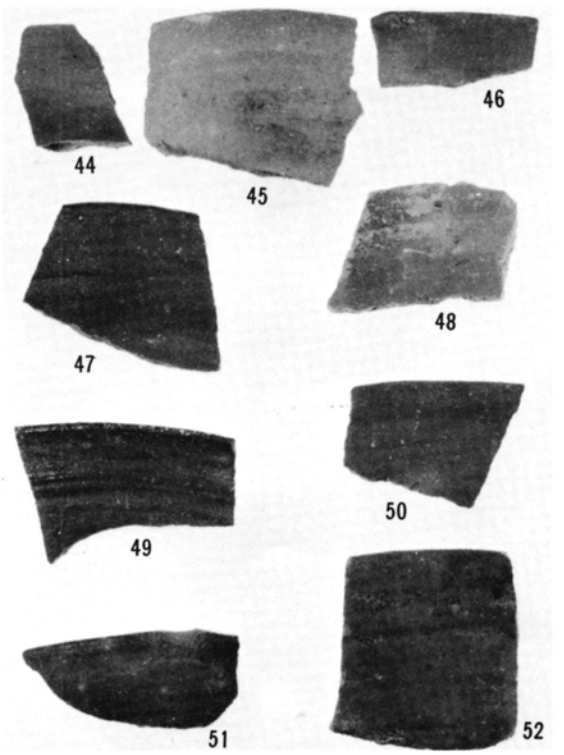
図版45　B地区SX043出土遺物

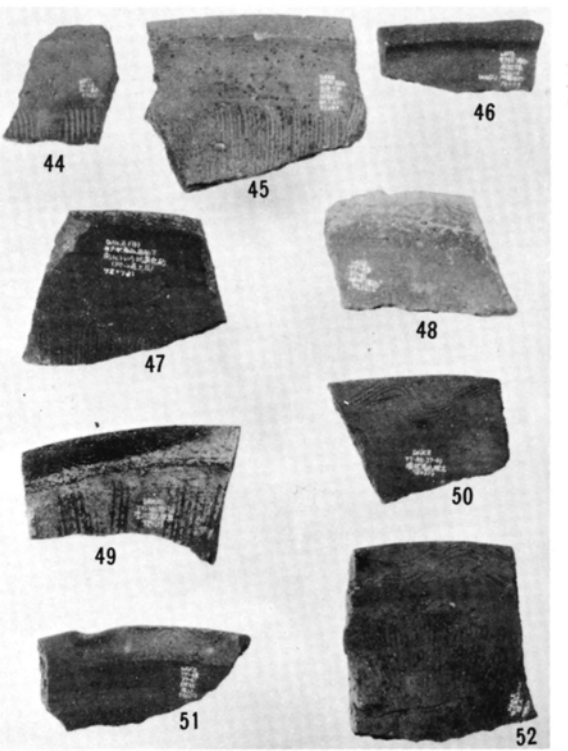


図版46　B地区SX043出土遺物

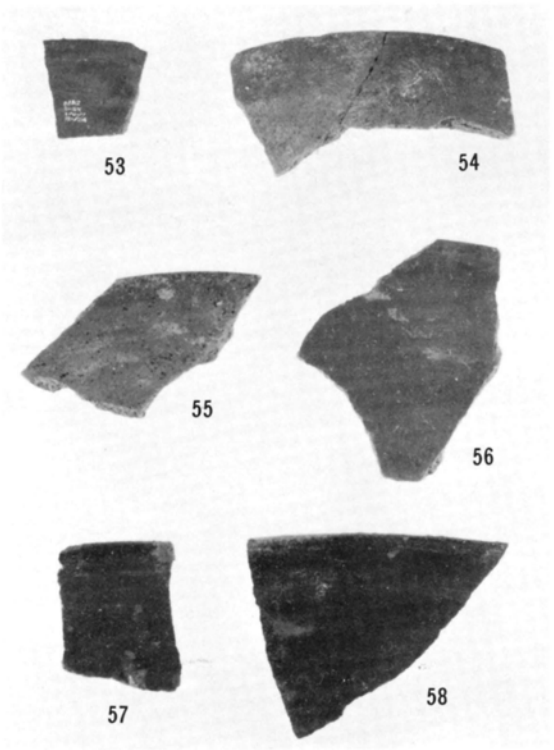


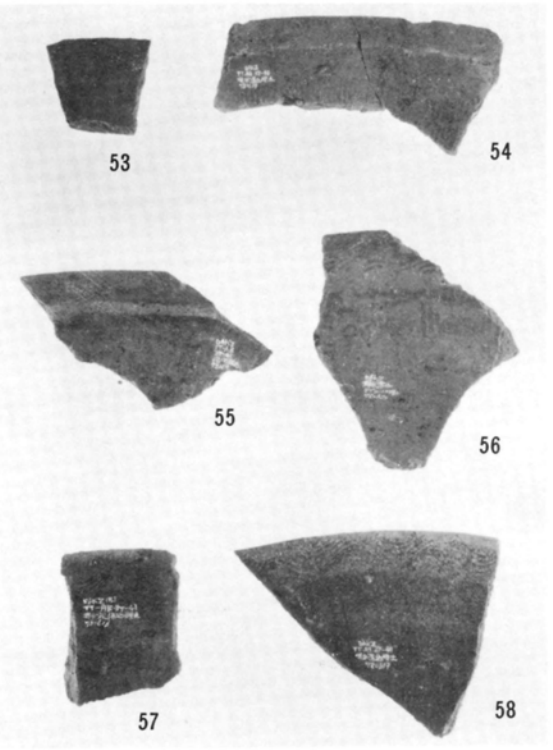


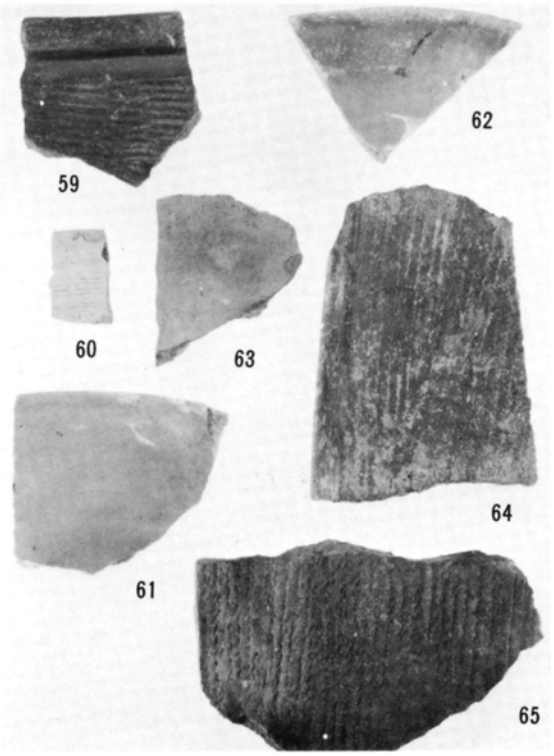


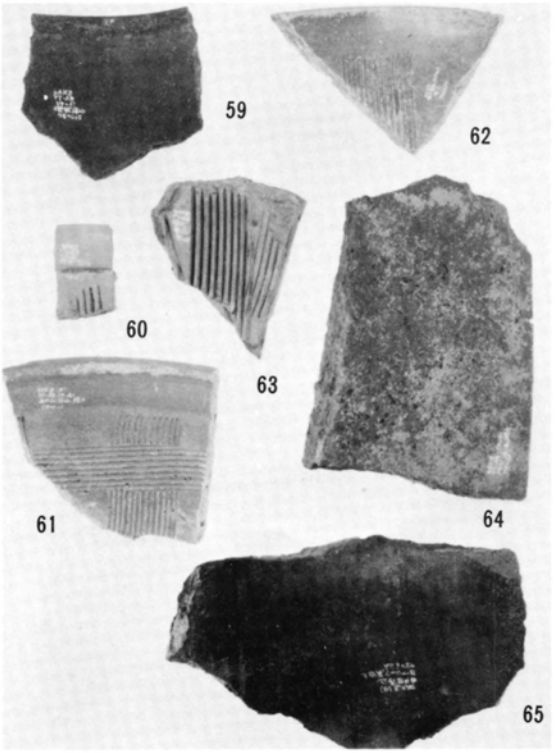


図版47　B地区SX043出土遺物

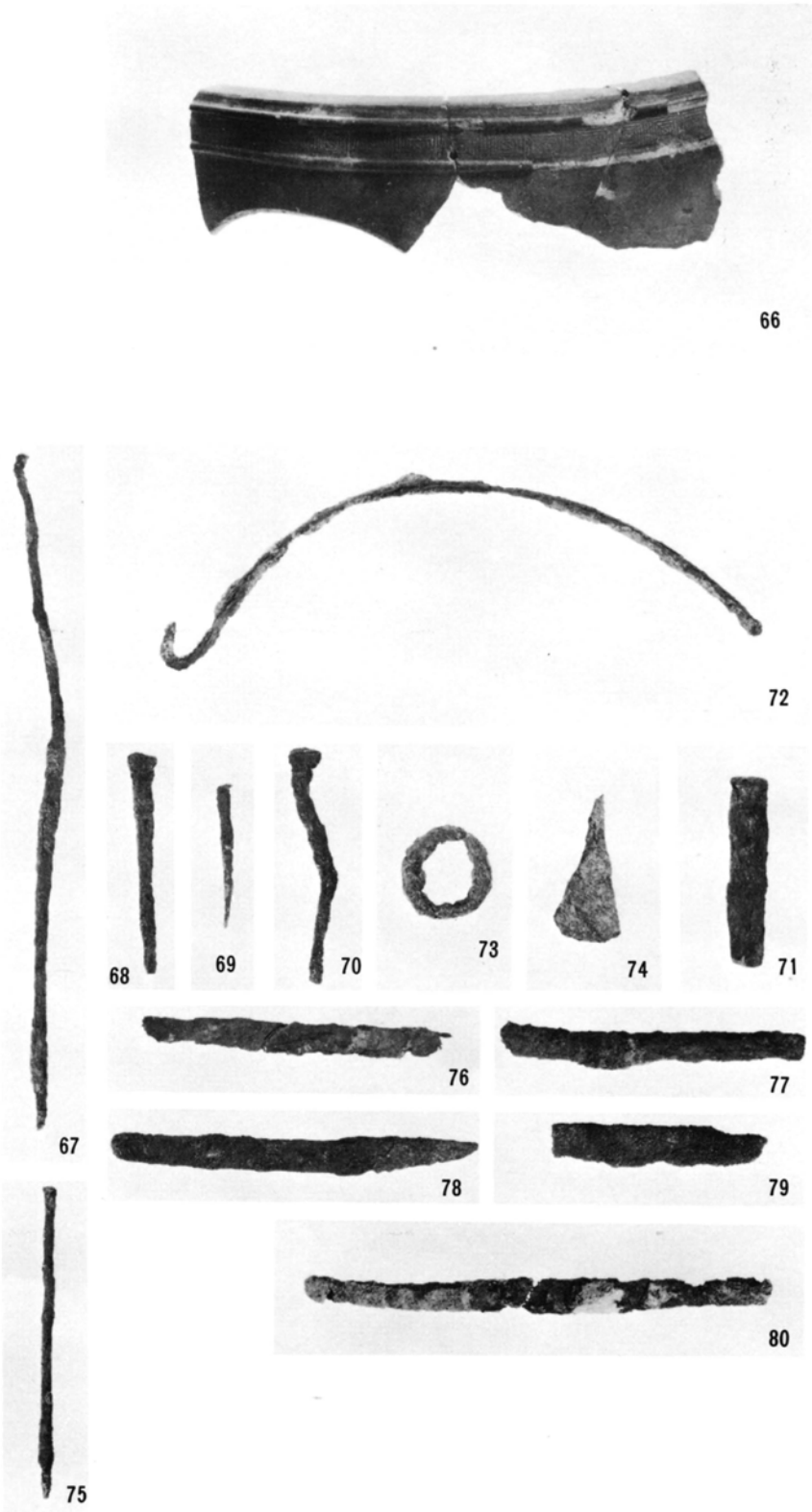




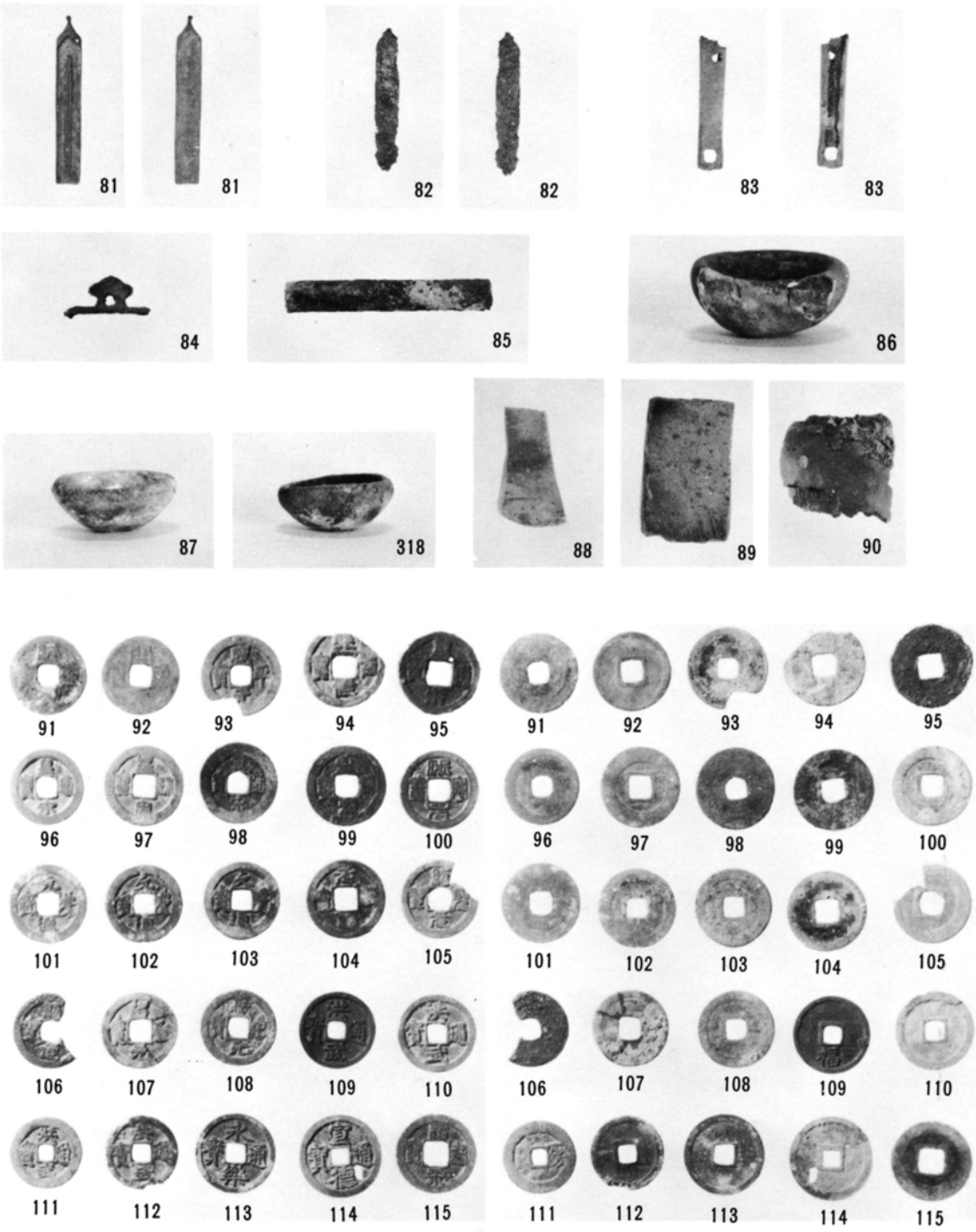




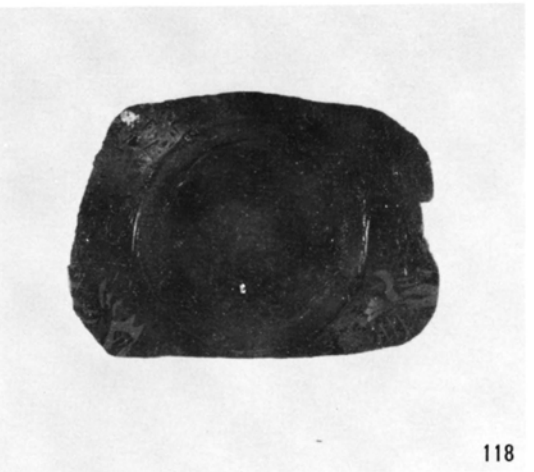
図版48　B地区SX043出土遺物

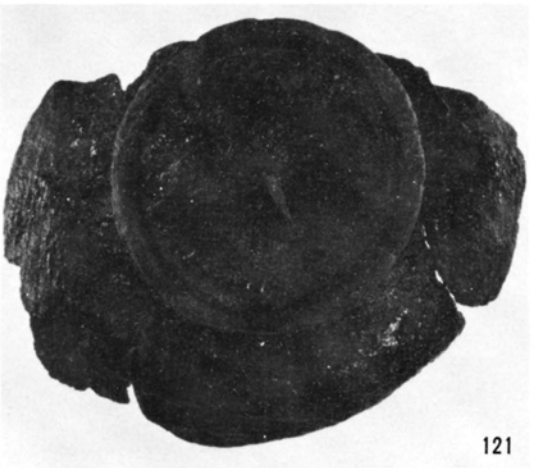


図版49　B地区SX043出土遺物

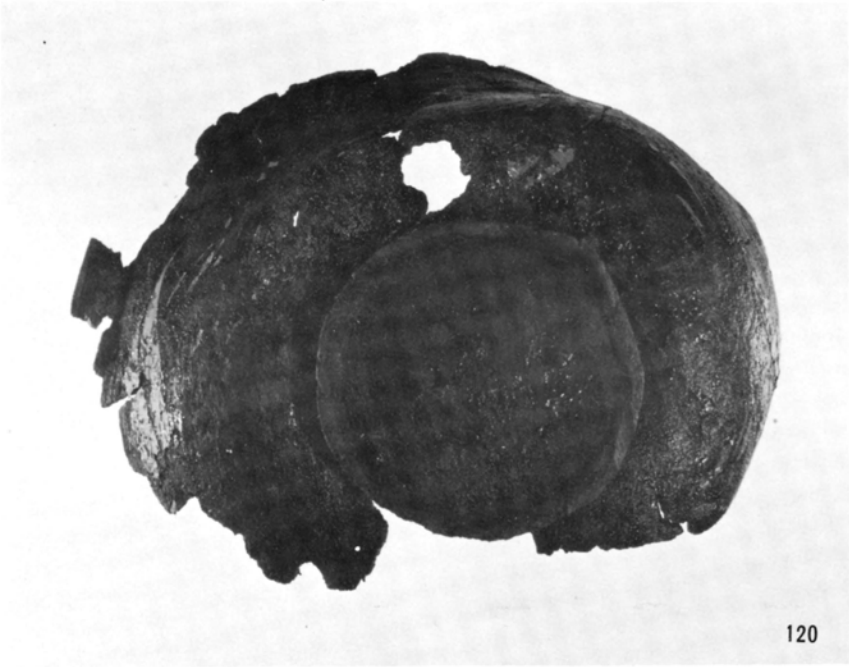


図版50　B地区SX043出土遺物

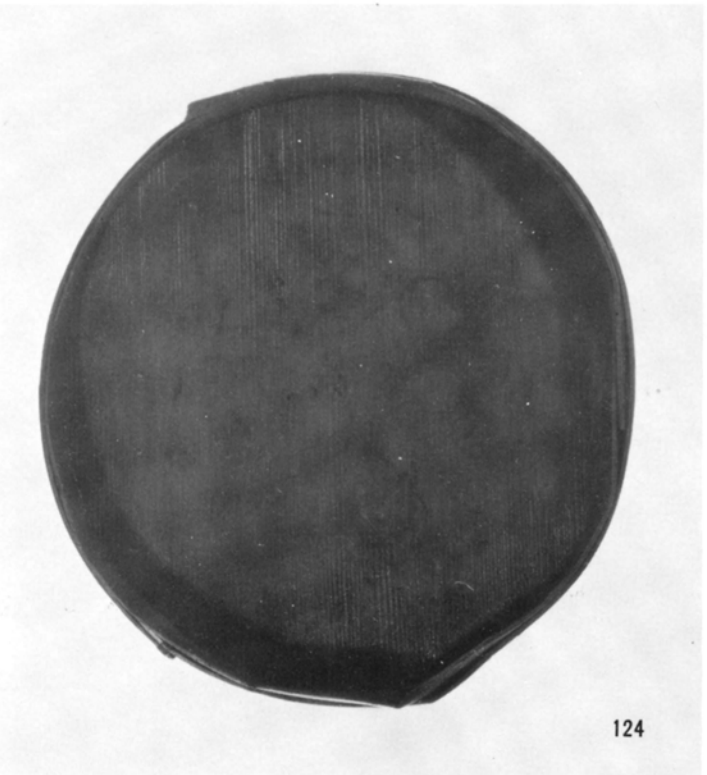


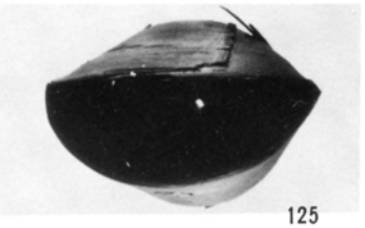


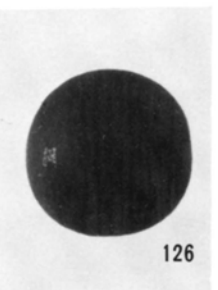
図版51　B地区SX043出土遺物

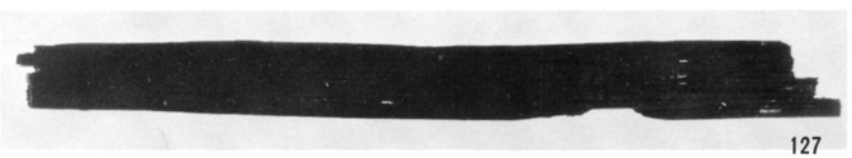


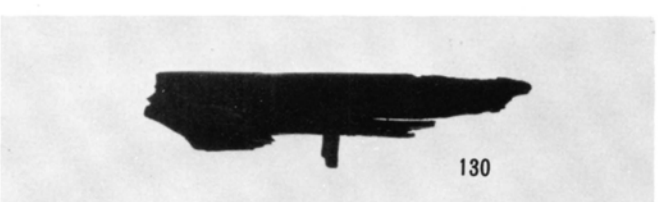
図版52　B地区SX043出土遺物



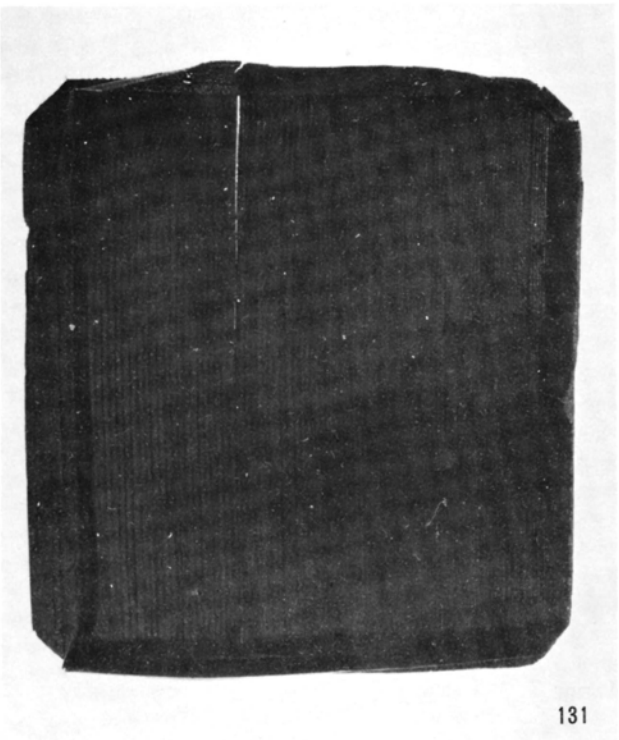


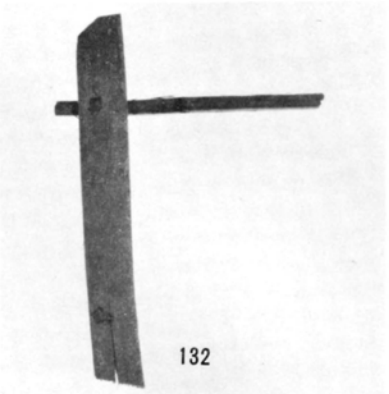


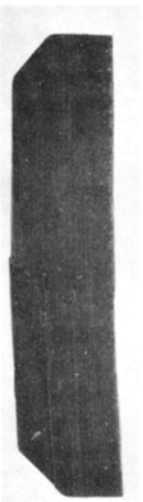


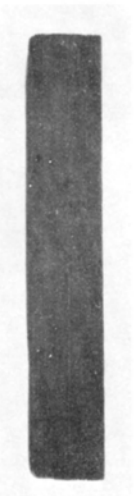


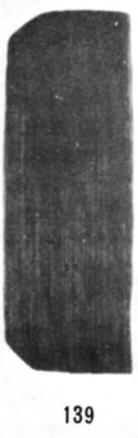
図版53　B地区SX043出土遺物

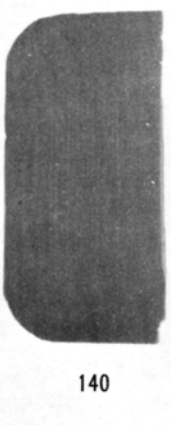




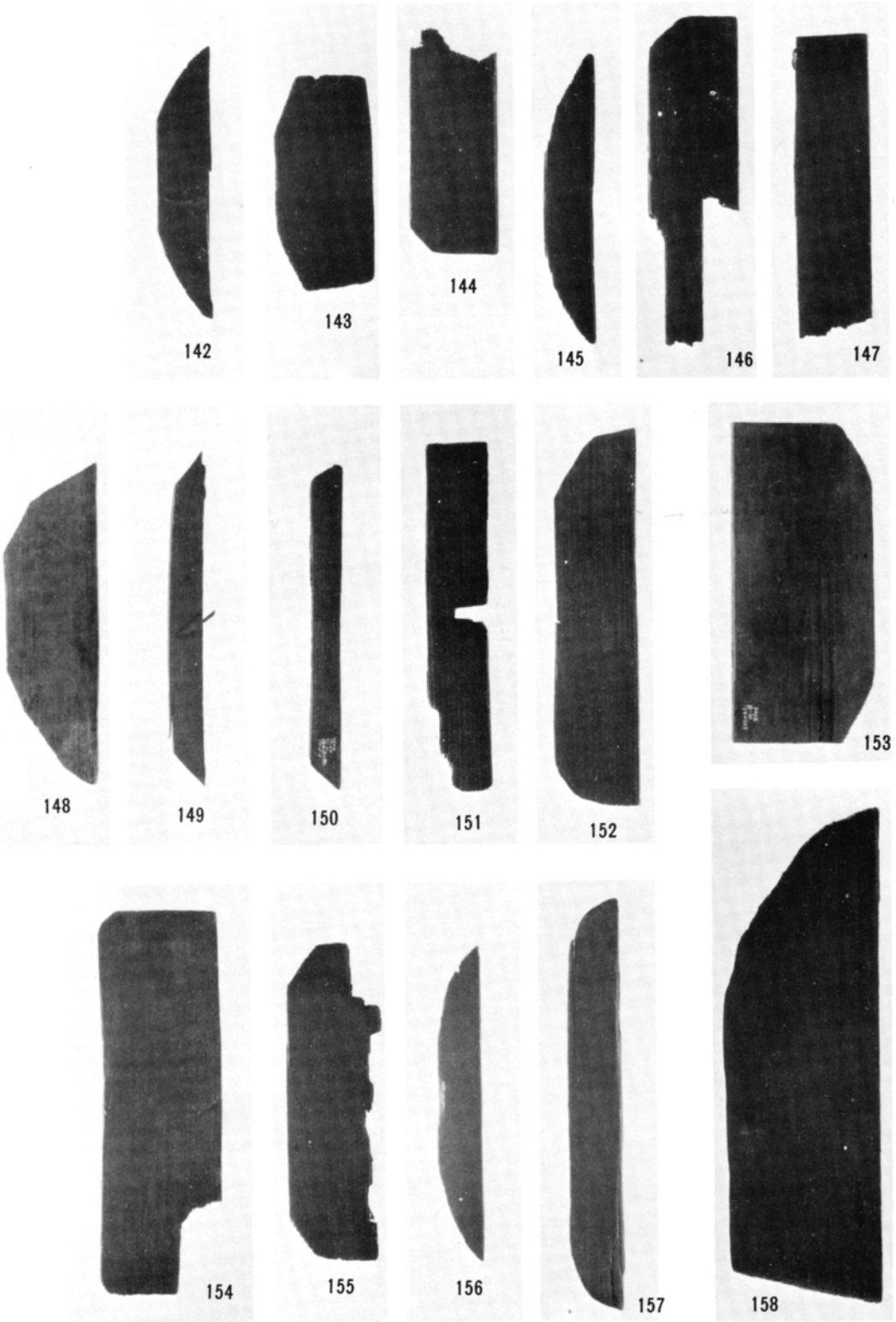




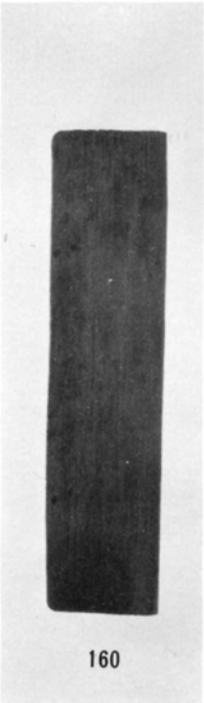


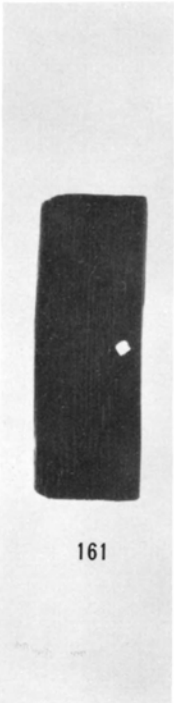


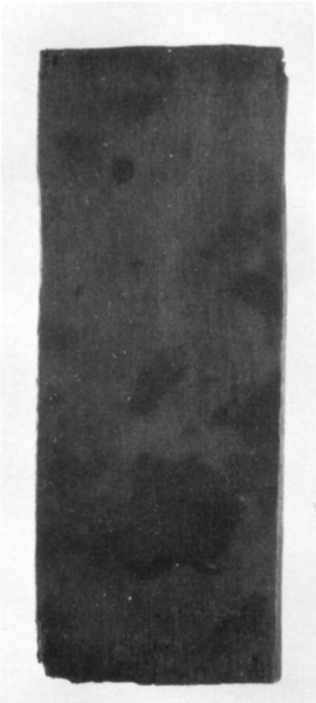
図版54　B地区SX043出土遺物

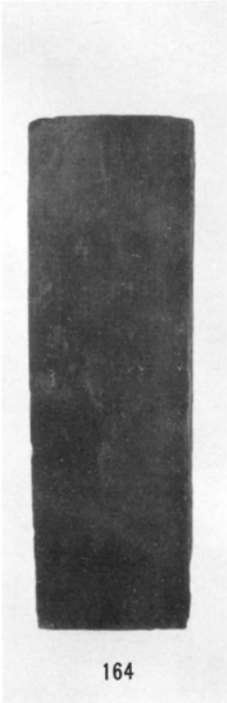


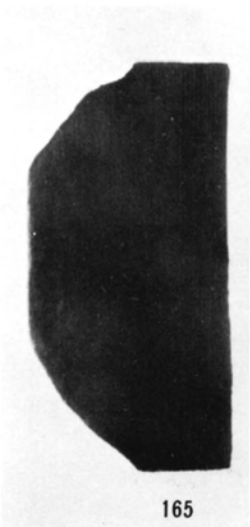
図版55　B地区SX043出土遺物

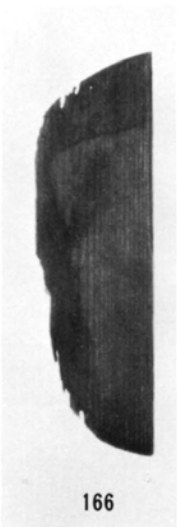




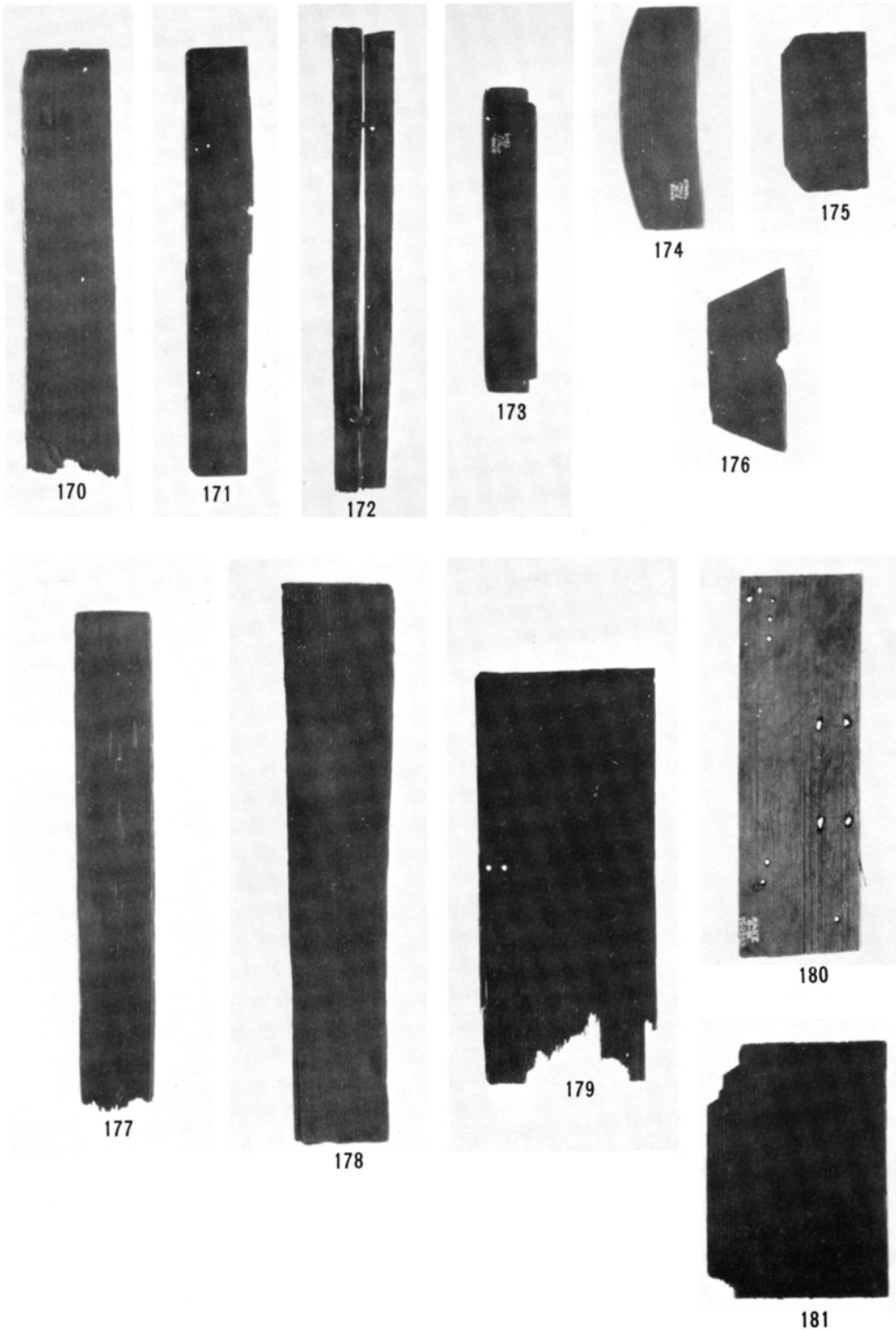




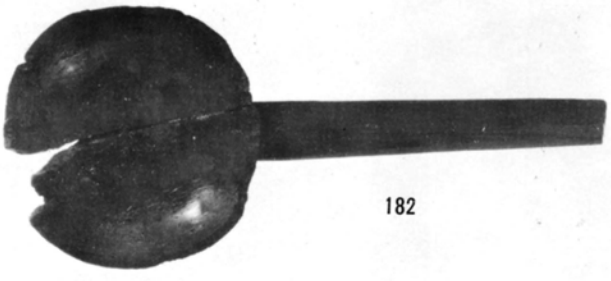


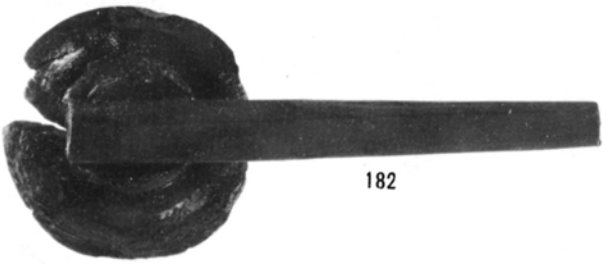


図版56　Ｂ地区ＳＸ043出土遺物

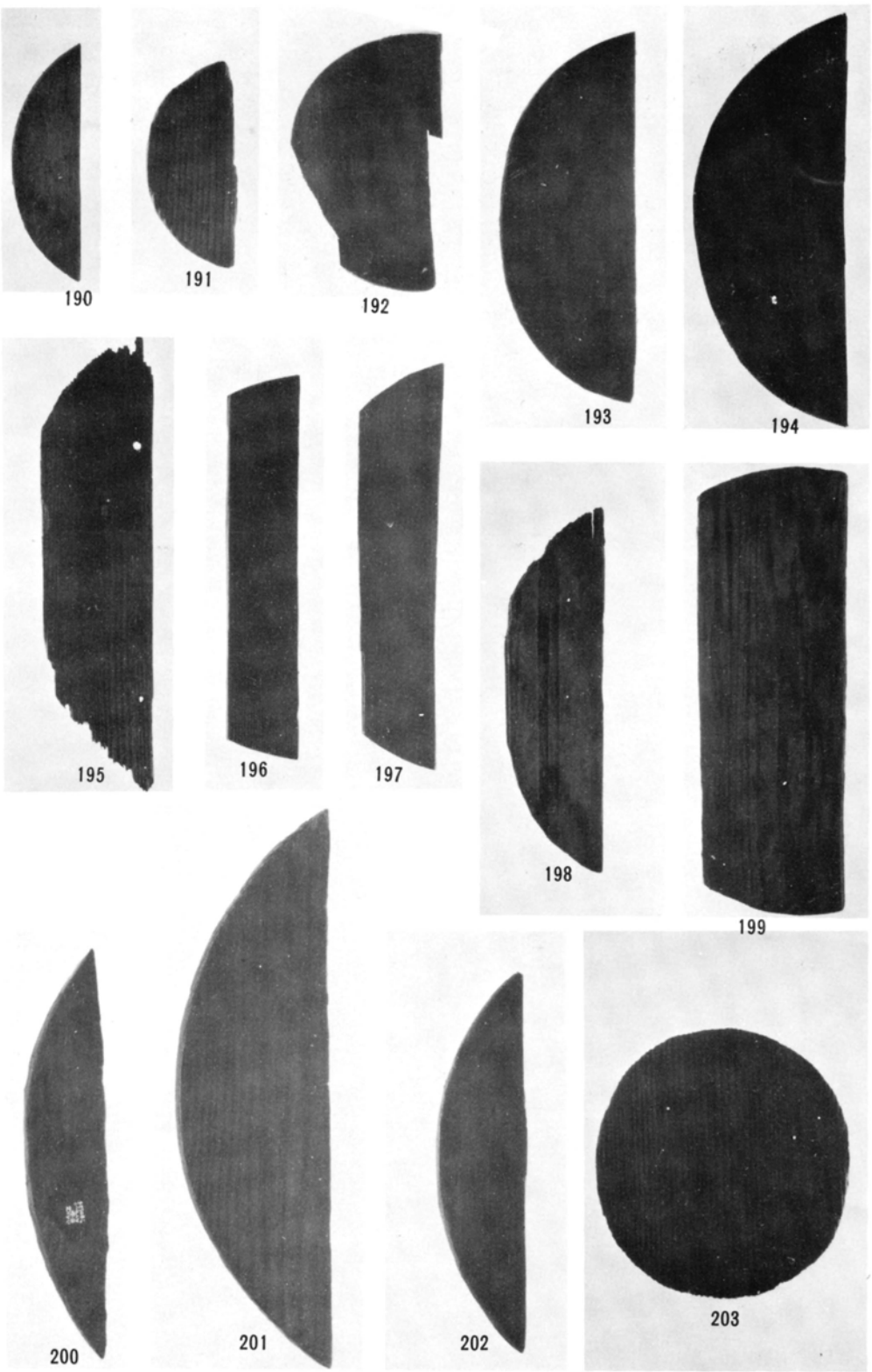


図版57　B地区SX043出土遺物

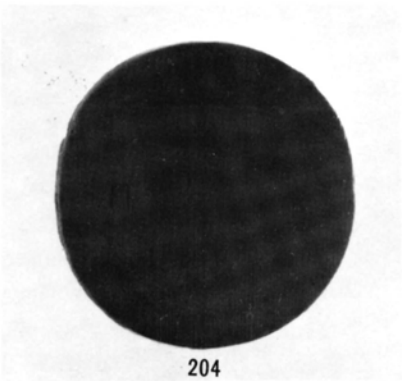


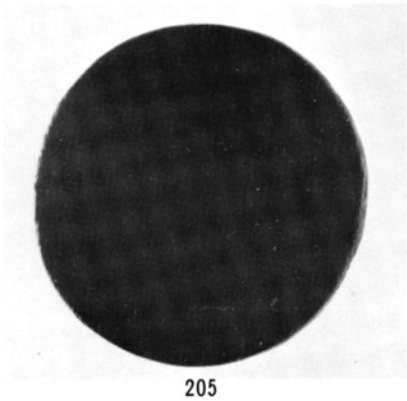


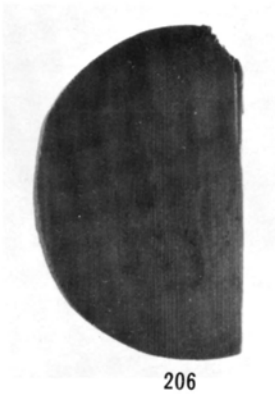
図版58　B地区SX043出土遺物

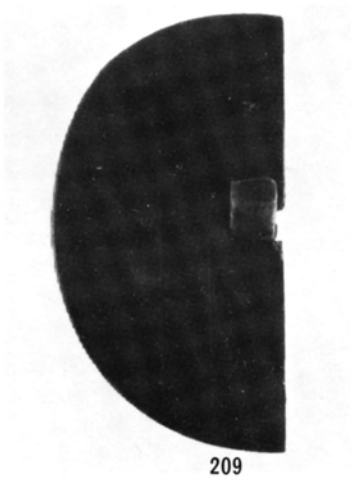


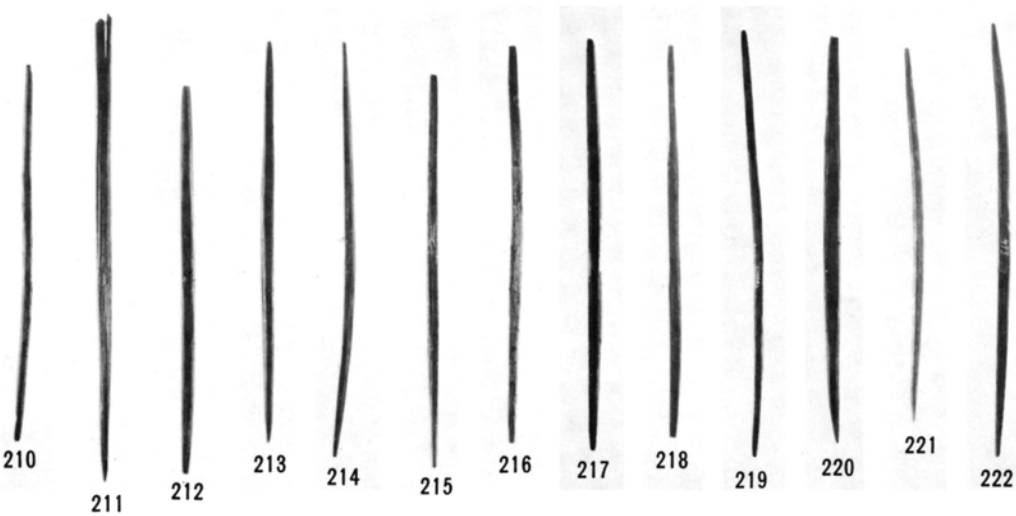
図版59　B地区SX043出土遺物











図版60　B地区SX043出土遺物

図版61　B地区SX043出土遺物

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

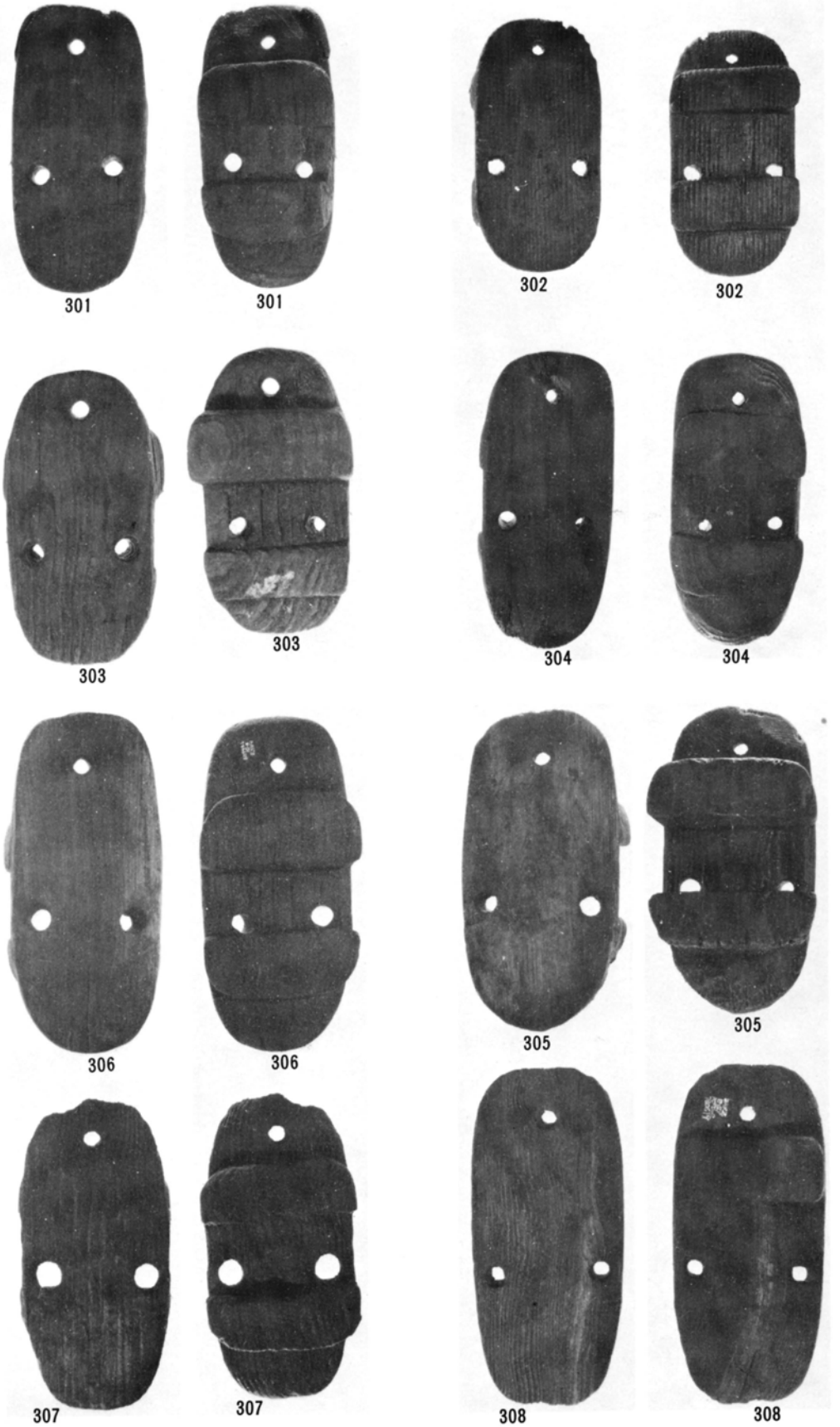
269

270

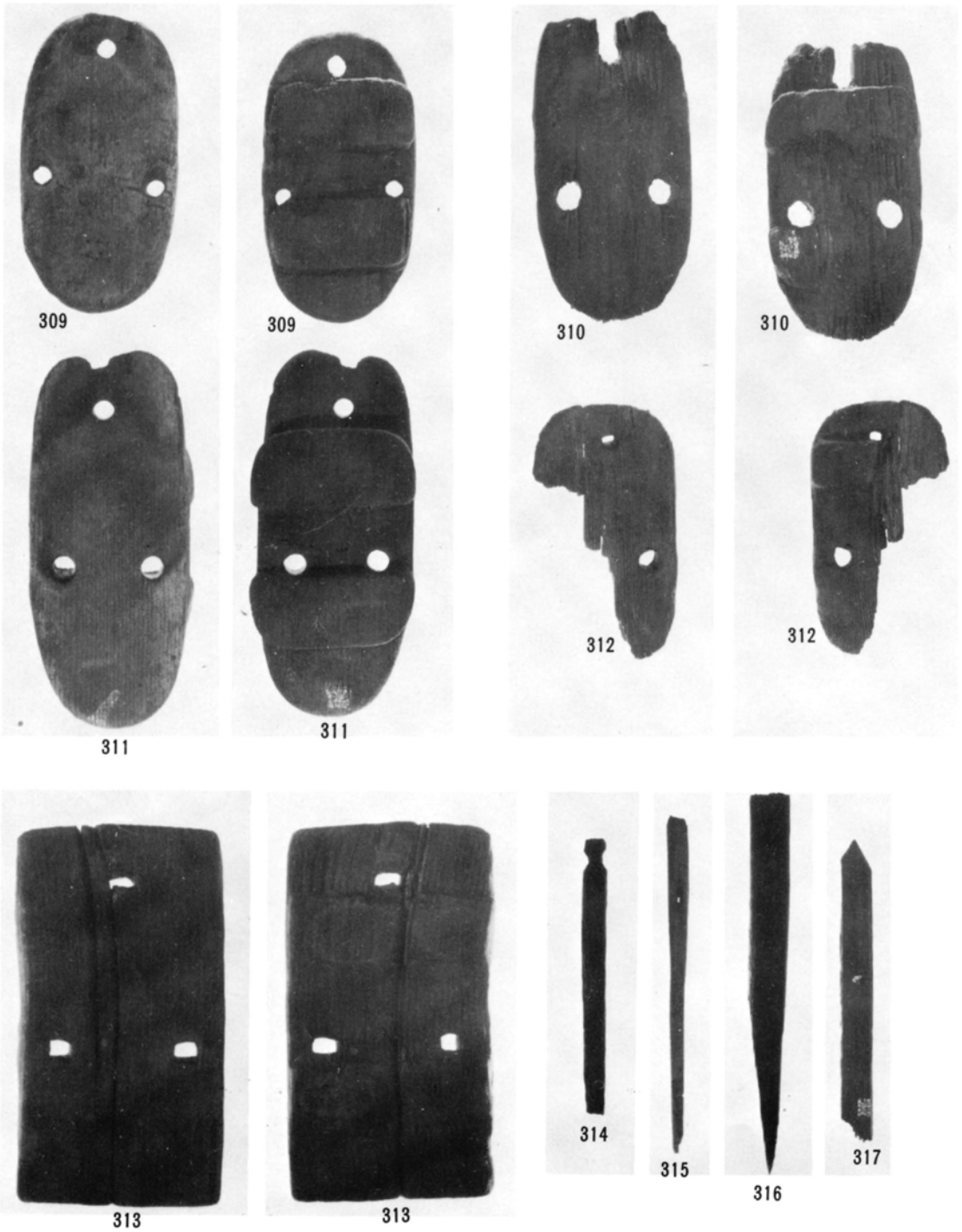
271

272

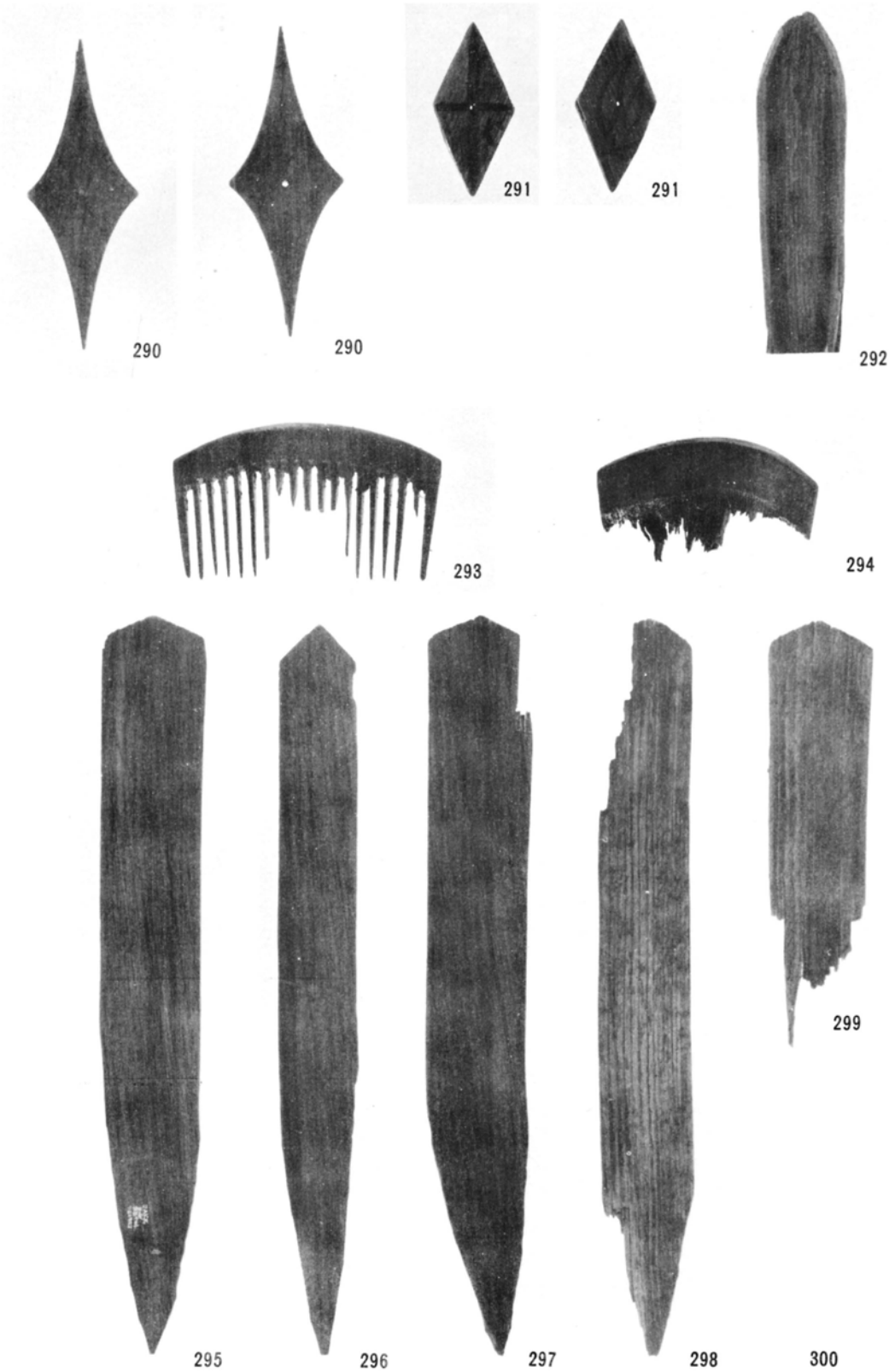
図版62　B地区SX043出土遺物



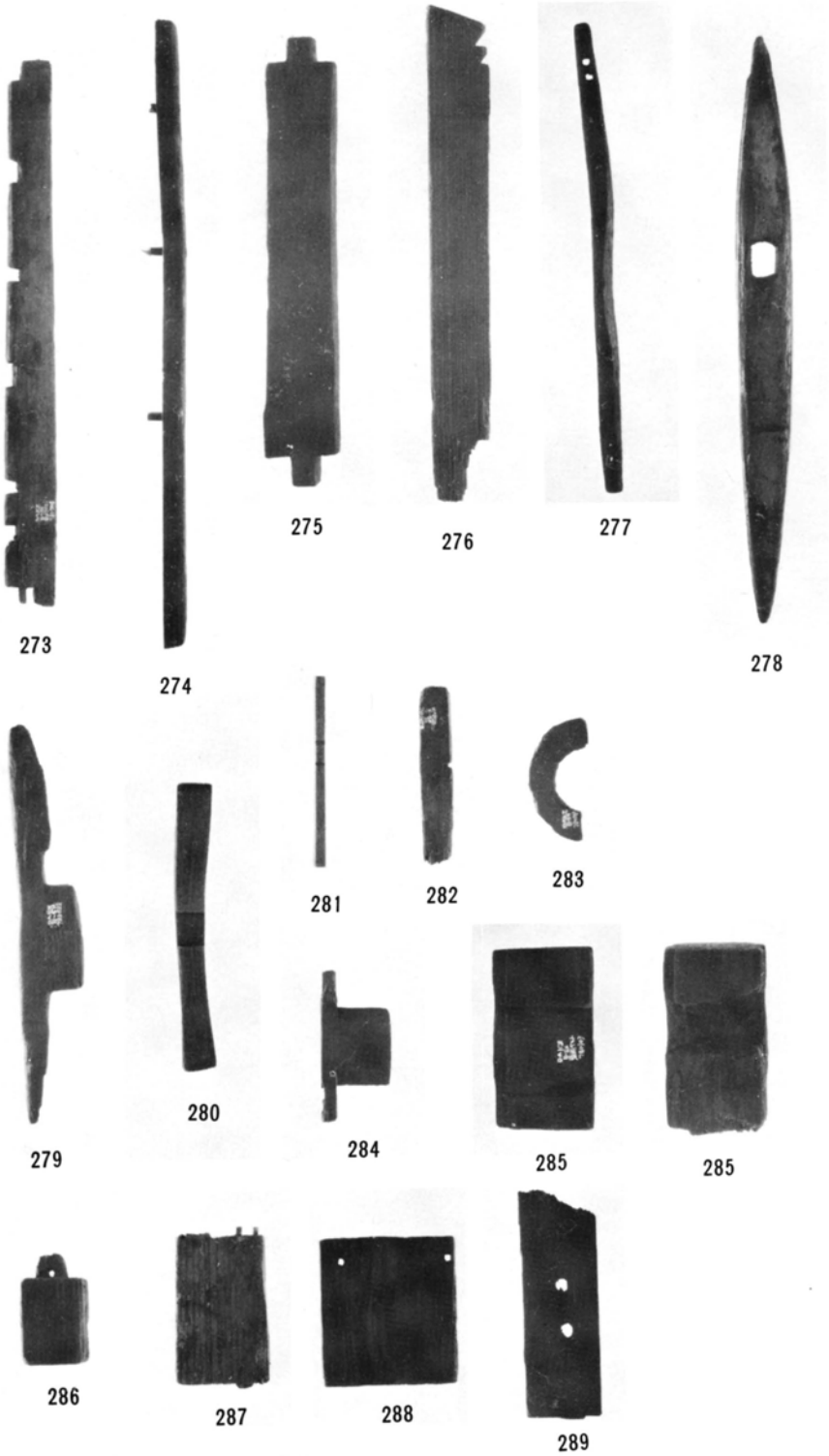
図版63　B地区SX043出土遺物



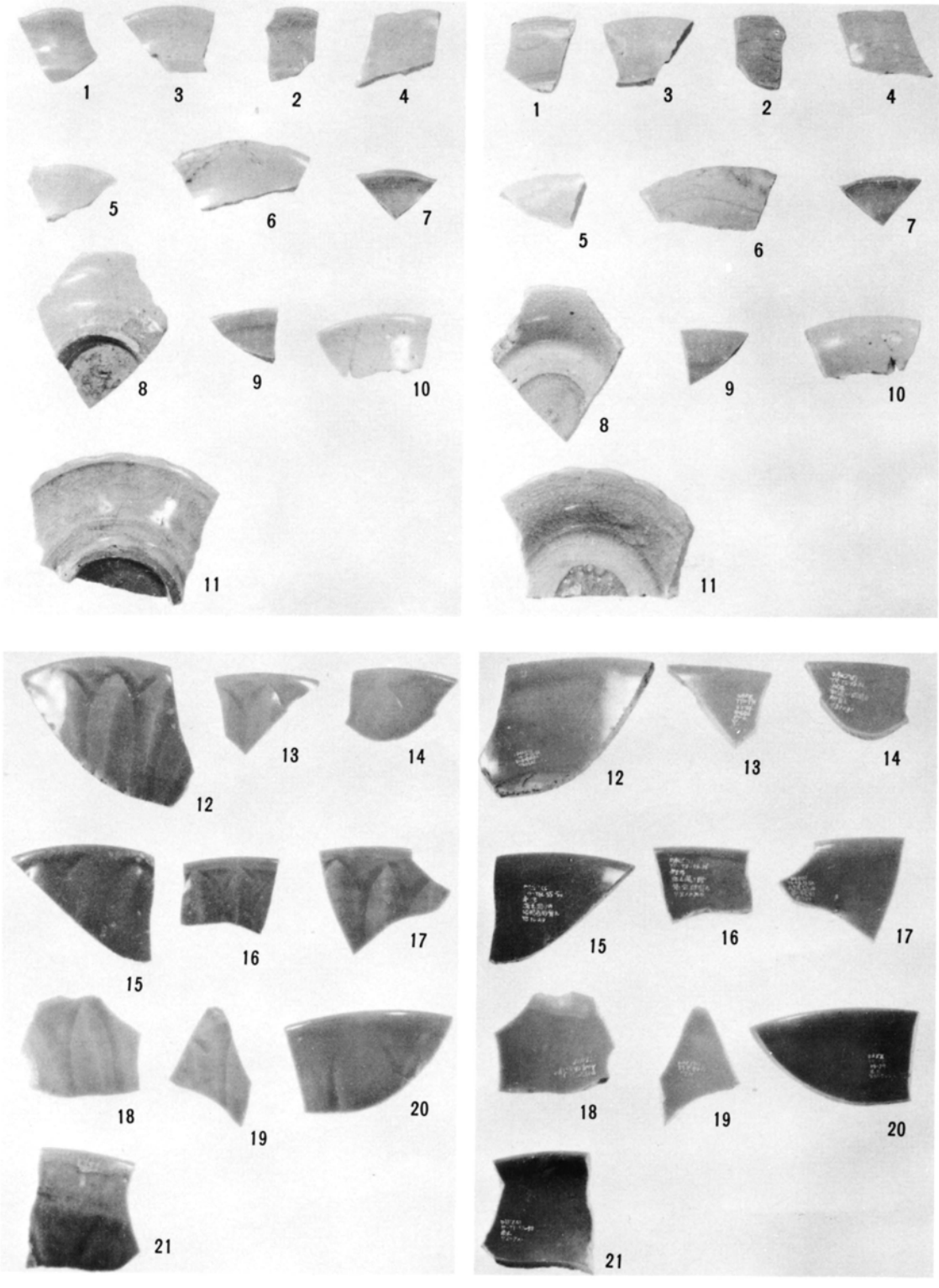
図版64　B地区SX043出土遺物



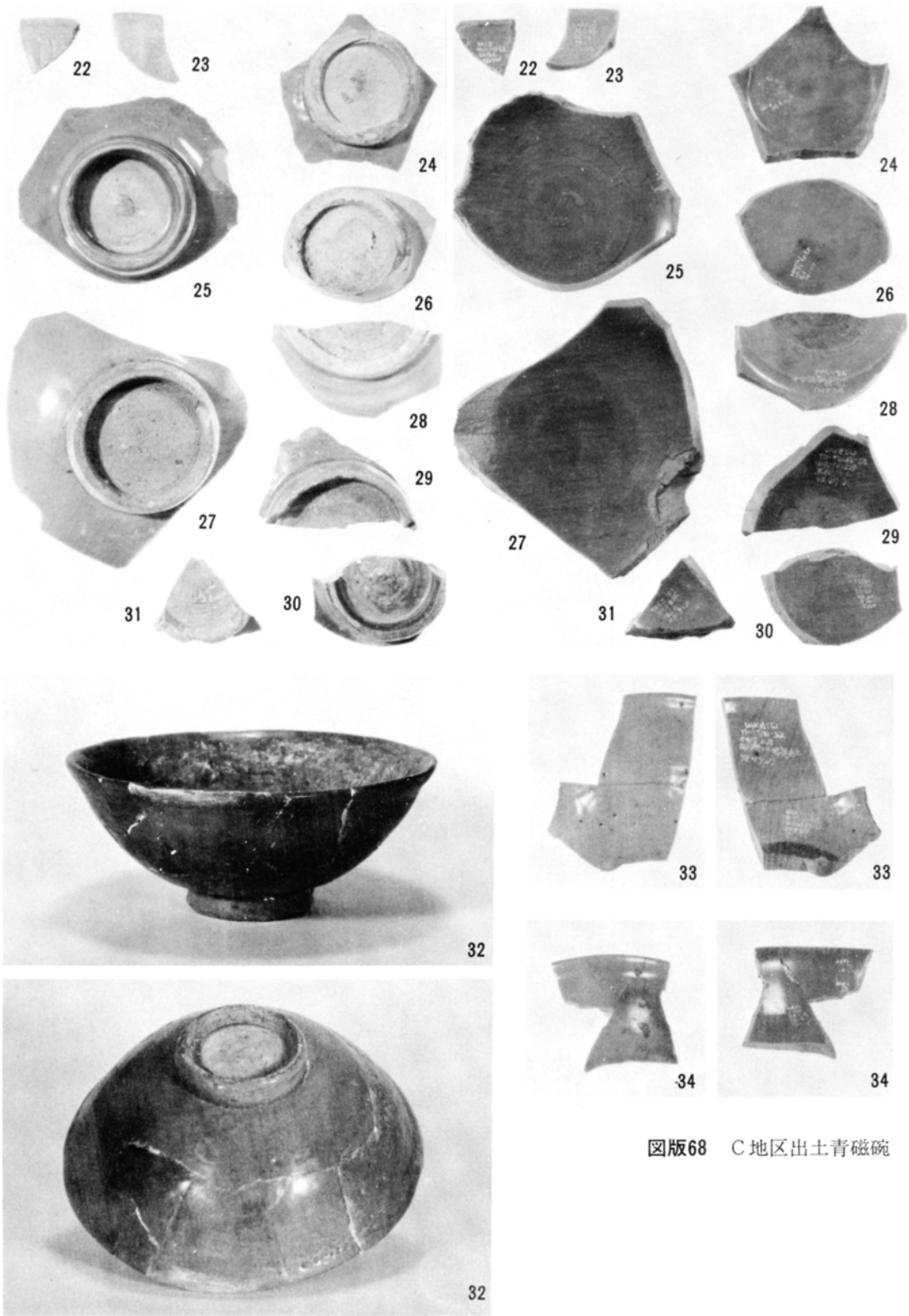
図版65　B地区SX043出土遺物



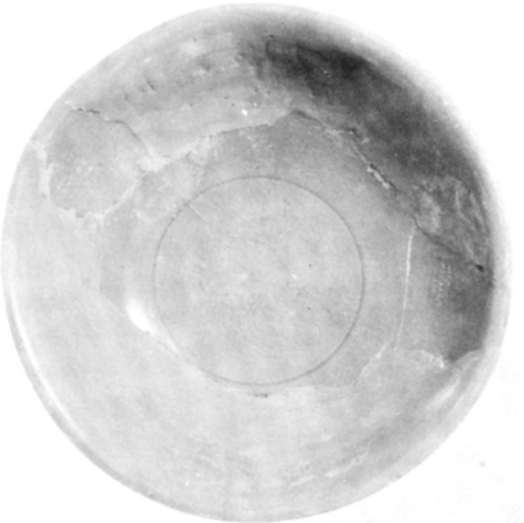
図版66　B地区SX043出土遺物

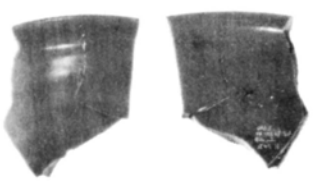


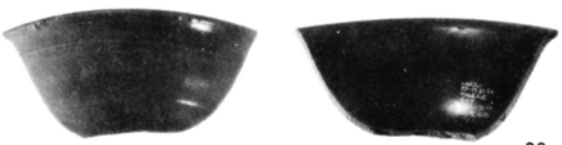
図版67　C地区出土青磁皿，碗

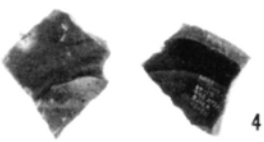


図版68　C地区出土青磁碗

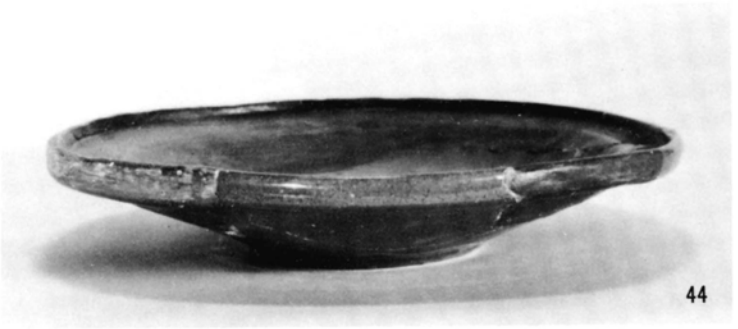


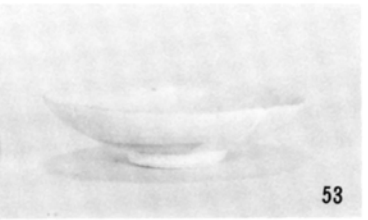


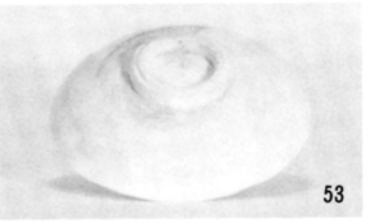


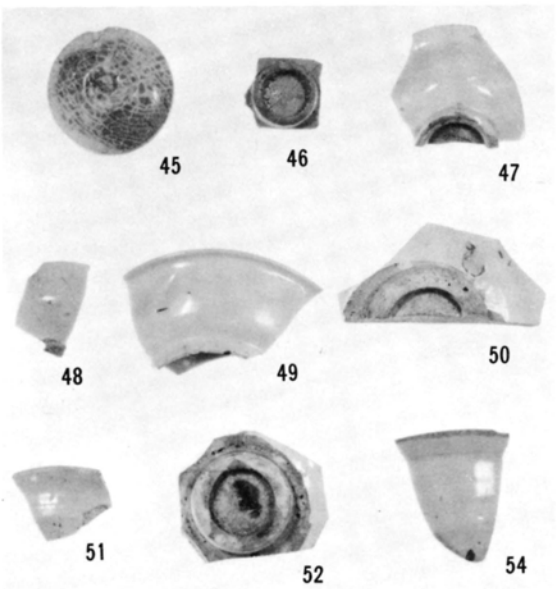


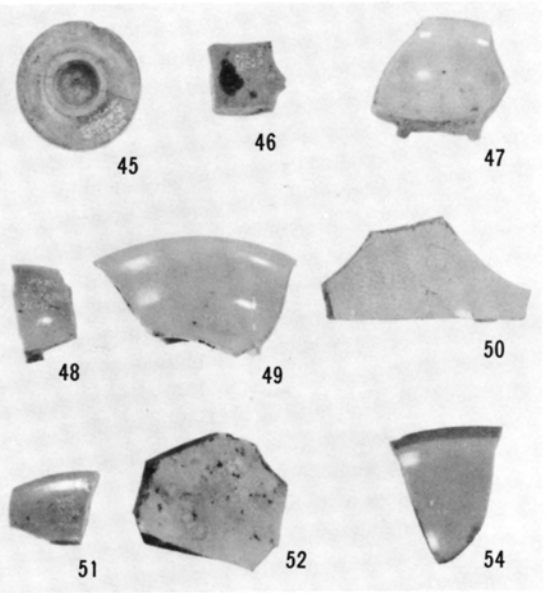
図版69　C地区出土青磁碗



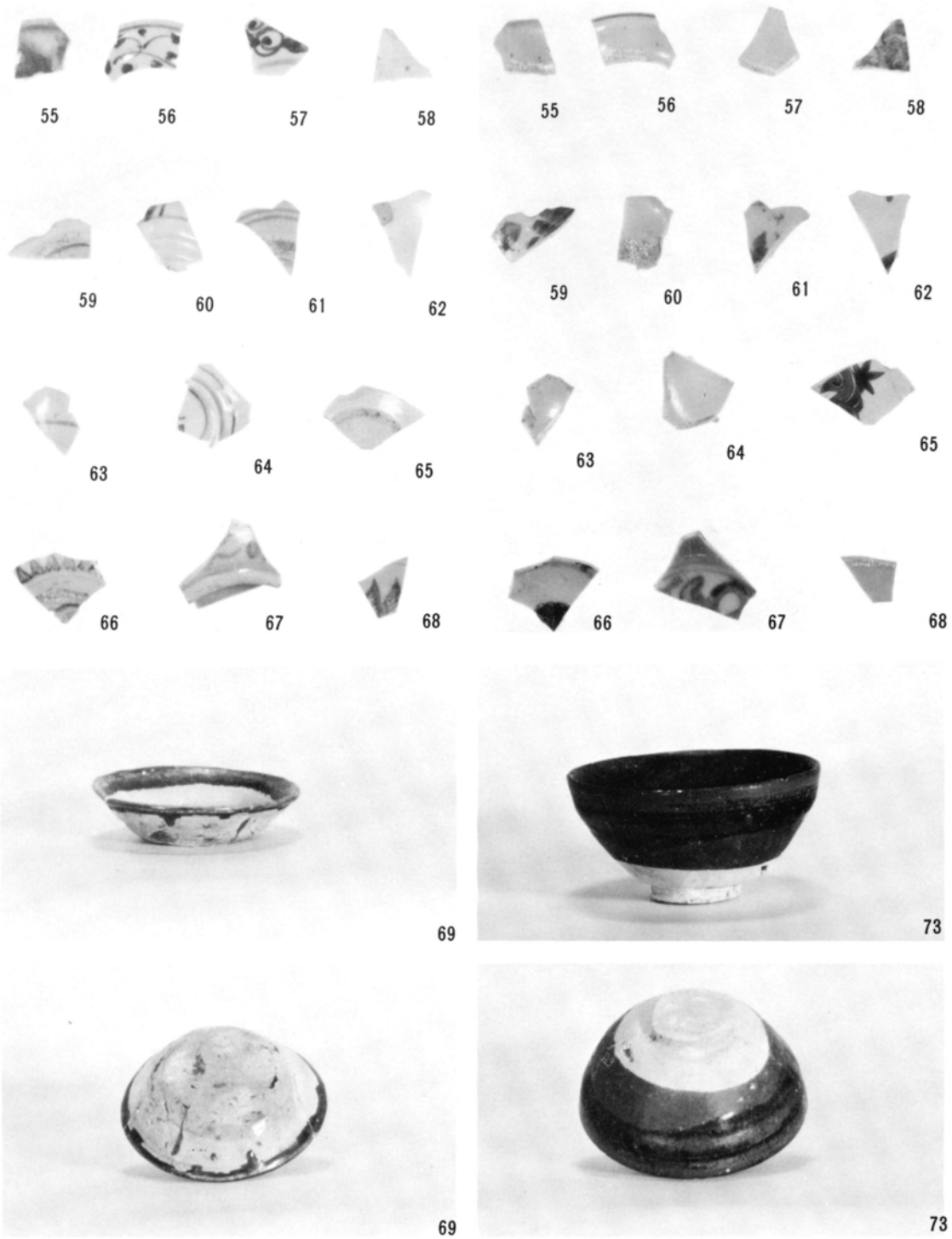




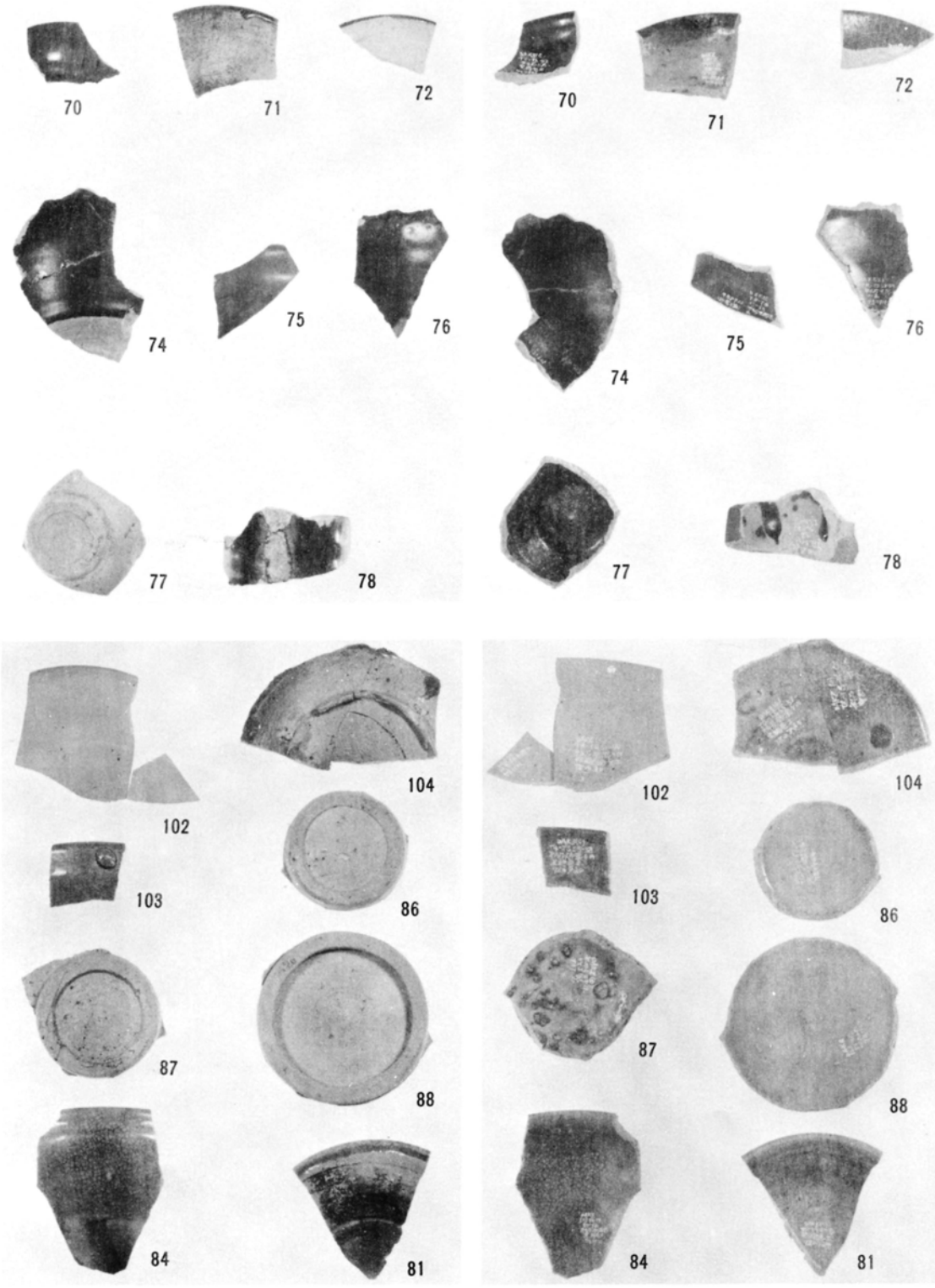




図版70　C地区出土青磁盤，白磁皿，碗

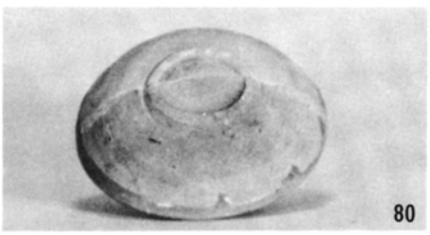


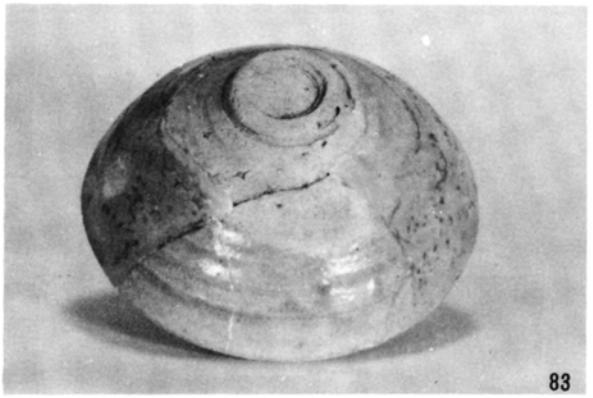
図版71　C地区出土染付，瀬戸・美濃，皿，天目茶埦（鉄細）

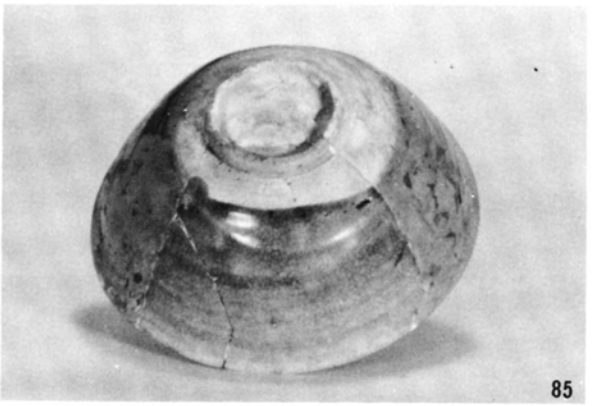


図版72　C地区出土瀬戸・美濃，碗・皿，天目茶碗，その他の陶器，山茶碗

上　鉄釉

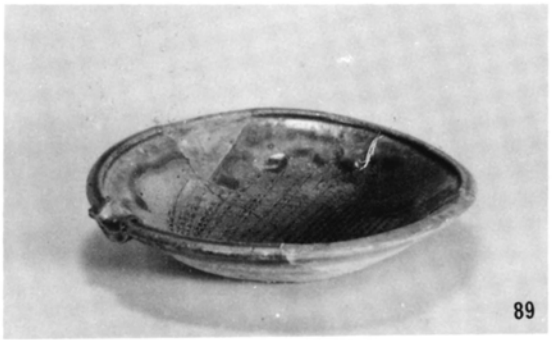


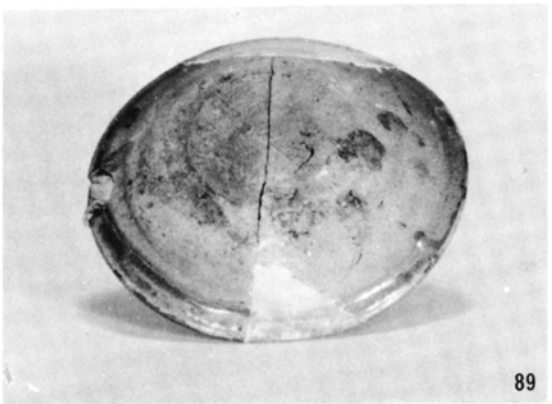


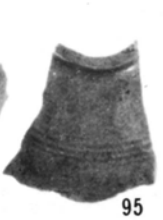


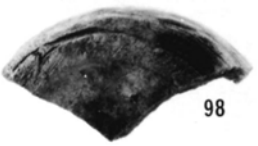
C地区出土瀬戸・美濃，皿椀（灰釉）

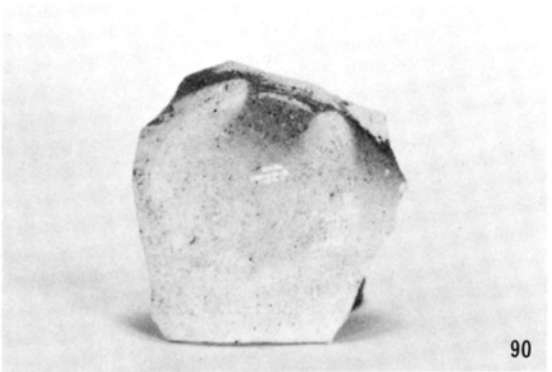
図版73

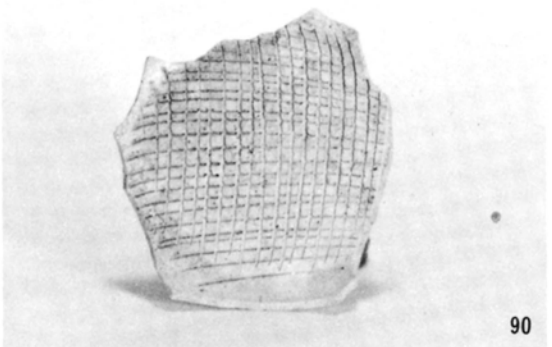






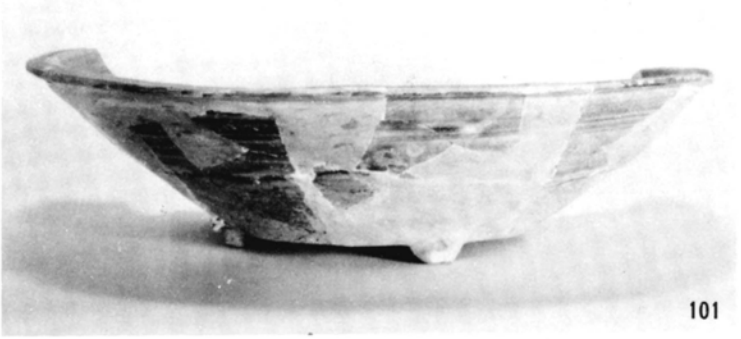




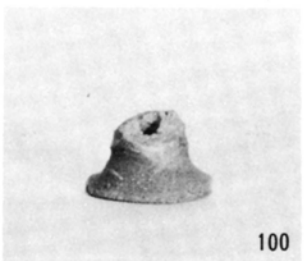


図版74　C地区出土瀬戸・美濃，卸し皿，瓶子，四耳壺，鉢（灰釉）

99

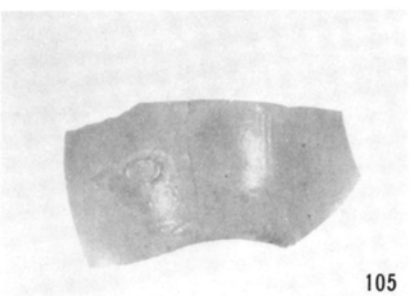


101



100

101

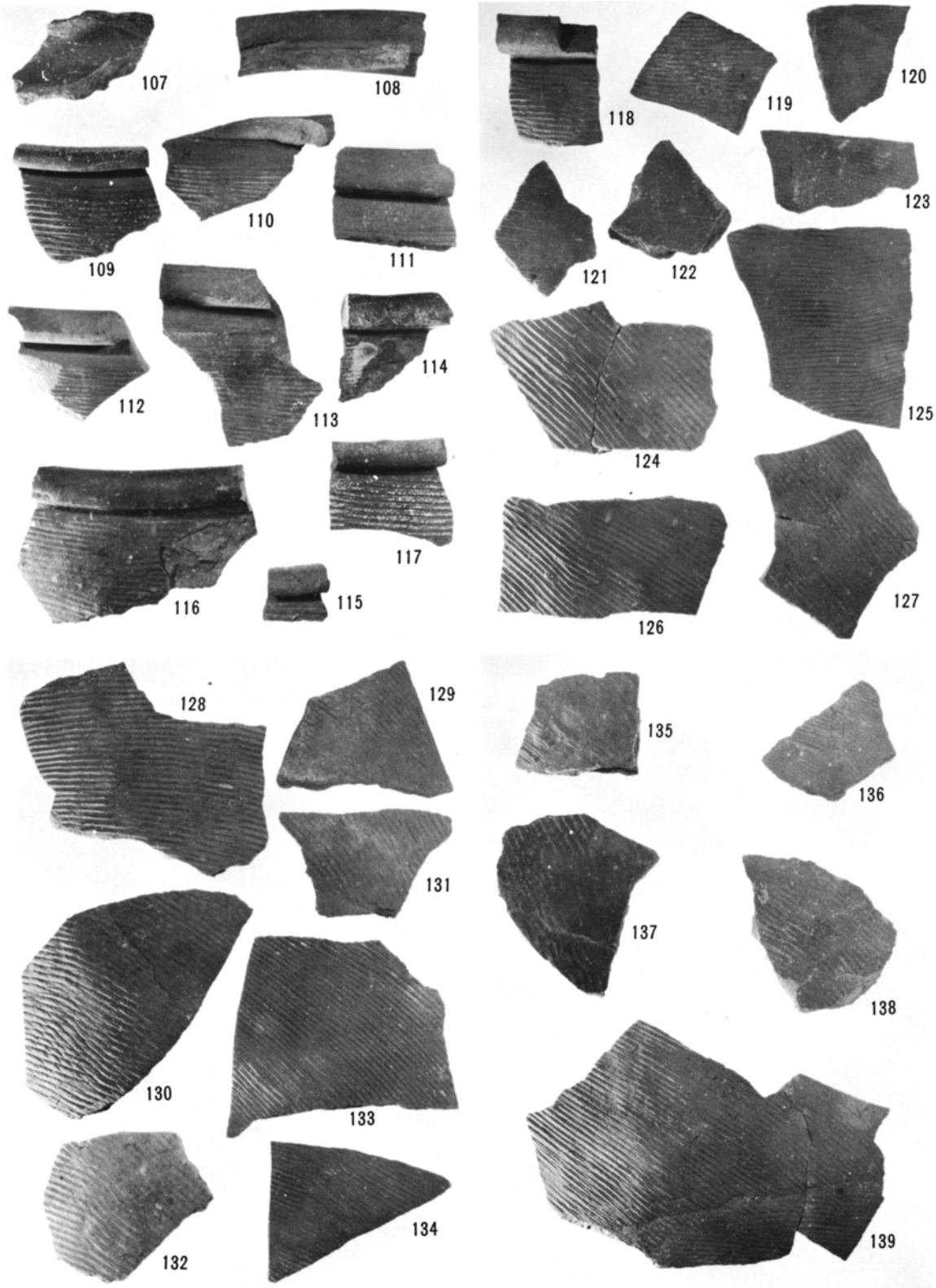


105

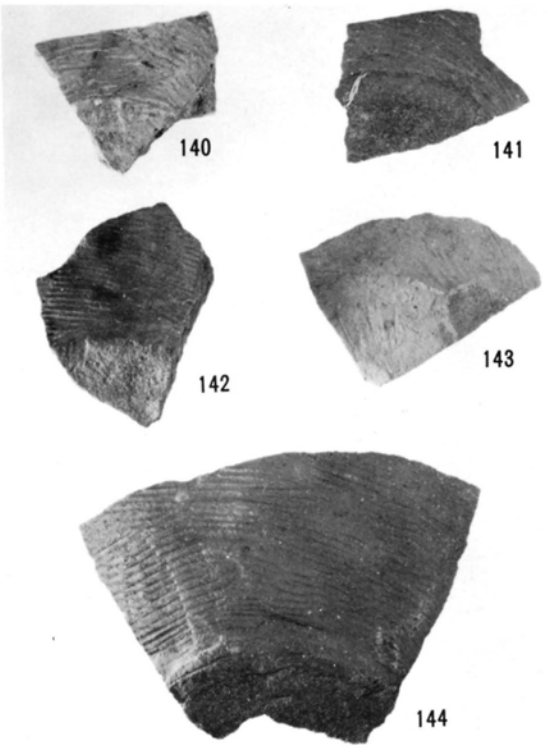
106

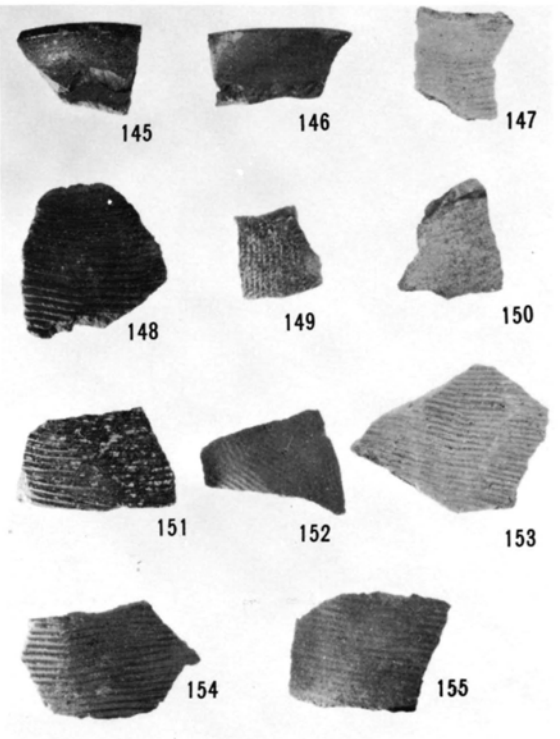
C地区出土
瀬戸・美濃・小仏花瓶・盤（灰釉）
珠洲系陶器甕
その他の施釉陶器

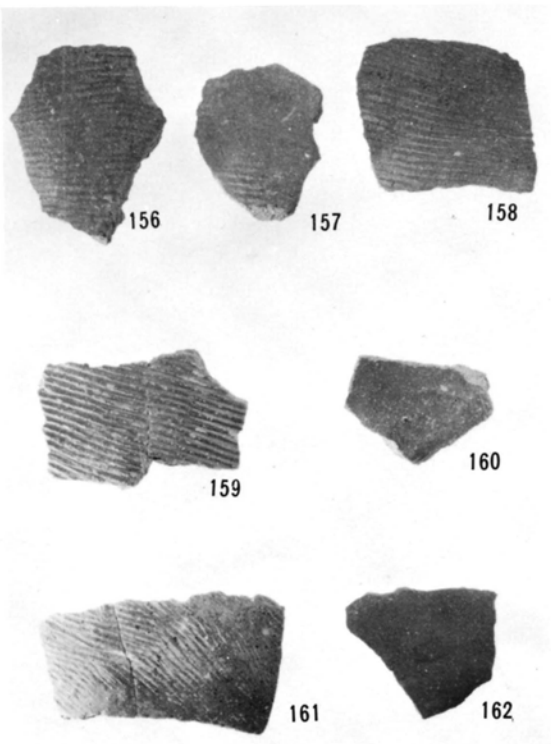
図版75

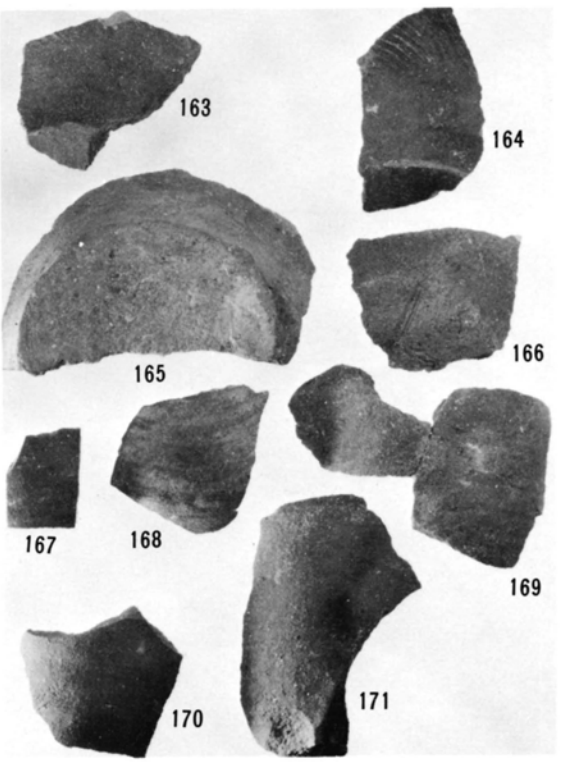


図版76　C地区出土珠洲系陶器甕

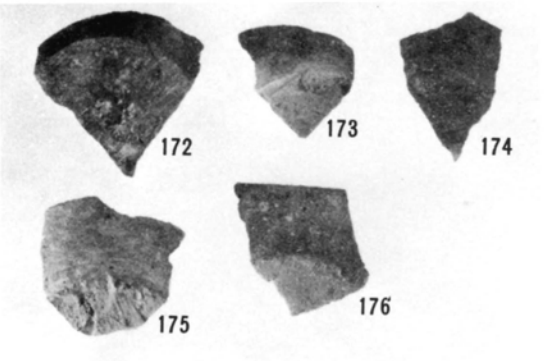








図版77　C地区出土珠洲系陶器甕・壺



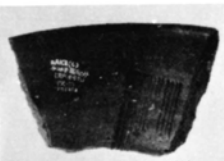
C地区出土
珠洲系陶器壺・片口鉢

図版78

178

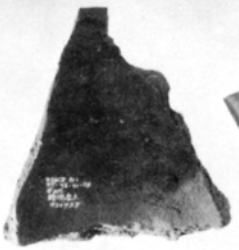
179

180


181

182

183


184

185

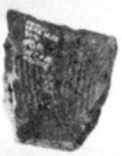
186

190

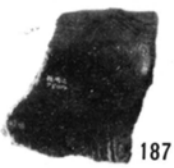
190

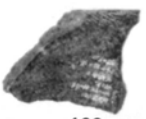
191

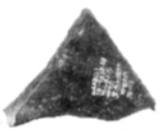
192


193

194


187

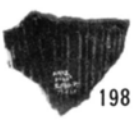

188


189

195

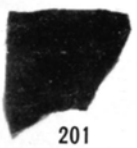
196

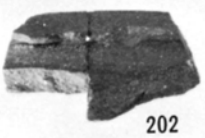
197


198

199

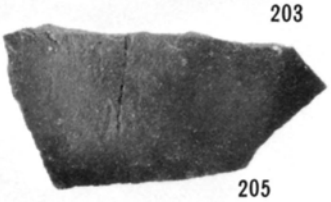
200


201


202

203

204

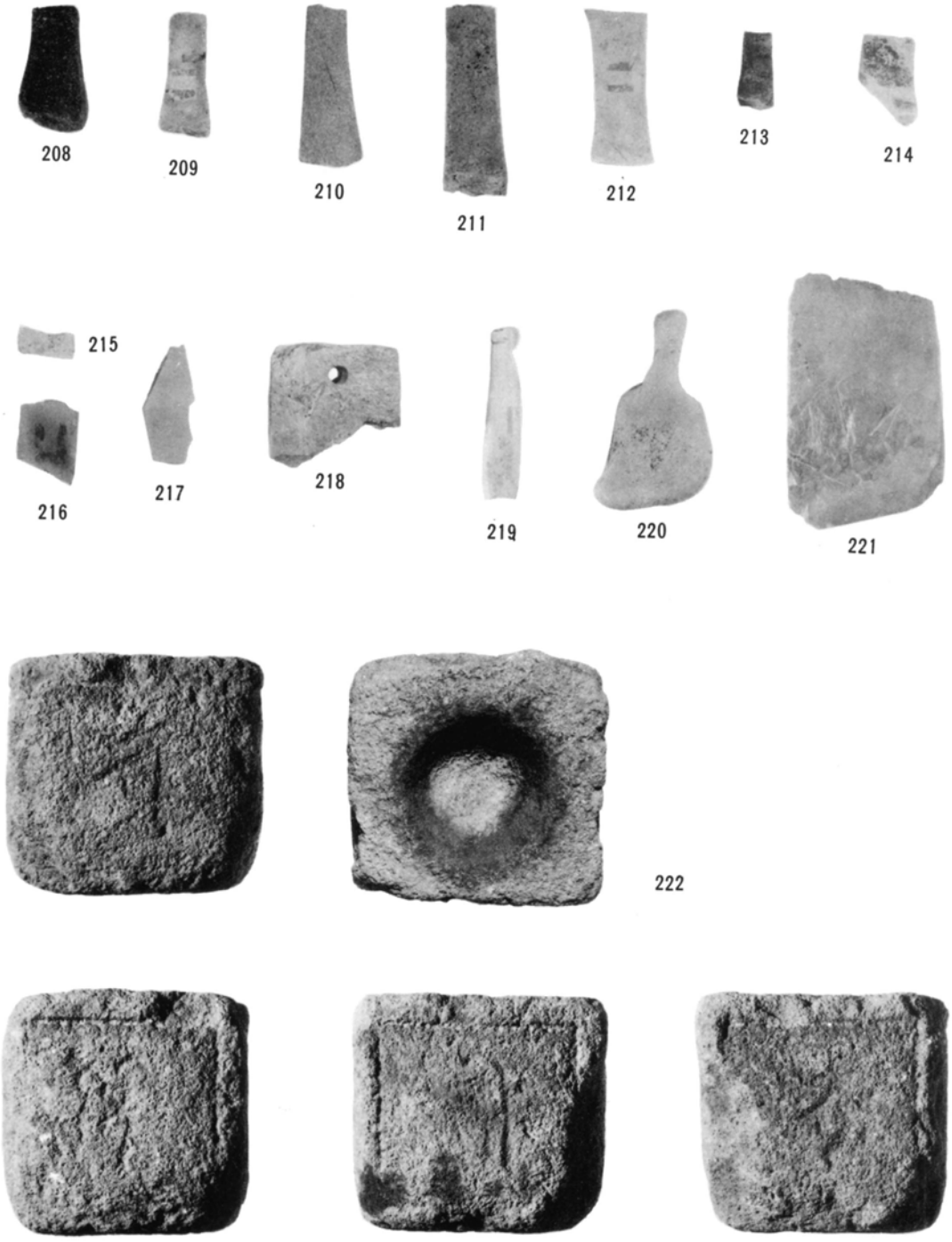

205

206

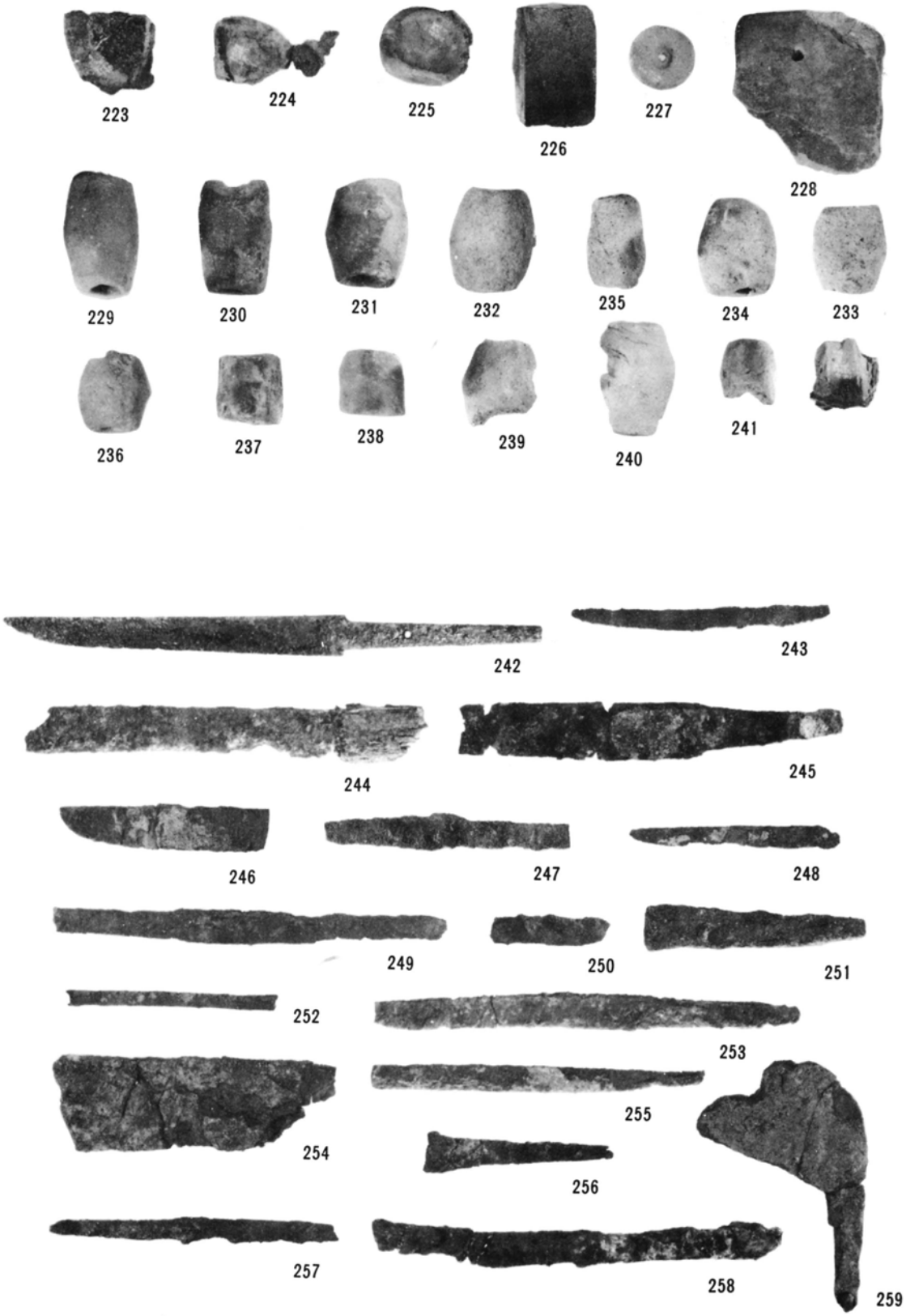
207

C地区出土
珠洲系陶器片口鉢
越前陶
瓦質土器

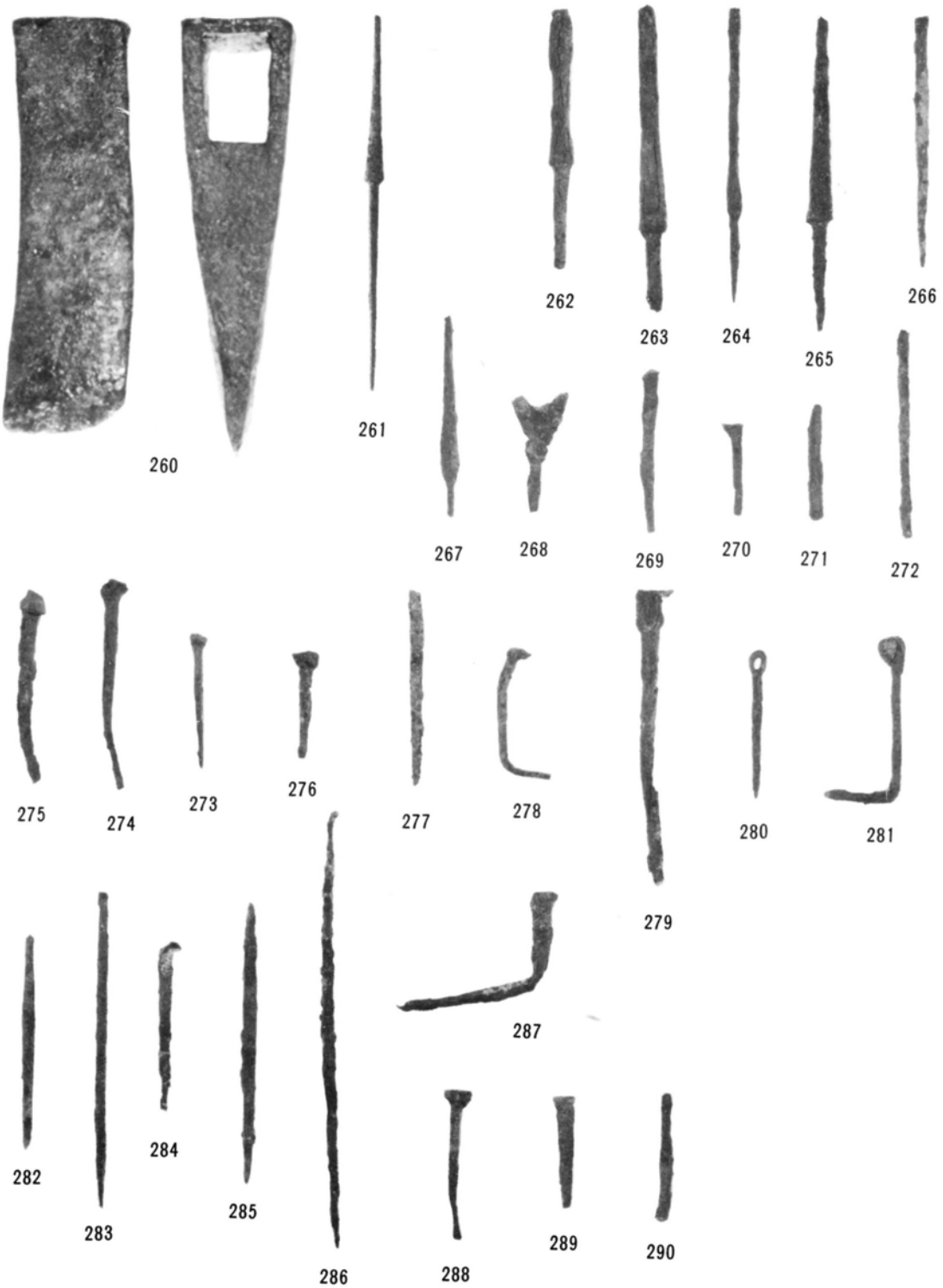
図版79



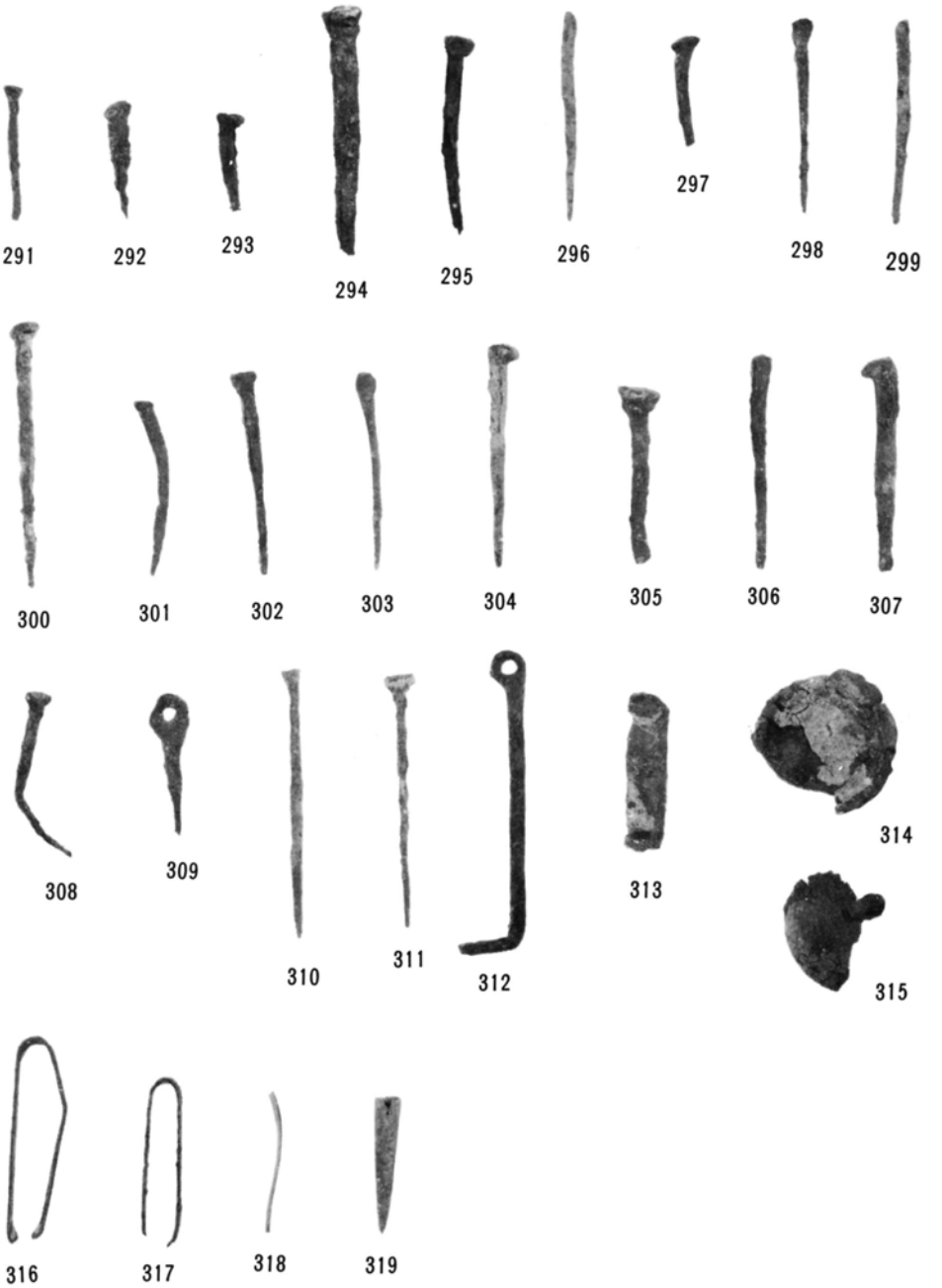
図版80　C地区出土石製品



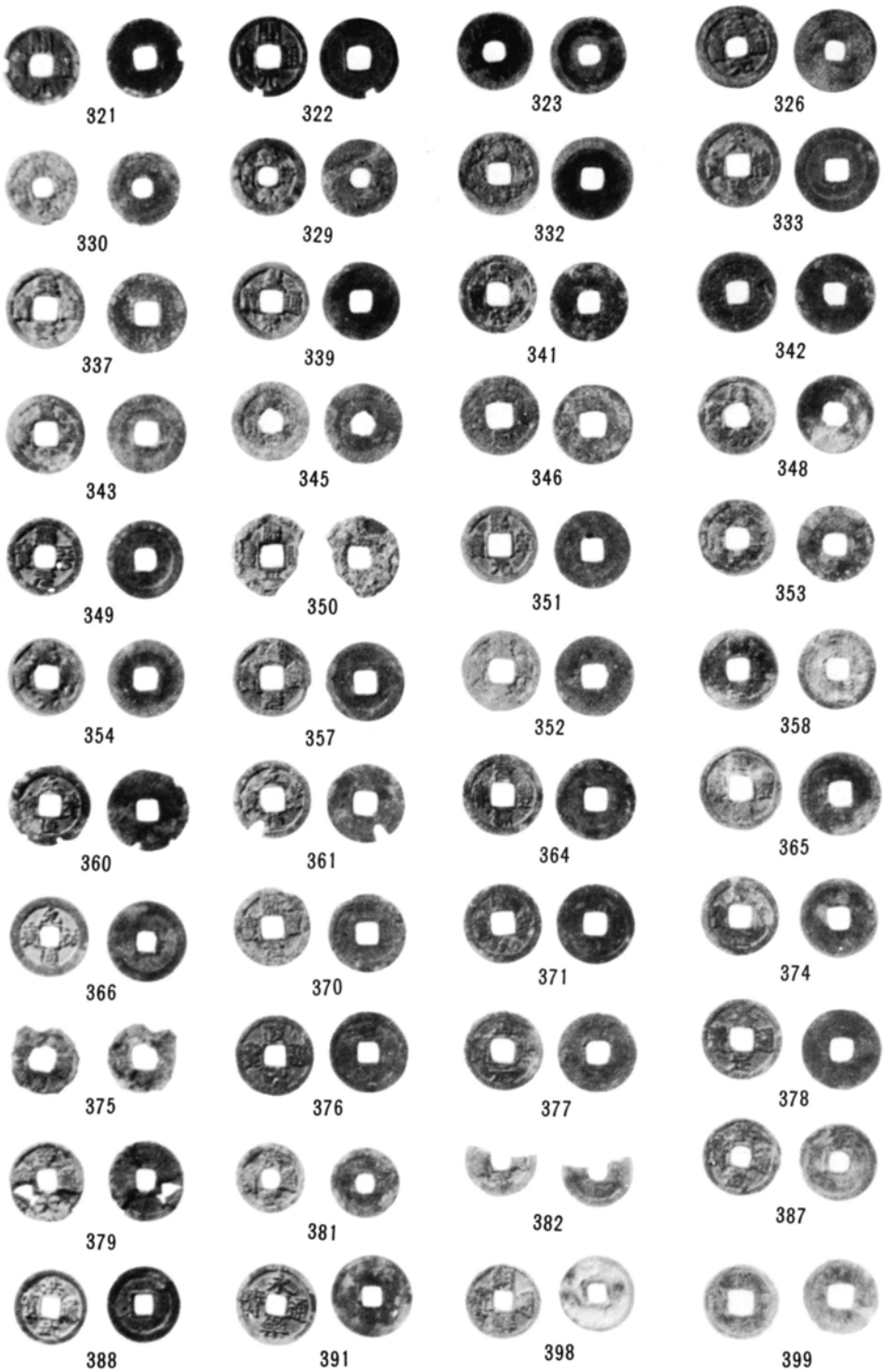
図版81　C地区出土土製品，鉄製品



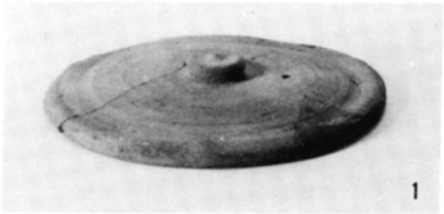
図版82　C地区出土鉄製品

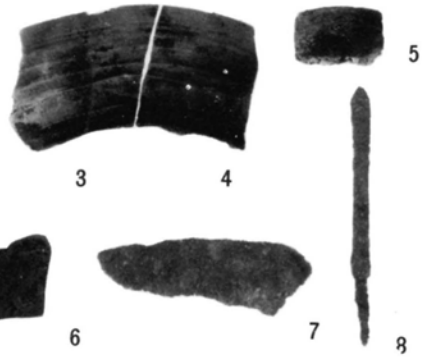


図版83　C地区出土鉄・銅製品

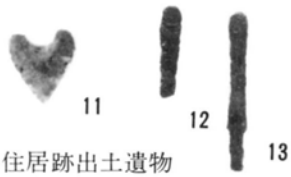


図版84　C地区出土古銭



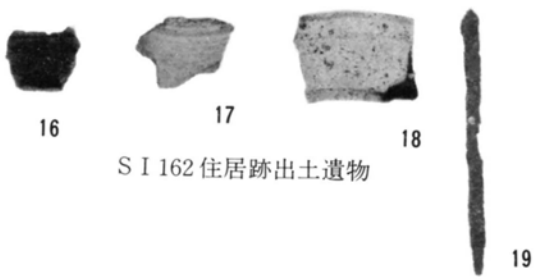


ＳＩ160住居跡出土遺物



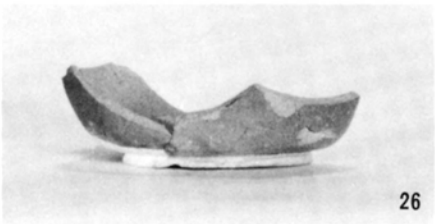
ＳＩ161住居跡出土遺物

ＳＩ163住居跡出土遺物

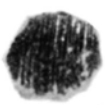


ＳＩ162住居跡出土遺物

図版85　Ｅ地区出土遺物

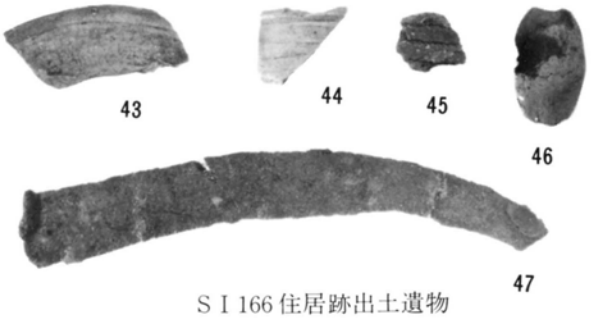


ＳＩ164 住居跡出土遺物

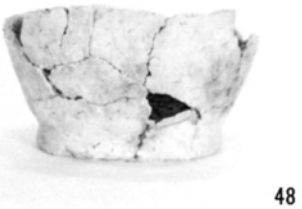


ＳＩ165 住居跡出土遺物

図版86　Ｅ地区出土遺物



ＳＩ166住居跡出土遺物



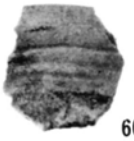
ＳＩ167住居跡出土遺物

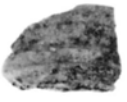
ＳＩ169住居跡出土遺物

ＳＩ170住居跡出土遺物

ＳＩ171住居跡出土遺物

図版87　Ｅ地区出土遺物

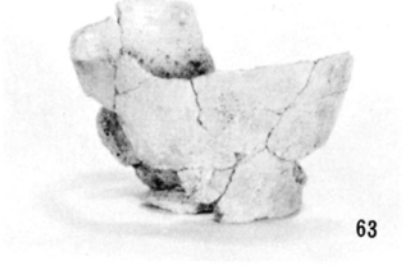




ＳＩ172住居跡出土遺物

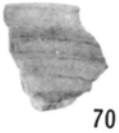
ＳＩ175住居跡出土遺物

ＳＩ173住居跡出土遺物



ＳＩ174住居跡出土遺物

ＳＩ176住居跡出土遺物



図版88　Ｅ地区出土遺物

72

73

74

ＳＩ178住居跡出土遺物

図版89　Ｅ地区出土遺物

75

77

78

80

79

81

82

83

84

85

ＳＩ179住居跡出土遺物

図版90　Ｅ地区出土遺物

ＳＩ180住居跡出土遺物

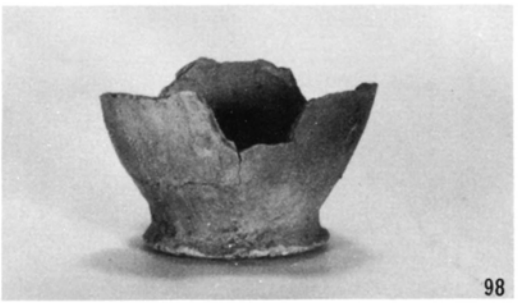
ＳＩ181住居跡出土遺物

図版91　Ｅ地区出土遺物

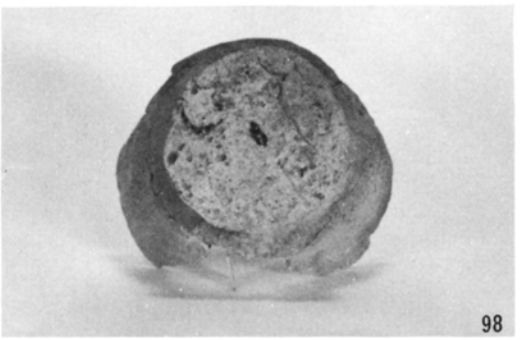
94

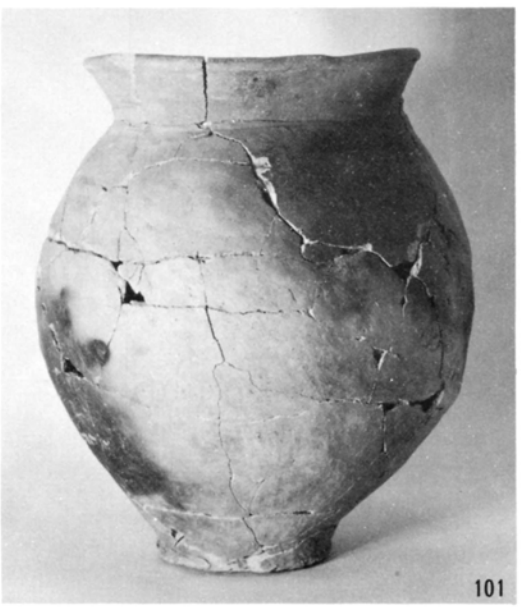
96

97


98

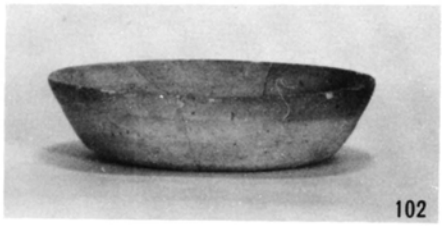
100


98


101

ＳＩ182住居跡出土遺物

図版92　Ｅ地区出土遺物


102

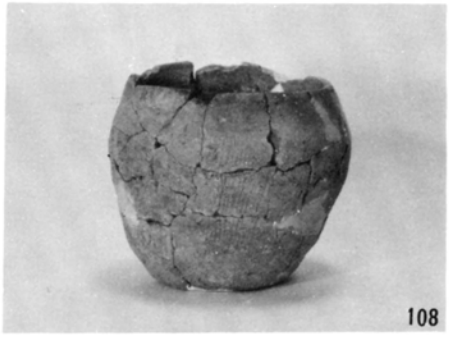
103

ＳＩ183住居跡出土遺物

104

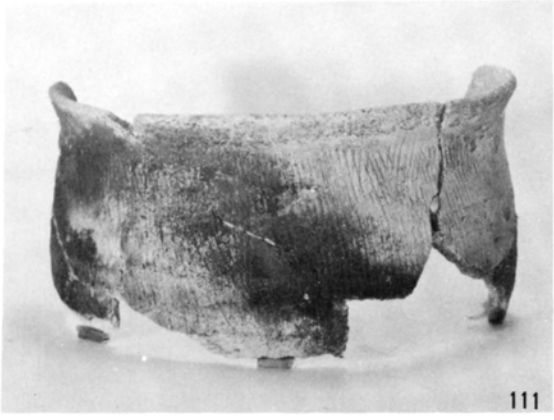
106

107


108

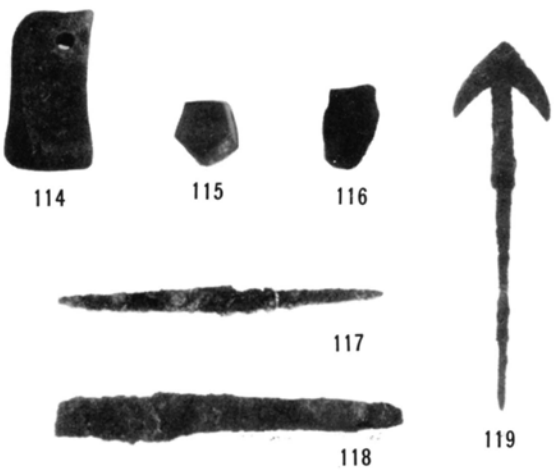
109

110

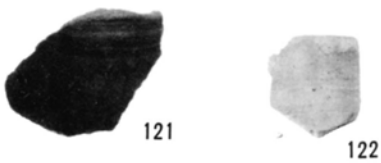

111

ＳＩ187住居跡出土遺物

図版93　Ｅ地区出土遺物



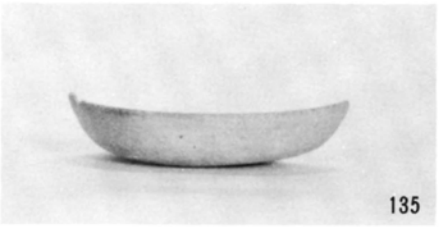
ＳＩ187住居跡出土遺物

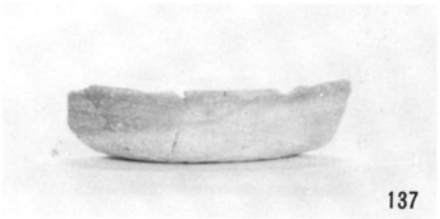


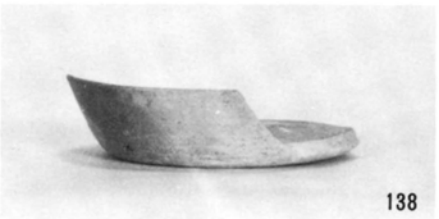
ＳＩ190住居跡出土遺物

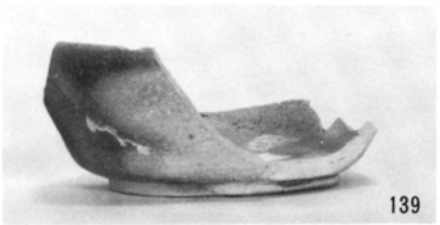
ＳＤ193溝状遺構出土遺物

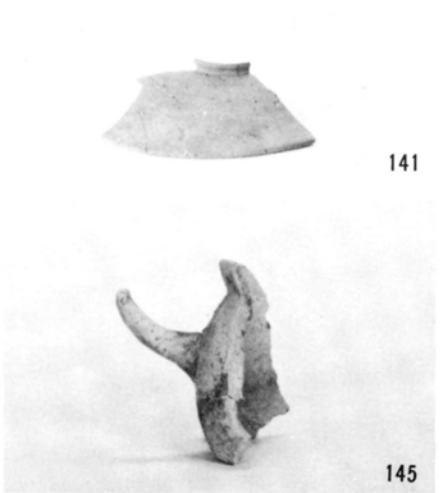
図版94　Ｅ地区出土遺物





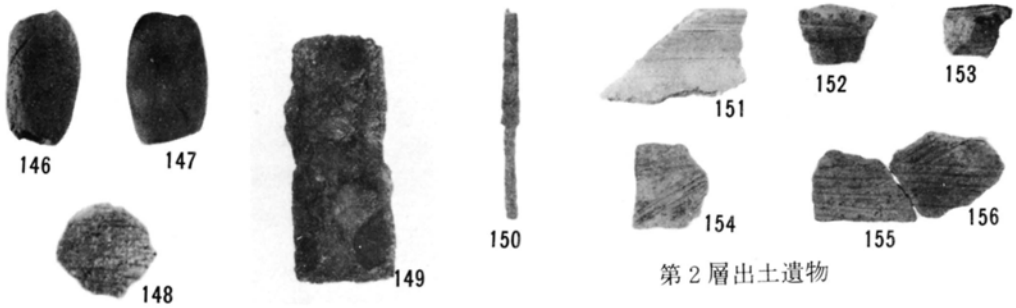




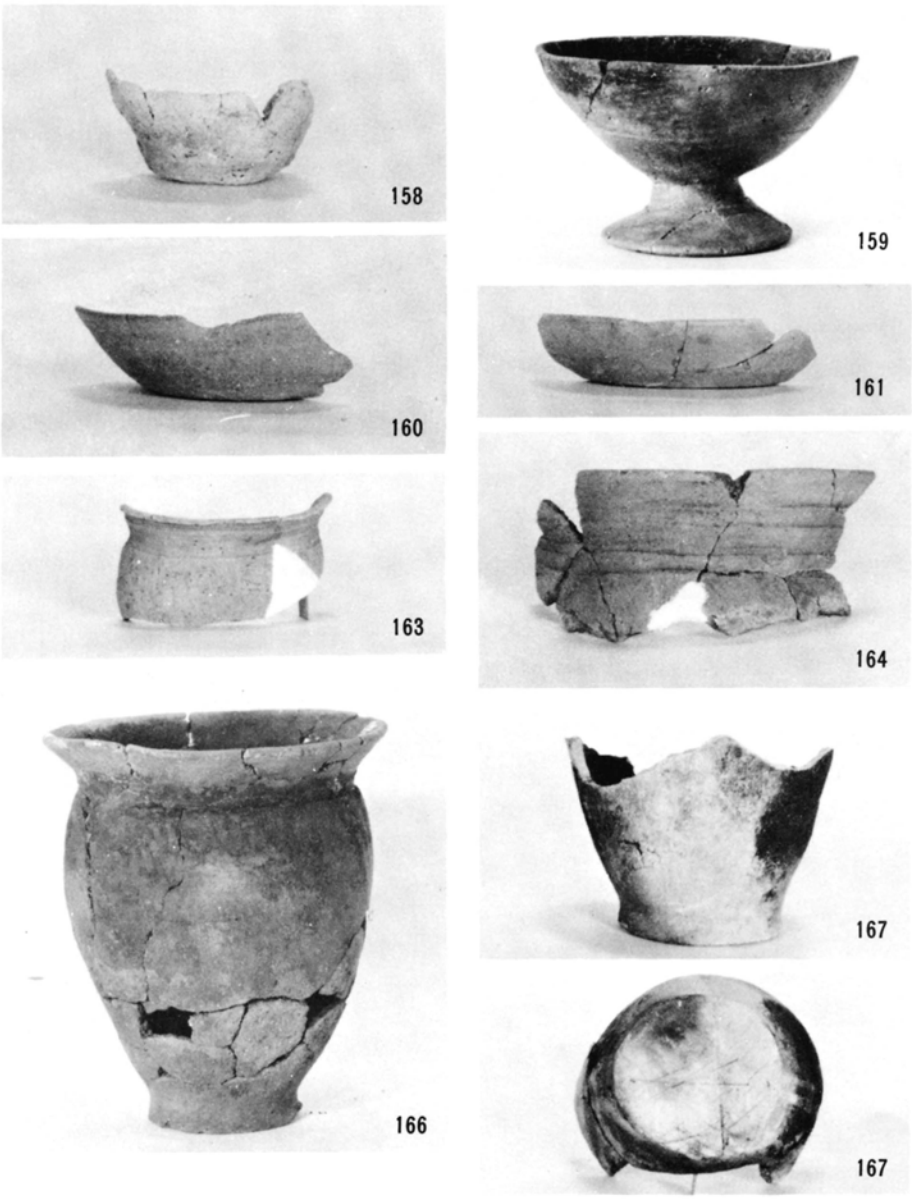


第２層出土遺物

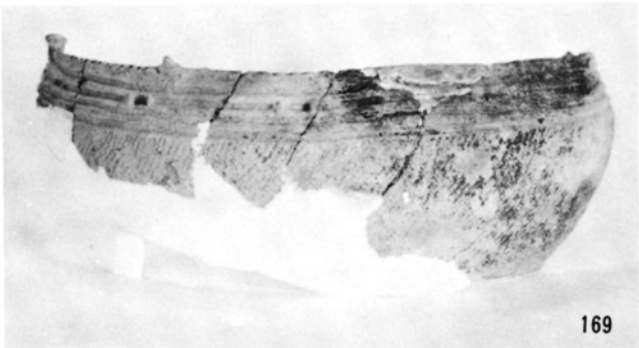
図版95　Ｅ地区出土遺物



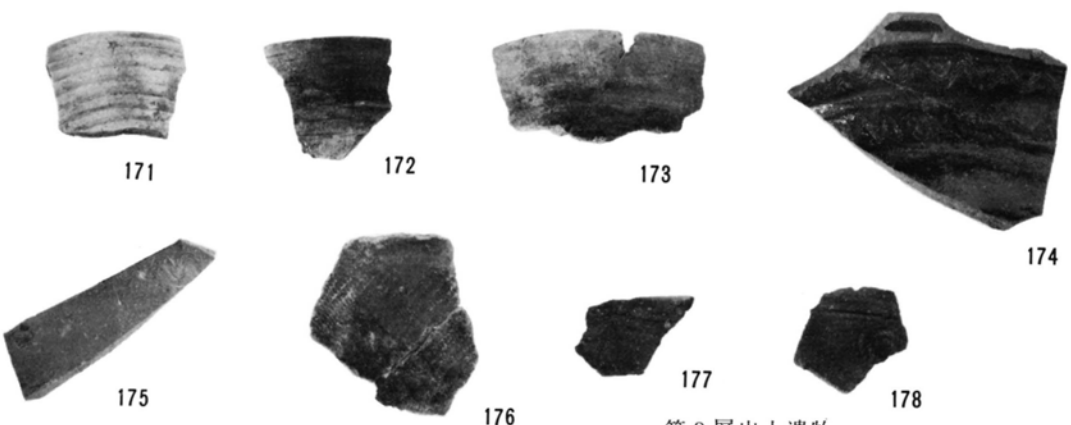
第２層出土遺物



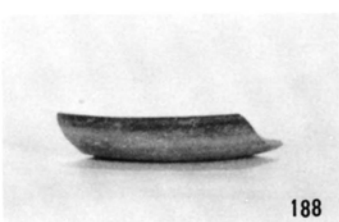
図版96　Ｅ地区出土遺物　　第３層出土遺物



第３層出土遺物

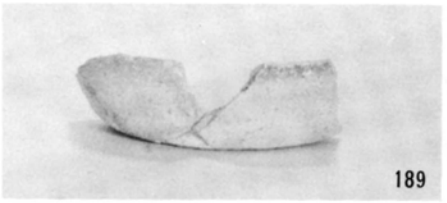


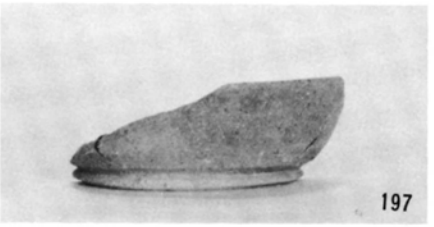
第３層出土遺物

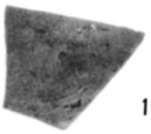


茶褐色砂質土出土遺物

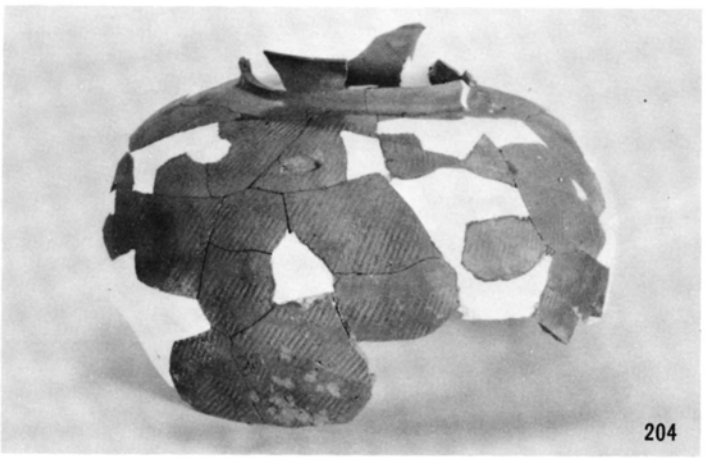
図版97　Ｅ地区出土遺物







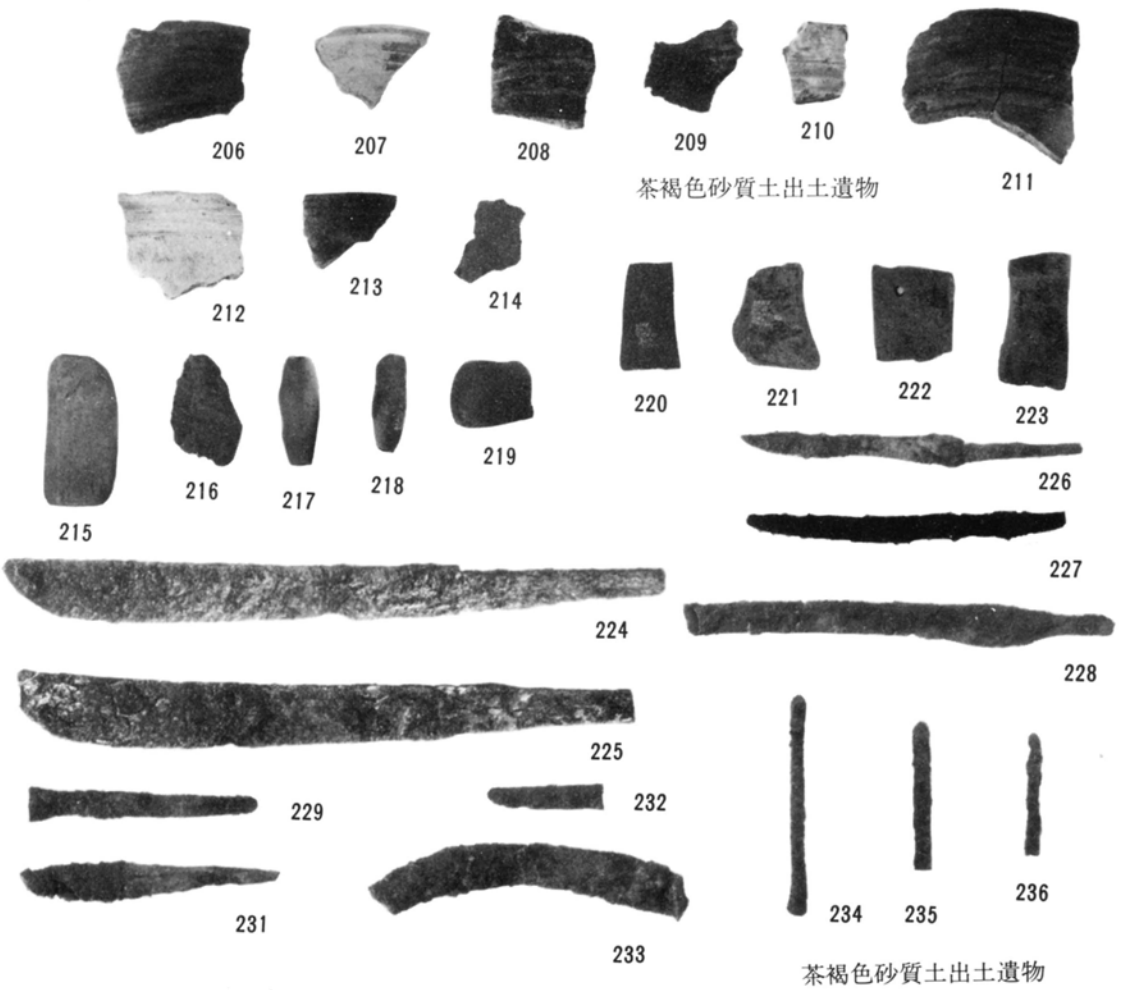
茶褐色砂質土出土遺物



図版98　E地区出土遺物

茶褐色砂質土出土遺物

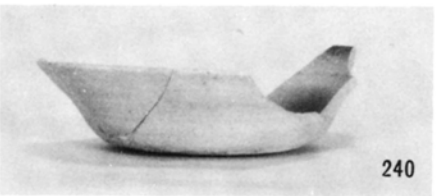
茶褐色砂質土
出土遺物



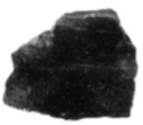
茶褐色砂質土出土遺物

茶褐色砂質土出土遺物

図版99　E地区出土遺物



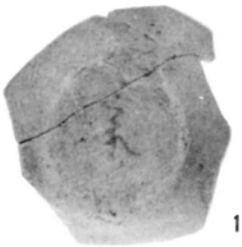
赤褐色砂質土出土遺物

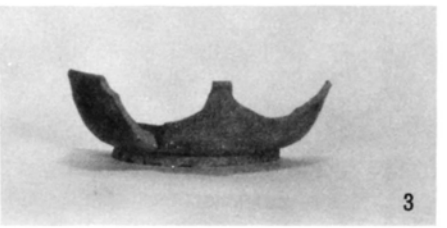


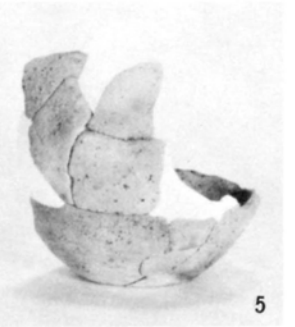
赤褐色砂質土出土遺物

出土地点不明遺物

図版100　E地区出土遺物


1


3


5

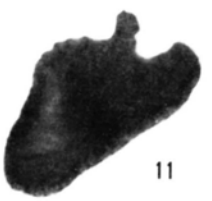
6

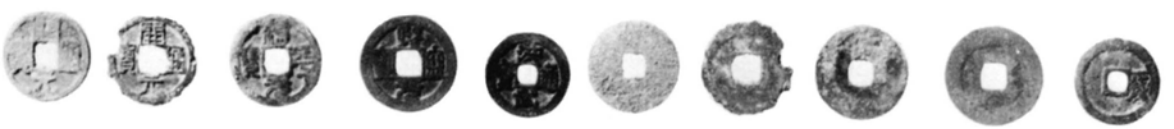
7

8

9

10


11



図版101　昭和52年度分布調査出土遺物

発行　昭和56年３月　秋田地所㈲
秋田市教育委員会　秋田マイクロ写真印刷㈱